

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第179集

上鬼柳Ⅰ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

上鬼柳Ⅰ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成2年度・3年度に発掘調査した上鬼柳Ⅰ遺跡の調査結果をまとめたものであります。上鬼柳Ⅰ遺跡は、和賀川右岸の河岸段丘上に立地し、調査の結果、弥生時代の住居跡や平安時代の火葬墓などの遺構と縄文・弥生時代から平安時代までの遺物が発見されるなど、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、北上市・金ヶ崎町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成4年7月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 工藤 巖

例 言

- 1 本報告書は、岩手県北上市鬼柳町上鬼柳第2地割214ほかに所在する上^{かみおにやなぎ}鬼柳I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は東北横断自動車道秋田線建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査略号は次のとおりである。
遺跡番号 ME 64 - 2042 遺跡調査略号 KO I - 90・91
- 4 発掘調査は平成2年度と平成3年度の2年度にわたって実施した。調査期間、調査面積、調査担当者は次のとおりである。

	調査期間	調査面積	調査担当者
平成2年度	4月13日～10月11日	7.400㎡	佐々木信一 森下 宏
平成3年度	4月12日～5月23日	1.300㎡	佐々木信一 鎌田精造
- 5 整理期間と整理担当者（執筆者）は次のとおりである。

平成2年11月1日～平成3年3月31日	佐々木信一
平成3年11月1日～平成4年3月31日	佐々木信一
- 6 各種鑑定にあたっては、次の方々に依頼した。

人骨の鑑定	百々幸雄氏（札幌医科大学解剖学教室）
火山灰産地同定	三辻利一氏（奈良教育大学）
石質鑑定	佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）
- 7 野外調査にあたっては、北上市・金ヶ崎町教育委員会及び地元の方々の御協力をいただいた。
- 8 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序
例言

本 文

I 調査に至る経過	1	4 陥し穴状遺構	39
II 遺跡の立地と環境	1	5 土坑	47
1 位置の位置	1	6 炉跡	67
2 遺跡の立地と周辺の地形	1	7 焼土遺構	68
3 基本層序	4	8 溝跡	71
4 周辺の遺跡	5	9 遺構外の出土遺物	85
III 野外調査と整理の方法	9	V まとめ	107
1 野外調査	9	VI 鑑定・分析結果	111
2 室内整理	10	・上鬼柳 I 遺跡 平安時代の土師器鉢に埋納された火葬人骨	111
IV 検出された遺構と出土遺物	13	・上鬼柳遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析	123
1 竪穴住居跡	13		
2 掘立柱建物跡	31		
3 墓壇	36		

表

第1表 周辺の遺跡一覧表	6
第2表 石器・石製品一覧表	106

図 版

第1図 遺跡位置図	2	第5図 上鬼柳 I 遺跡遺構配置図	11
第2図 土層断面図	4	第6図 B I a 6 住居跡	14
第3図 周辺の遺跡位置図	7	第7図 B II c 9 住居跡	15
第4図 スクリントーン・土器実測図 凡例	10	第8図 B II e 7 住居跡(1)	16
		第9図 B II e 7 住居跡(2)	17

第10图	B II e 7 住居跡出土遺物(1) ……	18			
第11图	B II e 7 住居跡出土遺物(2) ……	19			
第12图	B III b 1 住居跡(1) ……	20			
第13图	B III b 1 住居跡(2) ……	21			
第14图	B III b 1 住居跡出土遺物 ……	23			
第15图	B III d 5 住居跡 ……	25			
第16图	B III d 5 住居跡出土遺物 ……	26			
第17图	B III e 6 住居跡(1) ……	27			
第18图	B III e 6 住居跡(2)・出土遺物 ……	28			
第19图	B III f 0 住居跡・出土遺物 ……	30			
第20图	C III b 2 掘立柱建物跡 ……	32			
第21图	C III b 2 掘立柱建物跡出土遺物 ……………	33			
第22图	C III e 3 掘立柱建物跡・出土遺物 ……………	35			
第23图	土壙墓・火葬墓、出土遺物 ……	38			
第24图	A II h 0 陥し穴状遺構 ……	39			
第25图	B I g 7 陥し穴状遺構 ……	40			
第26图	B II a 9 陥し穴状遺構 ……	41			
第27图	B II c 2 陥し穴状遺構 ……	42			
第28图	B II h 8 陥し穴状遺構 ……	43			
第29图	C III c 2 陥し穴状遺構 ……	44			
第30图	D IV b 4 陥し穴状遺構 ……	45			
第31图	D V d 0 陥し穴状遺構 ……	46			
第32图	A II h 0 ①・②・③・B I a 6 土 坑 ……	48			
第33图	B I b 6・B II c 8・B II d 5・ B II d 6・B II e 6 ①土坑 ……	51			
第34图	B II e 6 ②・B II d 4 ①・②・③ 土坑 ……	53			
第35图	B II f 8・B II g 5・B II g 8・ B II h 8・B III c 0・B III d 3 土 坑 ……	56			
第36图	B III e 3 ①・②・B III e 5・B III f 5 ①土坑 ……	58			
第37图	B III e 5 土坑出土遺物 ……	59			
第38图	B III f 5 ②・B III g 3・B III g 4 土坑 ……	61			
第39图	B III h 6・B III i 0・B III i 2・ B III i 4 土坑 ……	63			
第40图	B III j 1・C II g 9・C III b 4・ D IV c 6 土坑 ……	65			
第41图	B I a 0 炉跡・出土遺物 ……	67			
第42图	1号焼土遺構 ……	69			
第43图	2号焼土遺構 ……	70			
第44图	3号焼土遺構 ……	70			
第45图	7号溝跡出土遺物 ……	72			
第46图	12号溝跡出土遺物 ……	74			
第47图	1・2号溝跡 ……	75			
第48图	3・4号溝跡 ……	77			
第49图	5・6号溝跡 ……	79			
第50图	7・8・9・10号溝跡 ……	81			
第51图	11号溝跡 ……	81			
第52图	12・13号溝跡 ……	83			
第53图	遺構外出土遺物(1) ……	92			
第54图	遺構外出土遺物(2) ……	93			
第55图	遺構外出土遺物(3) ……	94			
第56图	遺構外出土遺物(4) ……	95			
第57图	遺構外出土遺物(5) ……	96			
第58图	遺構外出土遺物(6) ……	97			
第59图	遺構外出土遺物(7) ……	98			
第60图	遺構外出土遺物(8) ……	99			
第61图	遺構外出土遺物(9) ……	102			
第62图	遺構外出土遺物(10) ……	103			

写 真 图 版

图版 1	遺跡全景	127
图版 2	遺跡遠景・近景	128
图版 3	調査区域全景	129
图版 4	基本土層・作業風景	130
图版 5	B I a 6 住居跡	131
图版 6	B II c 9 住居跡	132
图版 7	B II e 7 住居跡	133
图版 8	B III b 1 住居跡	134
图版 9	B III d 5 住居跡	135
图版 10	B III e 6 住居跡	136
图版 11	B III f 0 住居跡	137
图版 12	C III b 2 掘立柱建物跡	138
图版 13	C III b 2・C III e 3 掘立柱建物跡	139
图版 14	墓壇	140
图版 15	A II h 0・B I g 7 陥し穴状遺構	141
图版 16	B II a 9・B II c 2 陥し穴状遺構	142
图版 17	B II h 8・C III c 2 陥し穴状遺構	143
图版 18	D IV b 4・D V d 0 陥し穴状遺構	144
图版 19	A II h 0 ①・②・③・B I a 6 土 坑	145
图版 20	B I a 6・B II c 8・B II d 5・ B II d 6 土坑	146
图版 21	B II e 6 ①・②・B II f 4 ①・②	

	土坑	147
图版 22	B II f 4 ③・B II f 8・B II g 5・B II g 8 土坑	148
图版 23	B II h 8・B III c 0・B III d 3・ B III e 3 ①土坑	149
图版 24	B III e 3 ②・B III e 5・B III f 5 ①・②土坑	150
图版 25	B III g 3・B III g 4・B III h 6・ B III i 0 土坑	151
图版 26	B III i 2・B III i 4・B III j 1・ C II g 9 土坑	152
图版 27	C III b 4・D IV c 6 土坑、B II a 0 炉跡	153
图版 28	1・2 号烧土	154
图版 29	3 号烧土、1・2 号溝跡	155
图版 30	3・4 号溝跡	156
图版 31	5・6 号溝跡	157
图版 32	7・8・9 号溝跡	158
图版 33	10・11・12 号溝跡	159
图版 34	12・13 号溝跡	160
图版 35	遺構内出土遺物(1)	161
图版 36	遺構内出土遺物(2)	162
图版 37	遺構内出土遺物(3)	163
图版 38	遺構内出土遺物(4)	164
图版 39	遺構内出土遺物(5)	165
图版 40	遺構外出土遺物(1)	166
图版 41	遺構外出土遺物(2)	167
图版 42	遺構外出土遺物(3)	168

図版 43	遺構外出土遺物(4)……………	169	図版 47	遺構外出土遺物(8)……………	173
図版 44	遺構外出土遺物(5)……………	170	図版 48	遺構外出土遺物(9)……………	174
図版 45	遺構外出土遺物(6)……………	171	図版 49	遺構外出土遺物(10)……………	175
図版 46	遺構外出土遺物(7)……………	172	図版 50	遺構外出土遺物(11)……………	176

I 調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は、岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長 107 km の高速道路である。このうち、第 9 次・第 10 次施行命令区間は、北上ジャンクションから秋田県境までの延長 33.9 km である。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和 56 年から分布調査を行っており、昭和 62 年 4 月 13 日付け「仙建北工第 35 号」による依頼を受けて分布調査結果を同年 5 月 25 日付け「教文第 117 号」により日本道路公団仙台建設局に回答し、その取り扱いについて協議が重ねられ、止むを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。発掘調査の実施については、昭和 63 年度以降、岩手県教育委員会が発掘調査事業を日本道路公団仙台建設局に照会し、回答を受けたのち日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の 3 者の協議を経て、埋蔵文化財センターが担当することとした。事業着手後に調査の変更がある場合もその都度協議しながら進め、岩手県教育委員会文化課の調整を経て事業計画を変更して進めた。

本報告書の上鬼柳 I 遺跡の調査は、平成 2 年 3 月 2 日付け「教文第 731 号」による平成 2 年度埋蔵文化財調査事業の通知を受け、平成 2 年 4 月 1 日付け委託契約により調査に着手したが、家屋移転の遅れた部分の調査は次年度に繰り越すこととした。3 年度の調査は 3 年 2 月 7 日付け「教文第 899 号」による事業の通知を受け、4 月 1 日付け契約により着手したものである。

II 遺跡の立地と環境

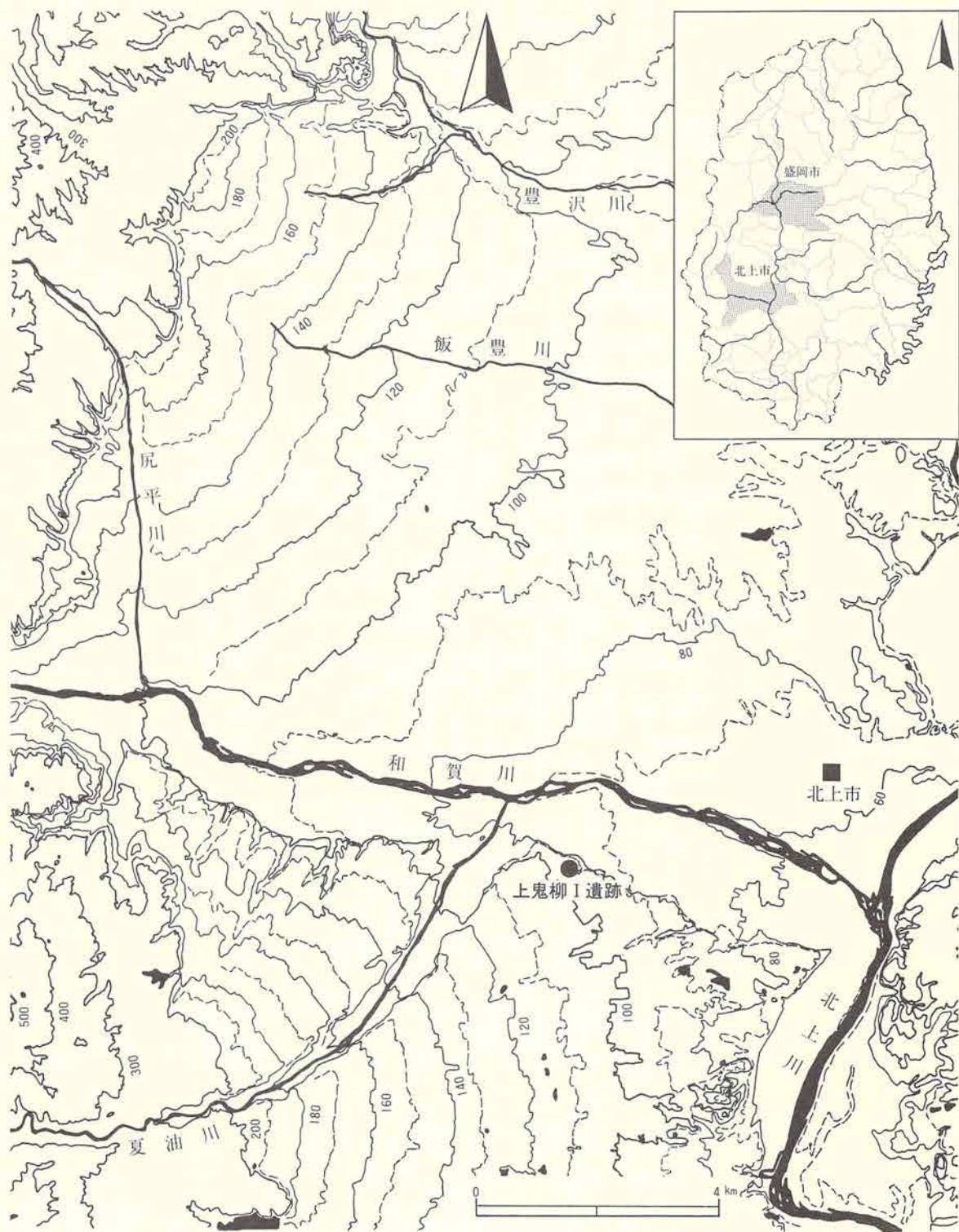
1 遺跡の位置

上鬼柳 I 遺跡は岩手県北上市にあり、東日本旅客鉄道北上線江釣子駅の南南西約 2.3 km に位置する。地形図上では、国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「北上」N J - 54 - 14 - 13 (一関 13 号) の図幅に含まれ、北緯 39 度 17 分、東経 141 度 4 分付近に位置する。所在地番は、北上市鬼柳町上鬼柳第 2 地割 214 ほかである。

2 遺跡の立地と周辺の地形

北上市は、盛岡の南方約 64 km、岩手県南部の西側にあり、北に花巻市、西に沢内村・湯田町、南に江刺市・胆沢町・金ヶ崎町、東に東和町が隣接している。

主要交通路は、東北本線、東北新幹線、国道 4 号、東北縦貫自動車道が南北に縦断し、秋田県と岩手県を結ぶ東日本旅客鉄道北上線、国道 107 号が東西に横断している。



第1図 遺跡位置図

北上市は、岩手県で最も広い平野である北上盆地のほぼ中央に位置し、東側は古生代、中生代の岩石が分布する北上山地、西側には新生代になってから形成された奥羽山脈が南北に連なる。市の東側を北上川が南流し、西方から和賀川が東流して黒沢尻町の南東で北上川へ合流する。盆地西端部には、急激に成長した奥羽山脈側からの河川によって大量の土砂が供給され、多くの扇状地が形成されている。

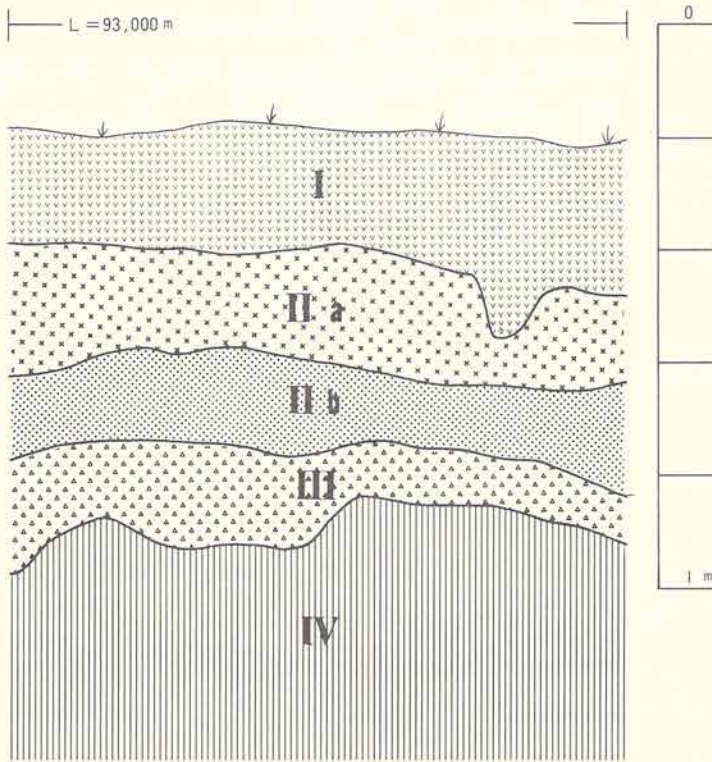
北上市はそれらの扇状地が開析されてできた段丘上に広がっている。それらの段丘は高位から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類されており、西根段丘はほとんどは奥羽山脈と北上山地の山麓部に分布している。村崎野段丘は花巻市飯豊、中笹間、北上市村崎野、相去、煤孫に分布し、村崎野浮石を含む火山灰が覆っている。金ヶ崎段丘は扇状地状の地形面のほとんどを占め、後藤野、岩崎新田に広がる地形面がそれである。この段丘が北上市付近では最も広く分布している。河岸平野は北上川、和賀川とそれら支流に沿って分布し、表面には旧河道の跡が網目状に残っており、自然堤防である微高地上には住居が並んでいる。特に和賀川南岸の段丘は明瞭な崖（比高 20～30 m）に区切られており、東北横断自動車道はこの段丘上を走ることになる。

本遺跡の所在する上鬼柳地区は、低位段丘と河岸平野とから成り立っている。この段丘は「六原台地」と呼ばれ、本遺跡はこの台地の北縁に位置している。現況は水田・畑地・山林である。標高は 91～93 m、和賀川との比高は 21～23 m である。本遺跡の西側は市道を挟んで岩崎台地遺跡群、東側は深い沢を挟んで上鬼柳Ⅱ遺跡に接している。

3 基本層序

本遺跡の基本層序は以下のとおりである。尚、土層断面図はグリッド BⅢ d 2 で作成したものである。

- I 層 黒褐色土 シルト 表土で遺跡全面を覆う。粘性があり、よくしまる。層厚は 20～40 cm である。
- II a 層 黒～黒褐色土 シルト 粘性があり、よくしまる。遺物を含む。層厚は 10～25 cm である。
- II b 層 黒～黒褐色土 シルト II a 層より粘性が弱く、しまりにも欠ける。遺物を多く含む。層厚は 10～20 cm である。本層とⅢ層が遺構検出面である。
- Ⅲ 層 暗褐色土 シルト 粘性があり、堅くしまる。遺物を含む。層厚は 8～20 cm である。
- Ⅳ 層 黄～明黄褐色土 粘土質シルト 基盤層である。堅くしまる。層厚は不明である。



第2図 土層断面図

4 周辺の遺跡

北上市には現在約 340 カ所の遺跡が記載されている（岩手県教育委員会文化課の遺跡台帳による）。和賀川を中心として遺跡の分布をみると、和賀川左岸では、中位段丘やその縁辺部及び開析された小支谷沿いに縄文時代の遺跡が比較的多く分布し、河岸低地にも若干認められる。調査された主な遺跡としては、鳩岡崎遺跡（縄文・奈良～平安時代の竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器）、新平遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器）、藤沢遺跡（平安時代の竪穴住居跡、溝状遺構、縄文土器）、九年橋遺跡（竪穴住居跡、土坑、縄文晩期の土器）等が上げられる。また、低位段丘上や河岸低地に形成された自然堤防上には、奈良～平安時代にかけての遺跡が多く分布する傾向が認められる。調査された主な遺跡としては、下谷地遺跡（縄文土器、土師器、須恵器）、長沼古墳群、五条丸古墳群等があげられる。

和賀川右岸では丘陵の縁辺や中～低位段丘及び開析された支谷に沿って縄文時代～平安時代の遺跡が分布し、段丘の北側縁辺部には湧水や深く入り込んだ沢、急崖を利用した城館遺跡が分布している。調査された主な遺跡としてはまず和賀仙人遺跡があげられる。この遺跡は昭和 40 年と翌年の 2 次にわたって調査が行われ、段丘構成層から旧石器が出土している。そのほか、低位段丘上に立地する下岩沢 I 遺跡（土坑、縄文土器、弥生土器）、岩崎城跡（土塁、溝、掘立柱建物跡、中近世陶器）、岩崎城跡の西半分にあたる梅ノ木遺跡（縄文・古代・中世竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、縄文土器）、成沢遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土師器）等があげられる。中位段丘上に立地する遺跡としては下成沢遺跡（旧石器、縄文土器、土師器）、上大谷遺跡（平安時代の竪穴住居跡、縄文土器、土師器）等があげられる。

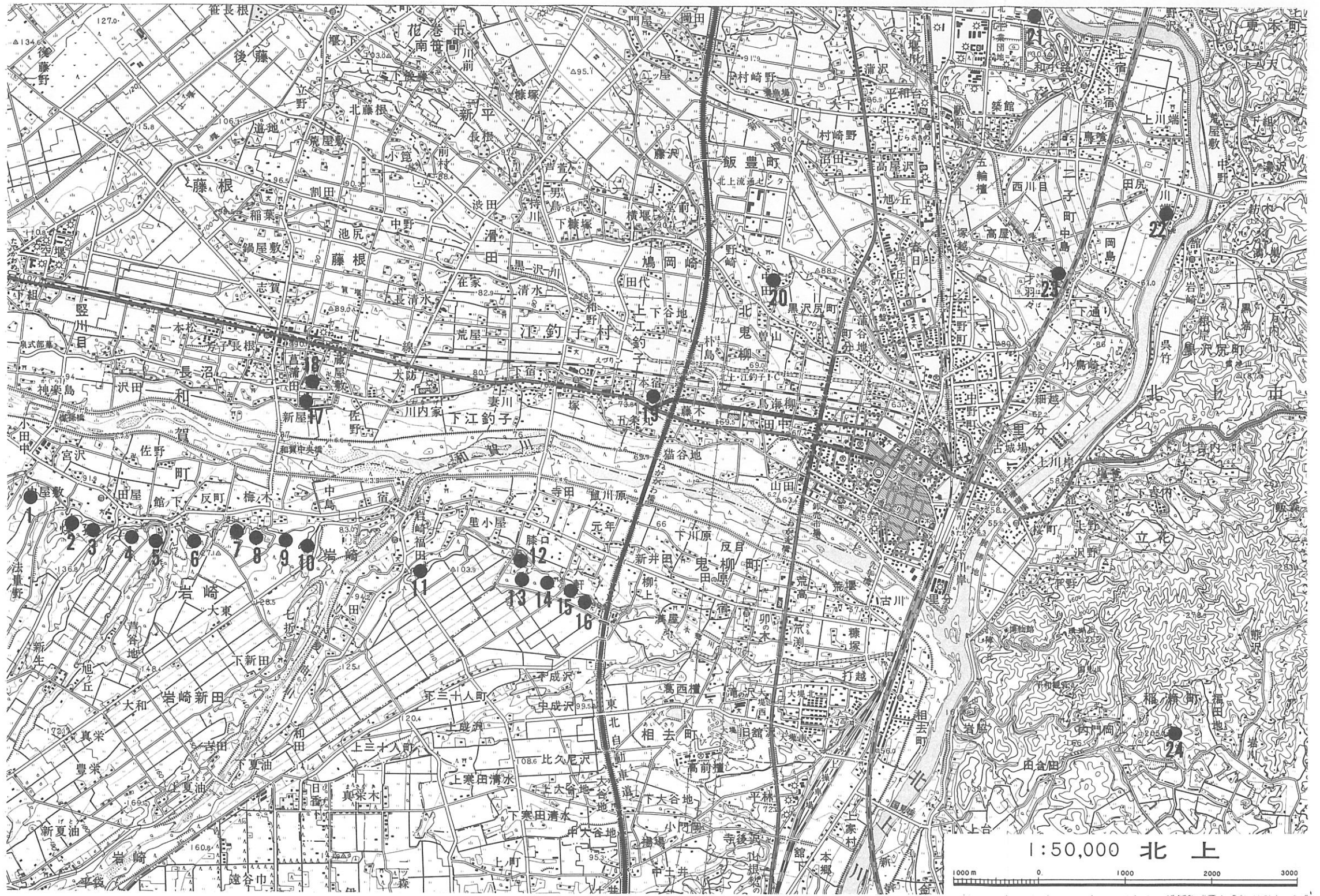
また、平成元年度から 3 年度にかけて、東北横断自動車道秋田線建設に関連して和賀川南岸の低位段丘上に立地する 22 カ所の遺跡が調査されている。調査の結果、田中館跡（土坑、縄文土器、土師器）、八幡野 II 遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、縄文土器）、八幡館跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、土師器）、月館跡（堀跡、柵列状遺構、陥し穴状遺構、縄文土器）、石曾根遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器）、本郷遺跡（縄文、平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器）、林崎遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器）、中屋敷遺跡（弥生時代のフラスコ状土坑、土坑、陥し穴状遺構、溝跡、焼土遺構、弥生土器）、法量野 I 遺跡（土坑、陥し穴状遺構、溝跡、焼土遺構、縄文土器）、媒孫遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器、平安時代の竪穴住居跡、土師器、須恵器）、観音館跡（陥し穴状遺構、時期不明の掘立柱建物跡）、上反町遺跡（堀跡、陥し穴状遺構、縄文土器、弥生土器）、兵庫館跡（平安時代の竪穴住居跡、中世の館に伴う堀跡・土塁・柵列・門跡、弥生時代の埋設土器・墓壇、時期不明の土坑、掘立柱建物跡）、梅ノ木台地 II 遺跡（弥生時代の埋設土器、弥生土器、平安時代の竪穴住居跡、土師器、

須恵器)、梅ノ木台地Ⅰ遺跡(陥し穴状遺構、焼土遺構、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器)、岩崎城西遺跡(溝跡、柱穴列、縄文土器、土師器、須恵器)、岩崎台地遺跡群(平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、古墳、土坑、陥し穴状遺構、土師器、須恵器)、上鬼柳Ⅰ遺跡(本遺跡)、上鬼柳Ⅱ遺跡(弥生・平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、焼土遺構、溝跡)、上鬼柳Ⅲ遺跡(縄文・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、周溝、土坑、陥し穴状遺構、土師器、須恵器)、上鬼柳Ⅳ遺跡(土坑、陥し穴状遺構、平安時代の竪穴住居跡・畑跡、縄文土器、弥生土器、土師器)、柳上遺跡(縄文・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、縄文土器、土師器)の遺構、遺物が発見されている。

本遺跡は弥生時代初頭の遺構・遺物を主体とするが、弥生時代の遺跡としては前出の中屋敷遺跡、上反町遺跡、兵庫館、梅ノ木台地Ⅰ遺跡、梅ノ木台地Ⅱ遺跡、上鬼柳Ⅱ遺跡の他に、念仏車遺跡、蔵屋敷遺跡、本宿遺跡、中田遺跡、物見崎遺跡、尻引遺跡、野田Ⅰ遺跡、八王寺森遺跡がある。特に、物見崎遺跡からは、弥生時代初頭の竪穴住居跡2棟が検出されている。

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺 構 ・ 遺 物
1	林 崎 館	縄文時代中期の竪穴式住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器(中期)
2	中 屋 敷	弥生時代のフラスコ状土坑、土坑、陥し穴状遺構、溝跡、焼土、弥生土器
3	法 量 野 Ⅰ	土坑、陥し穴状遺構、溝跡、焼土、縄文土器
4	煤 孫	縄文時代前～中期の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器(前～中期)、平安時代の竪穴住居跡、土師器、須恵器
5	観 音 館	陥し穴状遺構、時期不明の掘立柱建物跡
6	上 反 町	掘跡、陥し穴状遺構、縄文土器、弥生土器
7	兵 庫 館	弥生時代の埋設土器・墓塚、平安時代の竪穴住居跡、中世の館に伴う堀跡・土塁・柵列・門跡、土坑、掘立柱建物跡
8	梅ノ木台地Ⅱ	弥生時代の埋設土器、弥生土器、平安時代の竪穴住居跡、土師器、須恵器
9	梅ノ木台地Ⅰ	陥し穴状遺構、焼土、縄文土器、弥生時代(天王山式)、土師器、須恵器
10	岩 崎 城 西	溝跡、柱穴列、縄文土器、土師器、須恵器
11	岩崎台地遺跡群	陥し穴状遺構、古墳、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、土師器、須恵器
12	上鬼柳Ⅰ遺跡	本遺跡
13	上鬼柳Ⅱ遺跡	弥生・平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、焼土、溝跡
14	上鬼柳Ⅲ遺跡	縄文時代中期の竪穴住居跡、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、周溝、土坑、陥し穴状遺構、土師器、須恵器
15	上鬼柳Ⅳ遺跡	土坑、陥し穴状遺構、縄文土器(中～後期)、弥生土器、平安時代の竪穴住居跡・畑跡、土師器
16	柳 上	縄文時代中期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、縄文土器、平安時代の竪穴住居跡、土師器
17	念 仏 車	縄文土器(前～後期)、弥生土器
18	蔵 屋 敷	弥生土器(八起島式)
19	本 宿	縄文土器、土坑(弥生時代、天王山式期)、掘立柱建物跡、土坑、溝跡
20	中 田	弥生土器(天王山式)
21	物 見 崎	縄文時代前期の竪穴住居跡、縄文土器(前・後期)、弥生時代の竪穴住居跡、弥生土器(八起島式、天王山式)
22	尻 引	縄文土器(晩期)、弥生土器
23	野 田 Ⅰ	縄文土器(後・晩期)、弥生土器、土師器、須恵器
24	八 王 寺 森	弥生土器



第3図 周辺の遺跡位置図

Ⅲ 野外調査と整理の方法

1 野外調査

(1) グリッドの設定

基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区を設定した。調査区域の西側に基準点1を、東側に基準点2をそれぞれ設定した。基準点の成果値は以下のとおりである。

基準点1 $X = -80,340.000$ $Y = 20,260.000$ $H = 93.204\text{m}$

基準点2 $X = -80,340.000$ $Y = 20,340.000$ $H = 92.334\text{m}$

この2つの基準点を結ぶ線を基準線とし、基準線上を基準点1から西に40m進み、更に基準線に直行する線上を北へ80m進んだ点を原点とした。原点より基準線に平行ないし直行するように40m毎に区切り、大区画とした。大区画を更に4m毎に区切り、小区画とした。

グリッドの名称は南北方向はアルファベット、東西方向は数字を用い、その組み合わせによった。大グリッド名は大文字のアルファベットとローマ数字、小グリッド名は大グリッド名を冠した後、小文字のアルファベットと算用数字を用いて、A I a 0のように表した。

(2) 粗掘り・遺構検出

調査区域内の数ヵ所にトレンチを入れて検出面までの深さや層序の確認をした後、表土の除去は重機で行った。遺構検出面までの土層の除去は人力で行った。遺構の検出面はⅡb層下位及びⅢ層である。検出された遺構には大グリッド名と小グリッド名を組み合わせ、B I a 6住居跡のように命名した。

(3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構の精査は住居跡を4分法、掘立柱建物跡・墓壇・陥し穴状遺構・炉跡・焼土を2分法、溝跡については数ヵ所に土層確認のためのベルトを残して掘り下げた。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録をとった。出土遺物の取り上げは、遺構内のは遺構名、遺構外のは小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。

(4) 実 測

実測は簡易遣り方測量で行った。実測図は原則として20分の1の縮尺で平面図・断面図を作成したが、住居跡の炉などの細部については10分の1の縮尺で図面を作成した。

(5) 写真撮影

写真撮影には、6×7cm判モノクロ1台、35mm判のモノクロとカラーリバーサル各1台を使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。

2 室内整理

(1) 作業手順

遺構については現地で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。遺物については、接合、復元、仕分け、登録を行った後、原則として実測図の作成、トレース、写真撮影、図版作成の順に進めた。

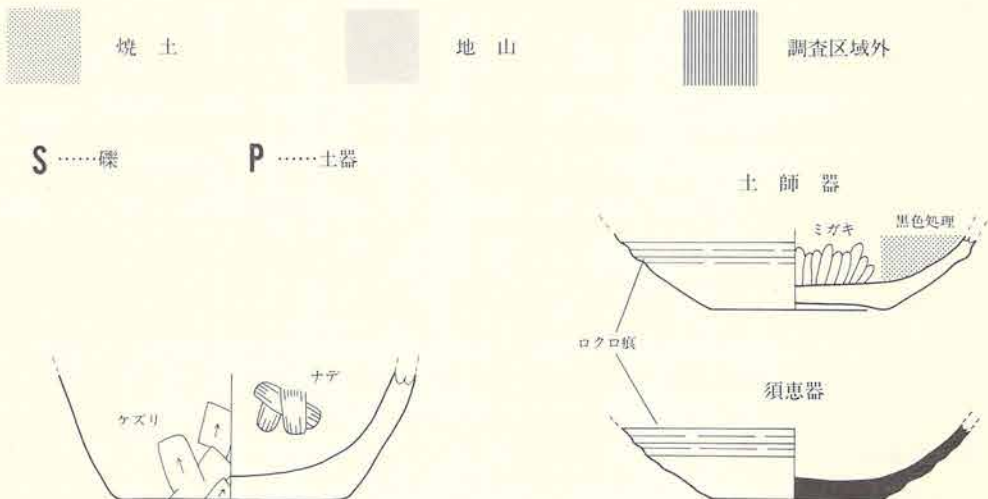
(2) 遺構図版・遺物図版

本報告書に掲載した遺構図版の縮尺は以下のとおりである。

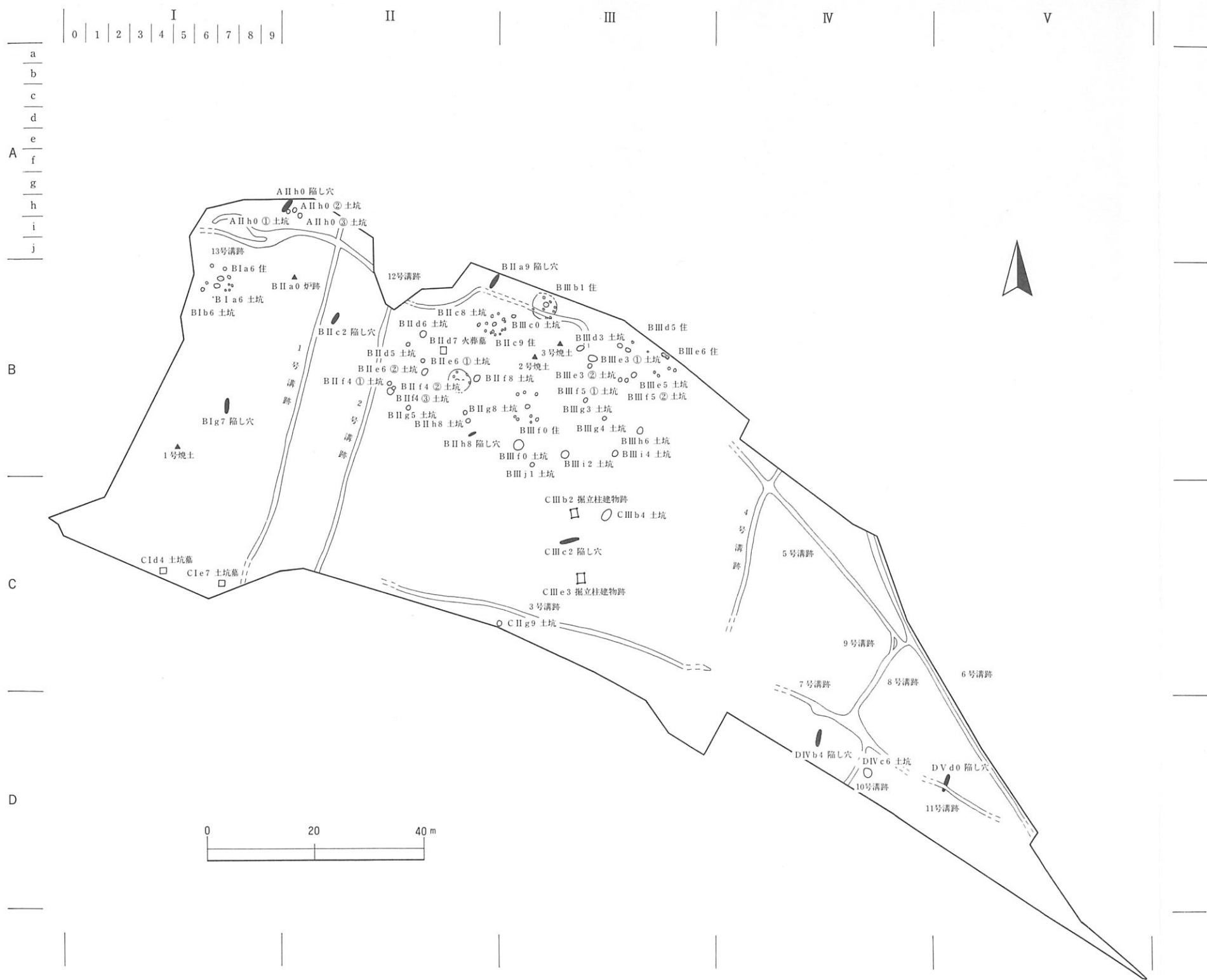
- ・住居跡の平面図・断面図…… 1/40 炉の断面図…… 1/20
- ・掘立柱建物跡・墓壇・陥し穴状遺構・土坑の平面図・断面図…… 1/40
- ・炉跡・焼土遺構の平面図・断面図…… 1/40
- ・溝跡の平面図…… 1/80、1/200 断面図…… 1/50

また、遺物図版の縮尺は、土器は $\frac{1}{3}$ または $\frac{1}{4}$ 、拓本は $\frac{1}{3}$ 、礫石器は $\frac{1}{4}$ 、剥片石器は $\frac{1}{2}$ である。遺物写真は原則として $\frac{1}{3}$ の縮尺を用いたが、これに該当しないものは縮尺率を別に付してある。また、遺構やその他の写真の縮尺は不定である。なお、遺物図版掲載番号と写真図版掲載番号とは統一してある。

遺構図版・遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリーントーンの種類と土器実測図の凡例は以下のとおりである。



第4図 スクリントーン・土器実測図凡例



第5図 上鬼柳I遺跡 遺構配置図

IV 検出された遺構と出土遺物

調査の結果、竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡2棟、墓壇3基、陥し穴状遺構8基、土坑34基、炉跡1基、焼土遺構3基、溝跡13条が検出された。また、出土遺物の総量はコンテナ5箱分である。土器は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器で、特に弥生土器の出土が多い。石器は石鏃、石筥、凹石、磨石などである。

1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は7棟検出されている。そのうち2棟は平面形を特定でき、円形と楕円形をしている。また、炉の周辺と壁際に柱穴がそれぞれ数個ずつ検出されている。残り5棟は柱穴と炉のみの検出であり、規模・形状は特定できないが、前2者と同様の柱穴配置をしていたものと考え、特に壁柱穴の配置から規模・形状を推定して記載してある。

7棟のうち5棟は、出土遺物から弥生時代初頭の竪穴住居跡と推定される。残り2棟は出土遺物はないが、検出面が他の5棟と同じことや周辺から弥生時代初頭の遺物が出土していることから、同時代の竪穴住居跡と推定される。

B I a 6 住居跡

遺構（第6図、写真図版5）

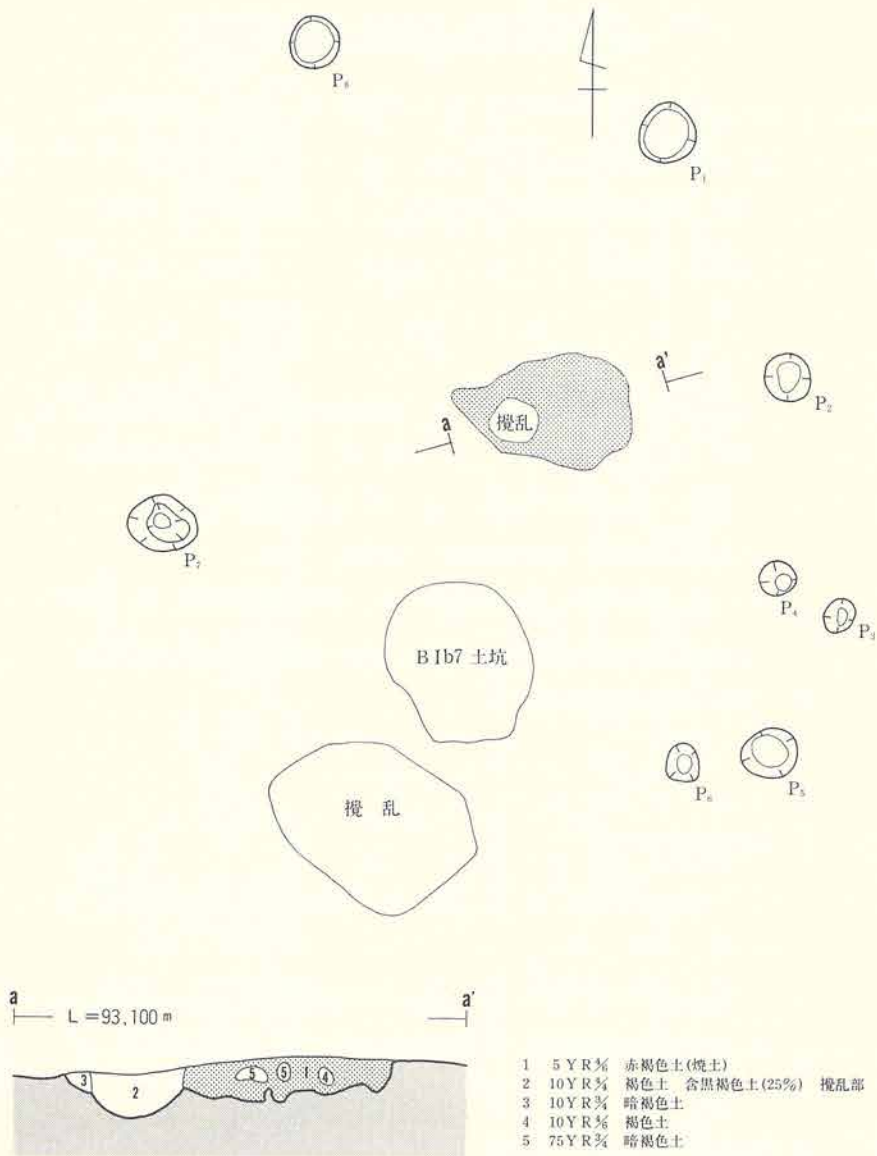
調査区域北西端グリッドB I a 6、a 7にまたがって位置し、13号溝跡の南約5mにある。検出面はⅢ層である。

検出できたのは柱穴と炉のみである。壁が遺存していないため規模・形状は特定できないが、柱穴配置からほぼ4×5mの楕円形と推定される。床面はほぼ平坦で強くしまっている。柱穴はP₁～P₈の8個が検出されており、径は15～30×20～35cm、深さは12～30cmである。柱穴の埋土は黒褐色～暗褐色土である。配置から考え、炉の南西側の攪乱部に柱穴が更に1個あった可能性がある。また、P₃～P₆は配置が台形状をなし、入り口の施設の可能性も考えられる。

炉は地床炉で、中央からやや東寄りに位置している。焼土は60×95cmの不整形に広がり、厚さは最大で10cmあり、西側の一部が攪乱を受けている。

遺物

出土していない。



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径	30×33	23×25	15×20	20×20	26×30	16×20	30×37	27×30
深	36	25.6	21.7	15.8	26.2	15.5	28.1	34.2

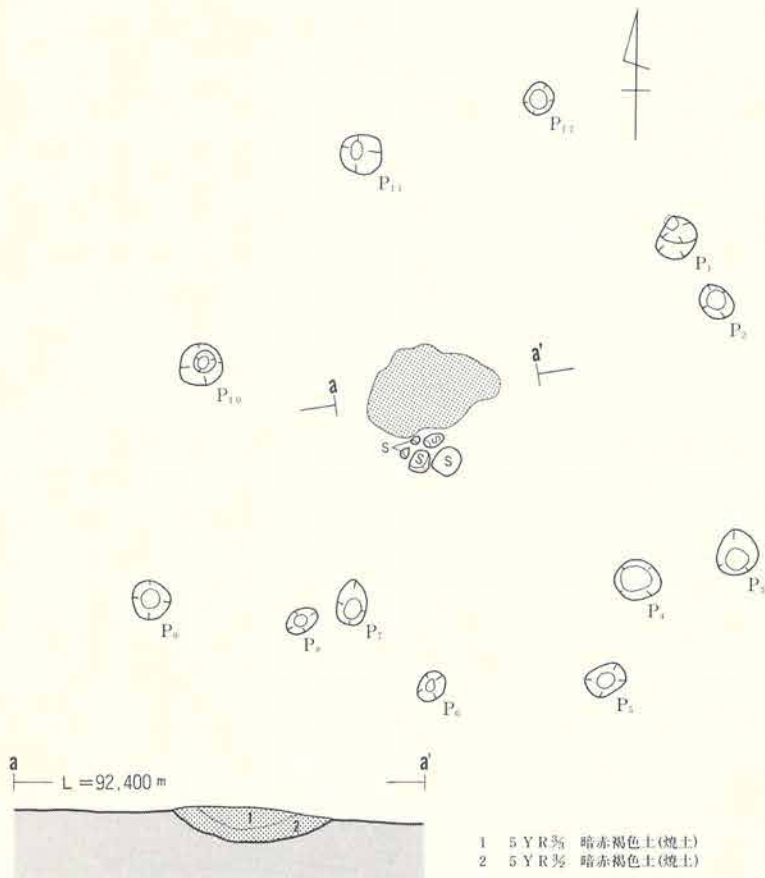
第6図 BIa6 住居跡

B II c 9 住居跡

遺構（第7図、写真図版6）

調査区域北北西グリッドB II c 9に位置し、B III b 1住居跡の西南西約6 mにある。検出面はⅢ層である。

検出できたのは柱穴と炉のみである。壁が遺存していないため規模・形状は特定できないが、柱穴配置からほぼ直径3 m前後の円形と推定される。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。柱穴はP₁～P₁₂の12個が検出されており、径10～25×15～25 cm、深さは8～28 cmである。柱穴の埋土は黒褐色～暗褐色土である。P₄～P₇は配置が台形状をなし、入り口の施設の可能性



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径	20×25	15×18	20×24	20×25	15×20	13×16	14×23	12×17	20×22	23×23	22×22	15×17
深	25.4	10.3	8.5	29.5	9.2	10.8	10.8	6	9.8	18.4	18.8	7.4

第7図 B II c 9 住居跡

も考えられる。

炉は地床炉で、中央からやや西寄りに位置している。焼土が 45×70 cm の不整形に広がり、中央部がよく焼成しており、厚さは最大で 9 cm である。

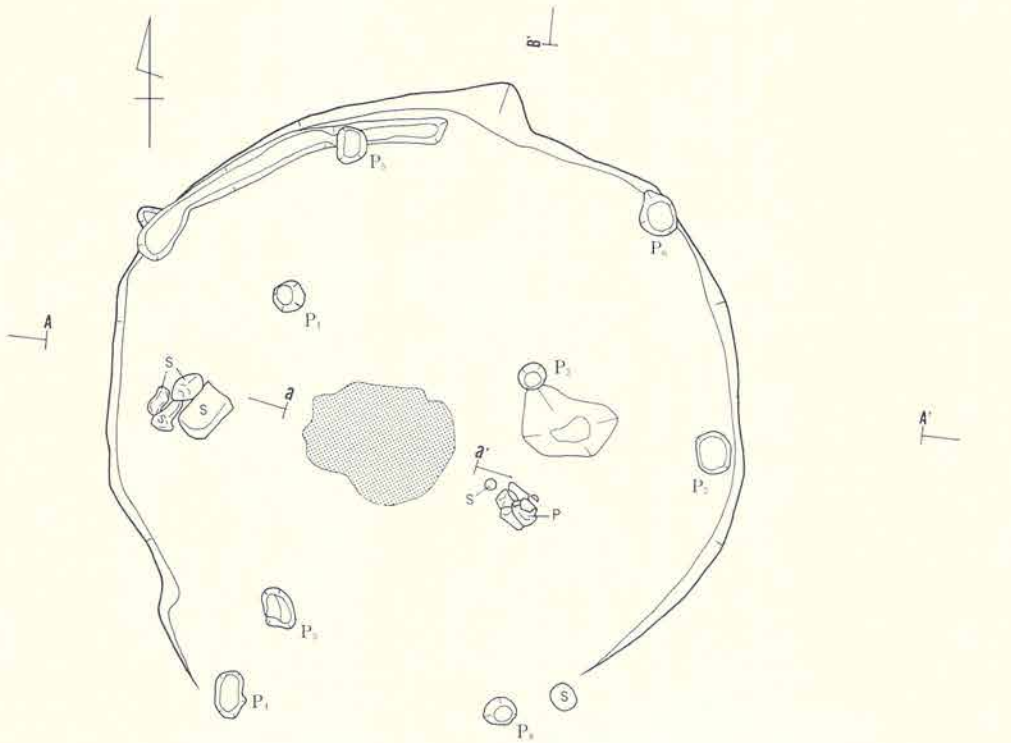
遺物

出土していない。

B II e 7 住居跡

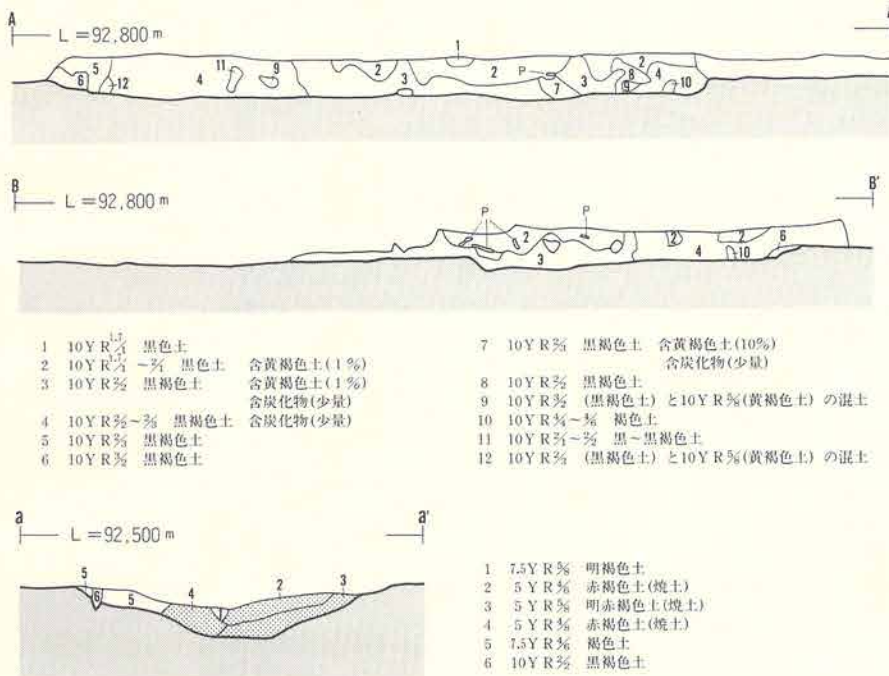
遺構 (第 8・9 図、写真図版 7)

調査区域中央部やや北西寄りグリッド B II e 7、e 8、f 7、f 8 にまたがって位置し、B II f 8 土坑の西約 8 m にある。検出面は III 層である。



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径	15×17	13×15	15×25	17×25	15×20	20×27	18×23	15×18
深	17	13	10	14	6	10	8	13

第 8 図 B II e 7 住居跡(1)



第9図 BIIe7 住居跡(2)

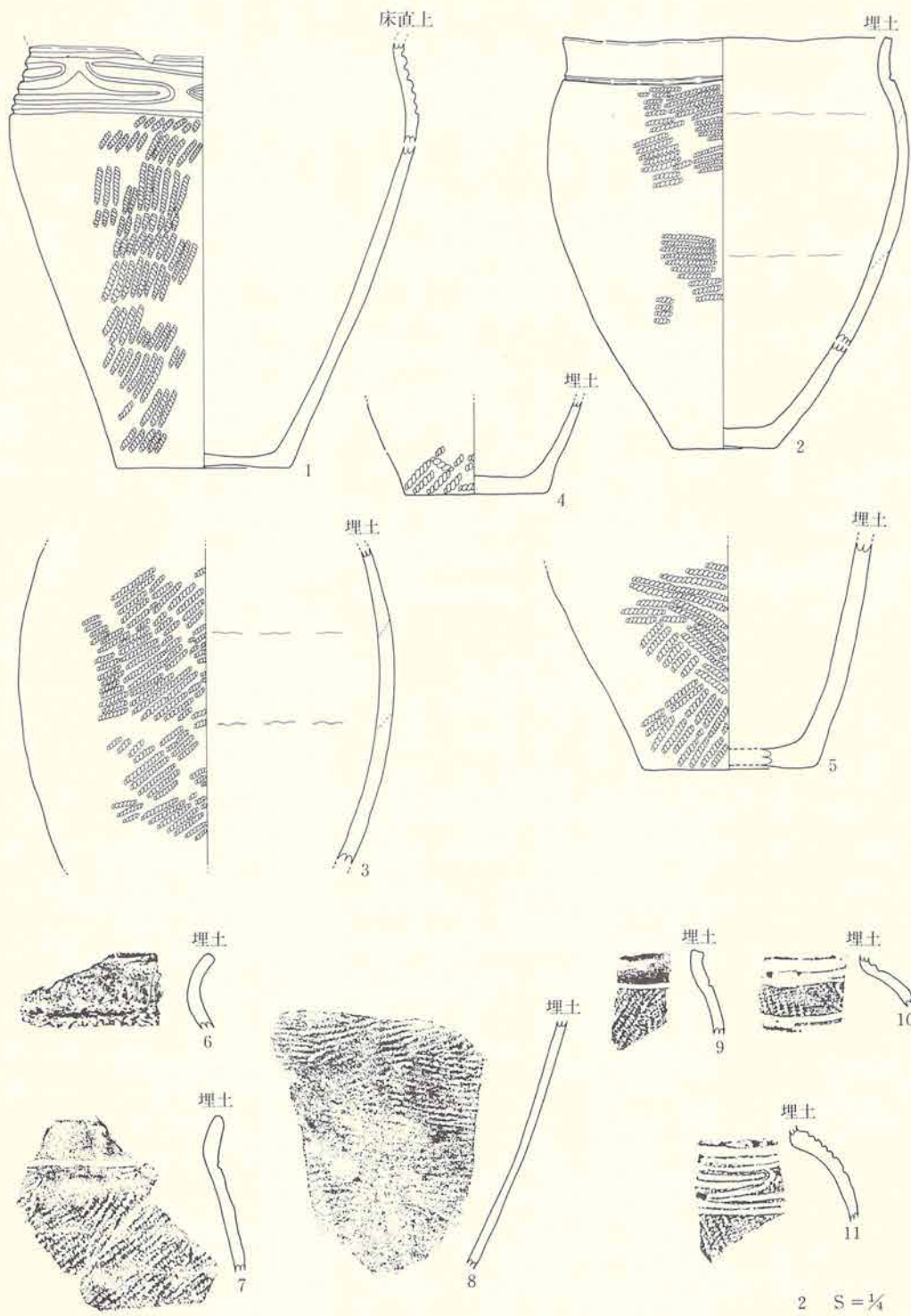
平面形は円形で、規模は直径約3.4mである。埋土は12層に分けられ黒色～黒褐色土が主体である。3、4、7層には炭化物が混入している。壁は南側を欠くが他は遺存し、垂直気味または外傾しながら立ち上がり、壁高は北側で最大8cmである。床面は若干凹凸があり堅くしまっている。柱穴は炉の周辺と壁際に8個検出されている。P₁～P₃は深さが10～15cmであり主柱穴になるかどうかは不明である。また、北西側壁際に沿って幅10～20cm、深さ7～11cm、長さ1.8mの壁溝が巡っている。

炉は地床炉で、中央からやや西寄りに位置している。焼土は65×80cmの不整形に広がり、厚さは最大で10cmである。

遺物 (第10・11図、写真図版35・36)

土器1～11と石器12、13が出土している。

1は甕で頸部から上を欠く。底部から体部上半部まで外傾しながら立ち上がり、その後内湾している。体部にはL R単節縄文が上位と下位には横回転、中位には斜め回転で施文されている。体部上半部から頸部にかけて2本の平行沈線間に変形工字文が施文されている。内面は磨かれている。また、内外面ともに炭化物が付着している。2は甕である。軽く内湾しながら立



第10图 BIIe7 住居跡出土遺物(1)



第11図 BIIe7住居跡出土遺物(2)

ち上がり体部上半部から頸部にかけて内湾している。頸部には沈線が1本巡り、口縁部は僅かに外反している。体部にはLR単節縄文が斜め回転で施文されている。内面には輪積痕が残る。また、外面の体部上半部から口縁部にかけて炭化物が付着している。3は甕の体部片である。内面に輪積痕が残っている。地文にはLR単節縄文が横回転で施文されている。内外面とも炭化物が付着している。4、5は甕の底部から体部下半部で、両者とも底部から外傾しながら立ち上がっている。地文はLR単節縄文で、4は横回転、5は上位が斜め回転、下位が横回転で施文されている。6は甕の口縁部で、外反し、口唇部は平らに調整されている。下端には地文(LR単節縄文横回転)が若干残る。7は甕の体部上半部から口縁部である。頸部に沈線が1本巡り、体部にはLR単節縄文が横回転で施文されている。内面には炭化物が付着している。8は甕の体部片である。全体に薄く、内外面とも炭化物が付着している。地文はLR単節縄文が斜め回転で施文されている。9は小型の甕の体部上半部から口縁部である。頸部に沈線が一本巡り、体部にはLR単節縄文が横回転で施文されており、内外面とも炭化物が付着している。10、11は壺の肩部である。10は2個一対の貼り瘤を持つ変形工字文が施文されている。地文はRL単節縄文が斜め回転で施文されている。11も2個一対の貼り瘤をもつ変形工字文と思われ、地文はRL単節縄文が横回転で施文されている。

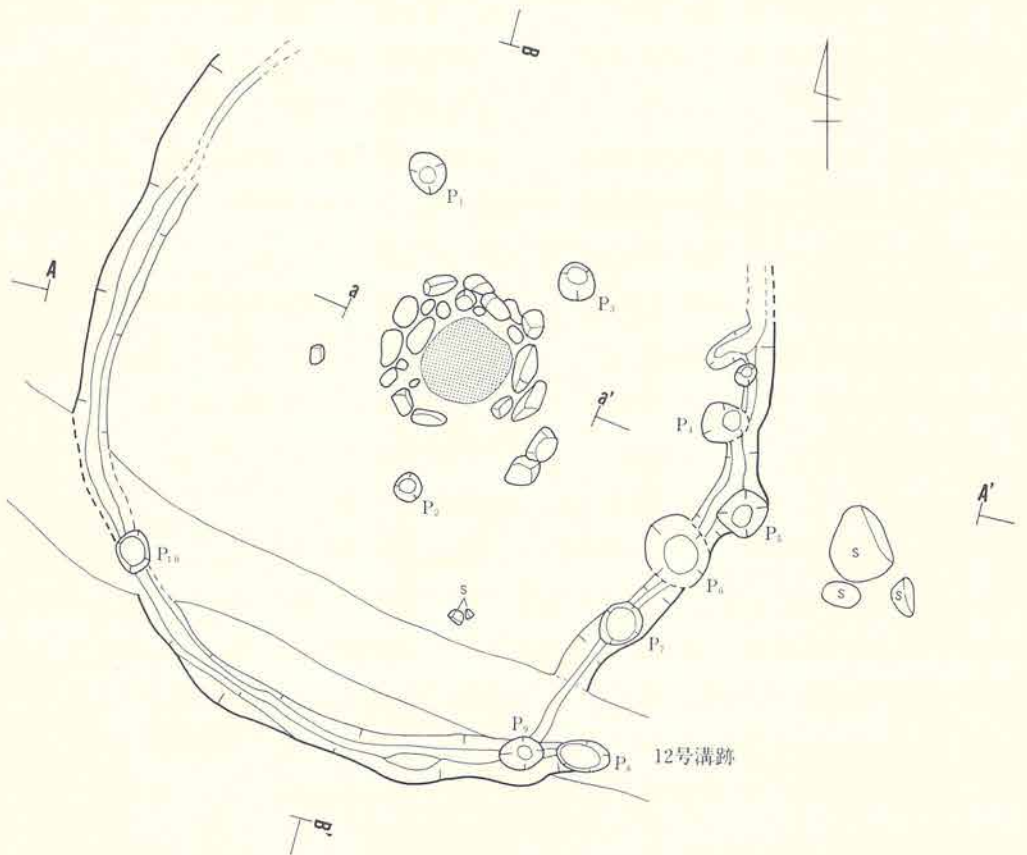
12は凹石で両面とも窪んでいる。13は球状石器である。石質は極細粒凝灰岩で、大きな凹凸はない。用途は不明である。

B III b 1 住居跡

遺構（第12・13図、写真図版8）

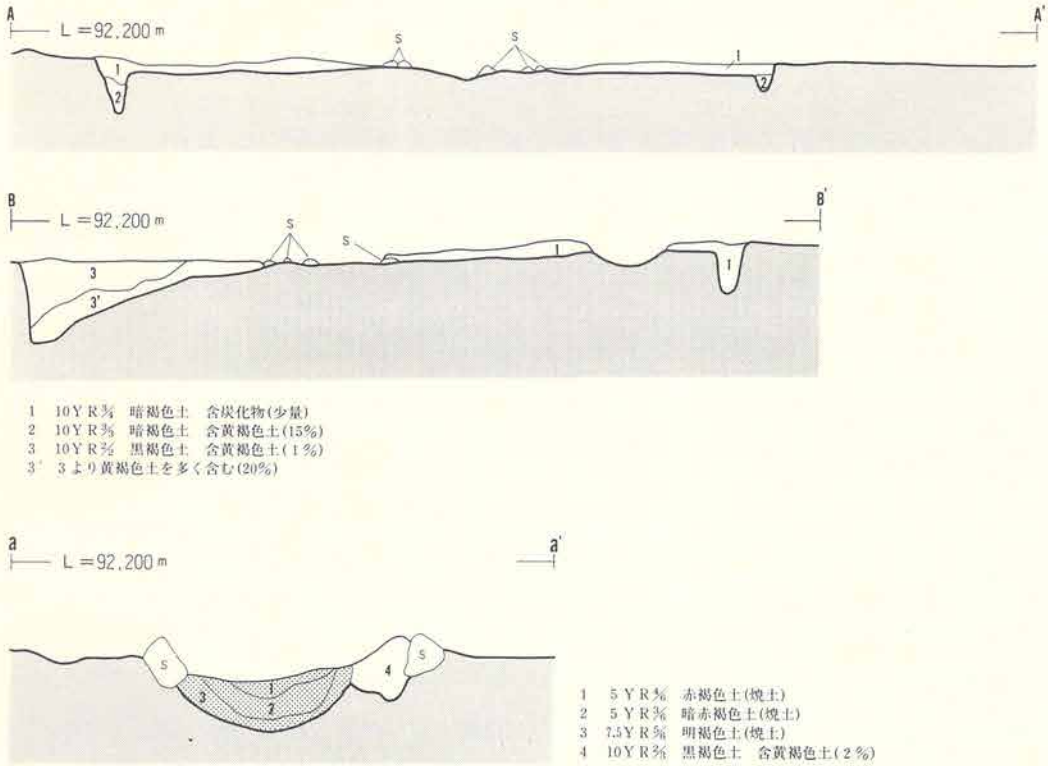
調査区域北端グリッドB III b 1、b 2、c 1、c 2にまたがって位置し、B II c 9住居跡の東北東約6 mにある。本住居跡の北側の一部は遺存せず、また、南側の一部は12号溝跡によって切られている。検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、規模は約3.6×4 mである。埋土は3層に大別される。1、2層は暗褐色土、3層は黒褐色土である。特に、3層は2分され、下位には黄褐色土が多量に混入ししまりが無い。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は南側で最大8 cmである。床面は小さな凹凸があり



Na	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径	23×18	15×17	20×20	20×25	23×25	33×40	20×25	17×28	17×23	18×23	
深	26.6	21.6	7	12.5	21.2	19.2	19	20.5	28.5	23.8	

第12図 B III b 1 住居跡(1)



第13図 BIIIb1 住居跡(2)

堅くしまり、北側が若干低くなっている。壁際には幅 15 ~ 25 cm、深さ 11 ~ 23 cm の壁溝が巡っている。壁溝は北壁側は遺存しないが、全周していたものと推定される。また、壁溝は P₉ から P₈ に向かい約 50 cm 程延び、建て替えの可能性も考えられる。

柱穴状土坑は炉の周辺と壁溝内に 10 個検出されている。径 17 ~ 33 × 20 ~ 40 cm、深さは 7 ~ 28 cm である。P₁ と P₂ が主柱穴と推定される。P₃ は深さが約 7 cm と浅いことから主柱穴に成り得るかどうかは不明である。

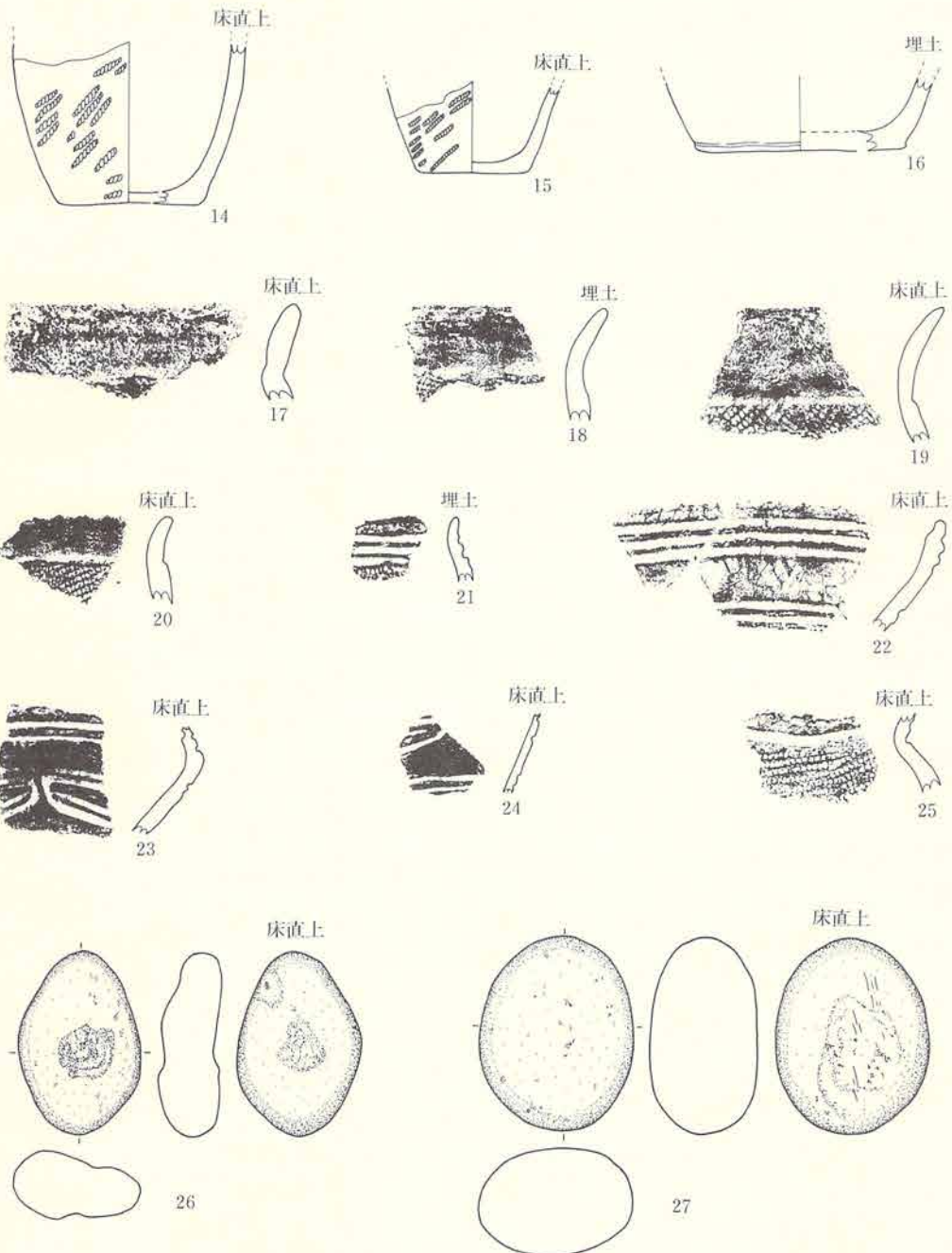
炉は石囲い炉で、ほぼ中央部に位置している。礫 20 数個を円形に配しており、一部 2 重に配されているところもある。南側の礫は一部遺存しないが、精査時の不手際で取り除いてしまったものである。炉の径は約 85 cm である。内部には焼土が径 40 × 50 cm の不整形に広がり、厚さは最大 12 cm である。

遺物（第14図、写真図版36）

土器14～25、石器26、27が出土している。

14～16は甕の底部から体部下半部である。14は底部から軽く内湾しながら立ち上がり、体部にはLR単節縄文が横回転で施文されている。胎土には径1～2mmの砂礫を含み、内面には炭化物が付着している。15は外傾しながら立ち上がり、体部にはLR単節縄文が横回転で施文されている。16は底部が外方へ僅かに張り出している。体部は無文で、外面には炭化物が付着している。17～20は甕の頸部から口縁部である。17は頸部から口縁部にかけて僅かに外傾している。胎土に径1～3mmの砂礫を多量に含み、内外面ともに炭化物が付着している。18～20は頸部から口縁部にかけて外反している。18は体部にLR単節縄文が縦回転で施文され、口縁部はヨコナデされている。内外面ともに炭化物が付着している。19は頸部に1本の沈線が巡り、体部にはLR単節縄文が横回転で施文されている。胎土には径1～4mmの砂礫が含まれている。20は体部と頸部の境目に段を持ち、体部にはLR単節縄文が横回転で施文されている。口縁部は小波状をなす。21は鉢の体部上半部から口縁部である。体部にはLR単節縄文が斜め回転で施文され、口縁部には平行沈線が3本巡っている。口縁部上端は僅かに外方へ折れている。内面には炭化物が付着している。22は浅鉢の体部から口縁部である。軽く内湾しながら立ち上がり、平行沈線が口縁部に3本、更に2cm程下に2本、いずれも口縁に平行に巡っている。特に、口縁部の平行沈線3本は施文具を斜め下方から押し当てて施文されている。また、内面にも口縁に平行に沈線が1本巡っている。胎土には金雲母が含まれている。23、24は高坏である。両者とも変形工字文が施文され、胎土に金雲母を含んでいる。25は壺の肩部から頸部である。肩部は内湾しながら頸部へと続き、頸部から口縁部にかけては外反するものと思われる。頸部には沈線が1本巡っている。地文はLR単節縄文の斜め回転である。

26は凹石で、両面とも窪んでいる。27は磨石である。平・断面形とも楕円形で、表裏両面に使用痕を持っている。



第14图 BIIIb1 住居跡出土遺物

BⅢ d 5 住居跡

遺構（第15図、写真図版9）

調査区域北端グリッドBⅢ d 5、e 5にまたがって位置し、BⅢ e 6住居跡の西約4mにある。検出面はⅢ層である。

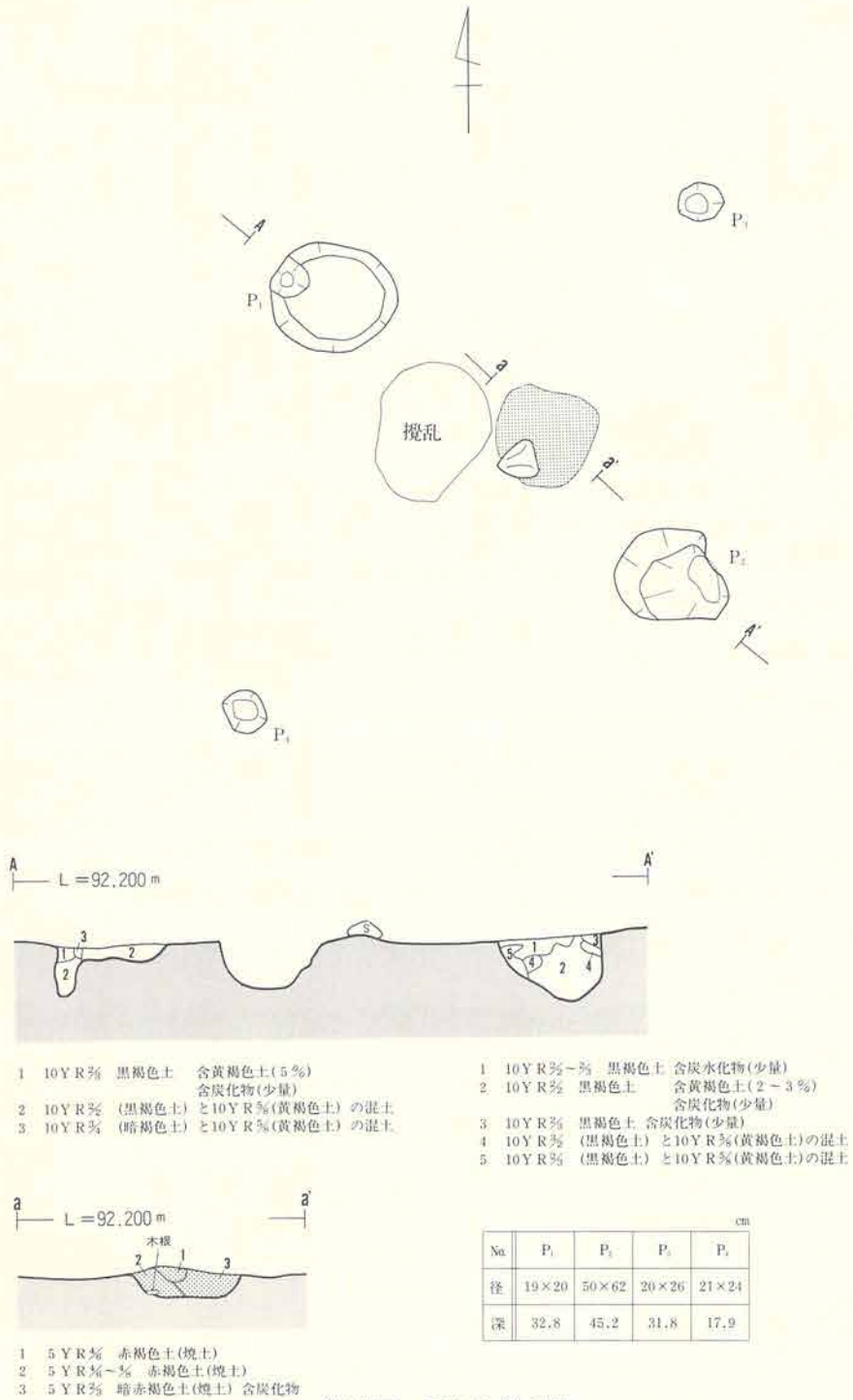
検出できたのは柱穴と炉のみである。壁が遺存していないため規模・形状は特定できないが、柱穴P₁～P₄が壁柱穴とすれば径3.2×4.1mの楕円形になる可能性がある。床面は小さな凹凸があり、堅くしまっている。柱穴はP₁～P₄の4個が検出されている。径20～50×25～70cm、深さは18～36cmであり、埋土は黒褐色土と黄褐色土の混土が主体である。

炉は地床炉で、焼土が径55×60cmの不整形に広がっている。焼土は中央部がよく焼成し、厚さは最大8cmである。焼土上には径20×20×8cmの礫が残っているが、性格は不明である。

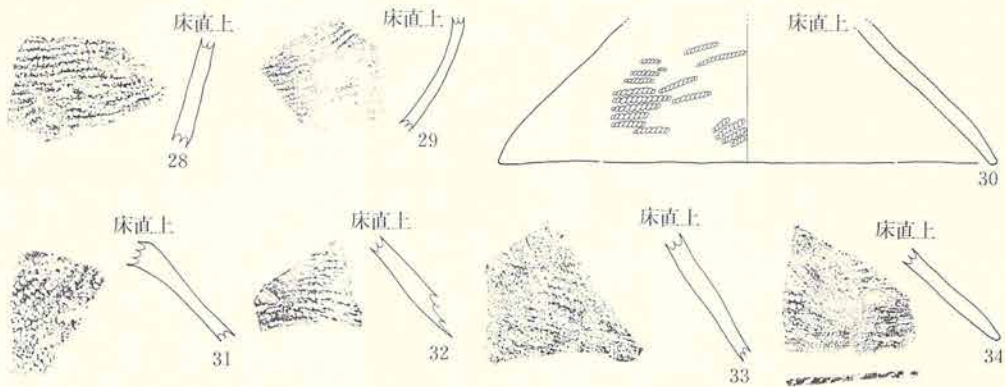
遺物（第16図、写真図版37）

土器28～34が出土している。

28、29は甕の体部片である。両者ともLR単節縄文が斜め回転で施文され、内面は28はナデ、29はミガキが施されている。28の内面には炭化物が付着している。30～34は蓋である。30は外面にLR単節縄文が斜め回転と横回転で施文され、口唇部にも同様の原体で回転施文されている。口唇部は煤けている。31は身部の上部で、把手部へ続く部分と思われる。外面にはLR単節縄文が横回転で施文され、胎土には径1～2mmの砂礫が含まれている。32、33は身部の破片である。縄文が施文されているが原体は不明である。32は内面が煤け、33は胎土に径1mm大の砂礫が含まれている。34は口縁部である。外面にLR単節縄文が施文され、口唇部にも縄文施文の痕跡がある。内面は口唇部から1cm位まで煤けている。胎土には径1mm大の砂礫が含まれている。



第15図 BIII d5 住居跡



第16図 B III d 5 住居跡出土遺物

B III e 6 住居跡

遺構 (第17・18図、写真図版10)

調査区域北北東グリッドB III e 6、e 7にまたがって位置し、B III e 5土坑の北東約4 m、B III d 6住居跡の東南東約6 mにある。検出面はⅢ層である。本遺構の約3分の1は調査区域外である。

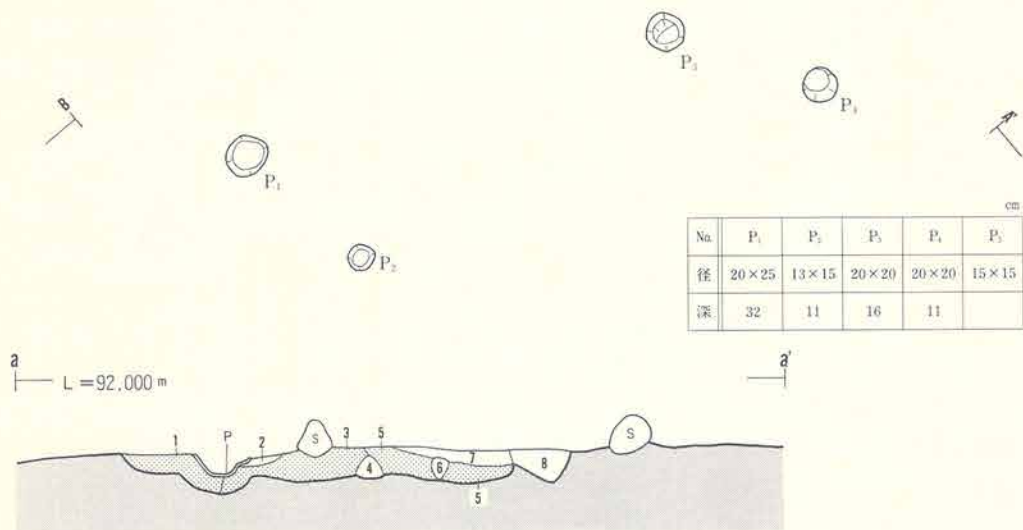
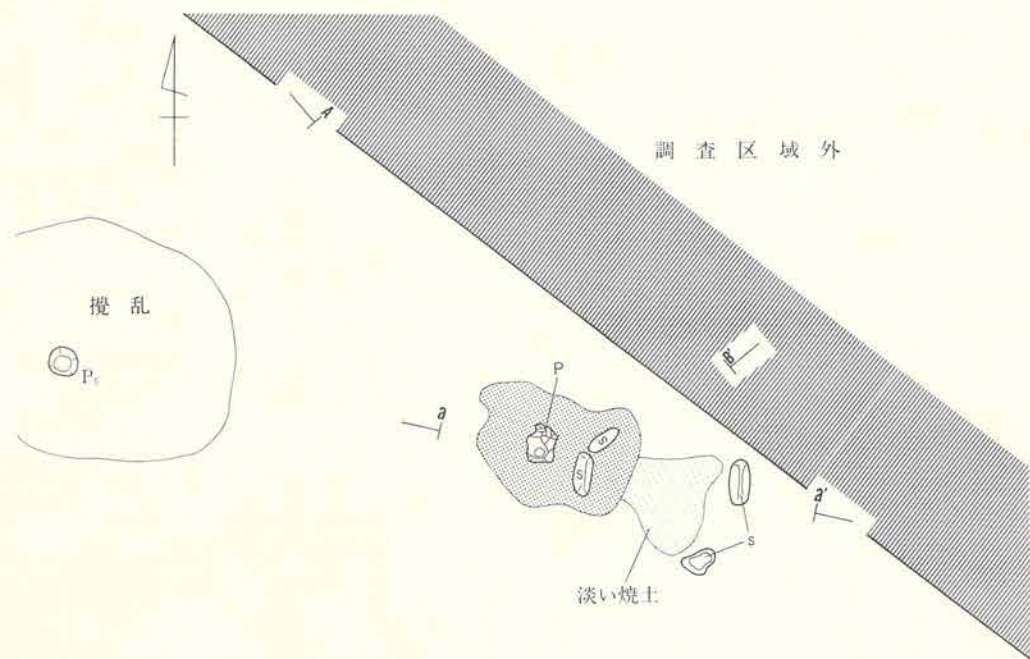
検出の際掘り下げ過ぎて、北西側の壁が僅かに遺存するのみである。規模・形状は特定できないが、壁と柱穴配置から径5 m前後の円形もしくは楕円形と推定される。埋土は9層に分けられ、黒褐色土と暗褐色土が主体となっている。床面は小さな凹凸があるが堅くしまっている。柱穴はP₁～P₅の5個が検出されており、径15～25×13～20 cm、深さは11～32 cmである。

炉は土器埋設炉で、焼土の中心から若干西寄りに約6 cmの掘り込みをもって土器が埋設されている。焼土は土器の周りに60×90 cmの範囲で不整形に広がり、焼土の厚さは最大で12 cmである。焼土の東側に淡い焼土が45×55 cmの不整形に広がり、その回りに20×10×10 cm大の礫が4個、4～7 cmの掘り込みをもって配されている。礫の性格は不明である。

遺物 (第18図、写真図版37)

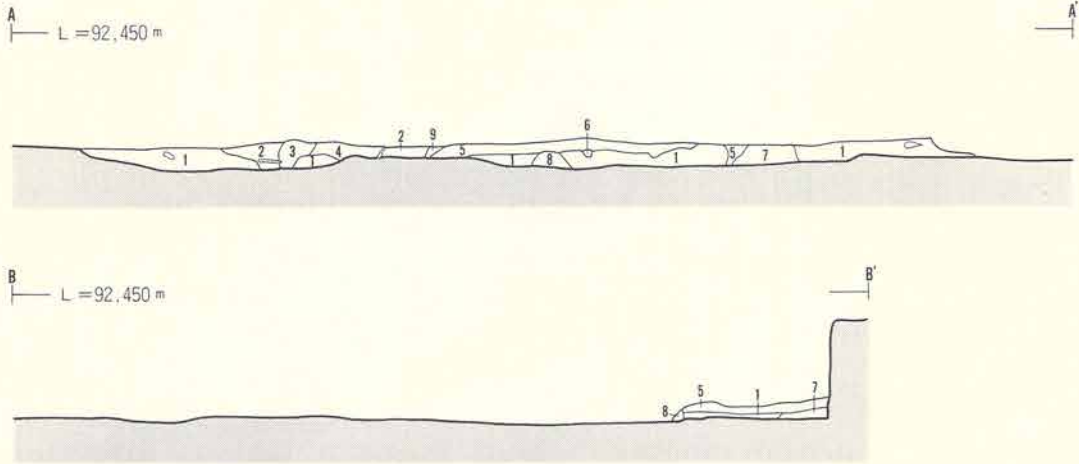
土器35～38と石器39が出土している。

35は甕の底部から体部下半部で、炉の埋設土器として使用されていたものである。底部から外傾しながら立ち上がり、体部には地文のLR単節縄文が上位は斜め回転、下位は縦回転で施文されている。底部は若干上げ底で、内面は赤変している。また、胎土には金雲母が含まれている。36は甕の体部片で、地文にLR単節縄文が横回転で施文され、胎土には金雲母が含まれている。37は壺の体部下半部で、無文である。38は浅鉢の口縁部で、三叉文が施文されており、

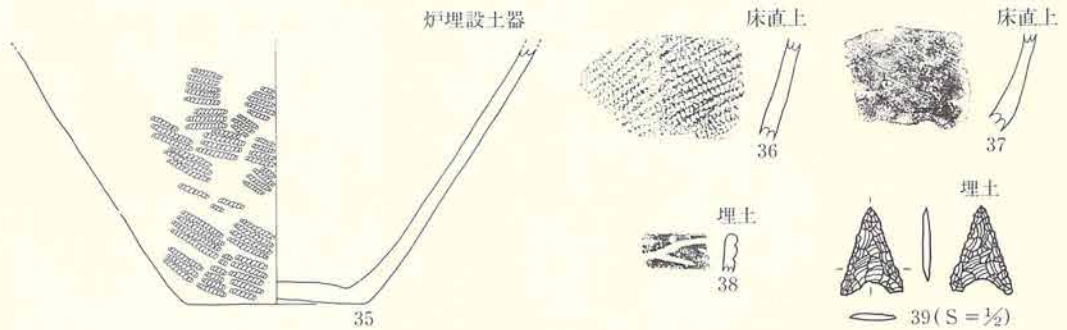


- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 5 Y R 3/4 - 3% 暗赤褐色土(焼土) | 6 7.5 Y R 3/4 黒褐色土 |
| 2 7.5 Y R 3/4 褐色土 | 7 10 Y R 3/4 黒褐色土 含炭化物(少量) |
| 3 5 Y R 3/4 赤褐色土(焼土) | 8 10 Y R 3/4 - 2% 黒-黒褐色土 |
| 4 7.5 Y R 3/4 暗褐色土 | |
| 5 5 Y R 3/4 明赤褐色土(焼土) | |

第17図 BIIIe6 住居跡(I)



- 1 10Y R_{2/4} 暗褐色土 含黄褐色土(1%)・炭化物(少量)
- 2 10Y R_{2/4} 黒褐色土 含黄褐色土(1%)・炭化物(少量)
- 3 10Y R_{2/4}~_{3/4} 黒褐色土 含炭化物(少量)
- 4 10Y R_{2/4} 黒褐色土 含焼土粒(少量)・黄褐色土(1%)・炭化物(少量)
- 5 10Y R_{2/4} 黒色土
- 6 10Y R_{2/4} 黒褐色土
- 7 10Y R_{2/4} 暗褐色土 含黒褐色土
- 8 7.5Y R_{2/4}~_{3/4} 褐色土(焼成している)
- 9 7.5Y R_{2/4} 暗褐色土(焼成している)



第18図 BIIIe6 住居跡(2)・出土遺物

内外面ともに炭化物が付着している。39は無茎石鏃で、基部はU字状に窪み、側縁は直線状である。

B III f 0 住居跡

遺構 (第 19 図、写真図版 10)

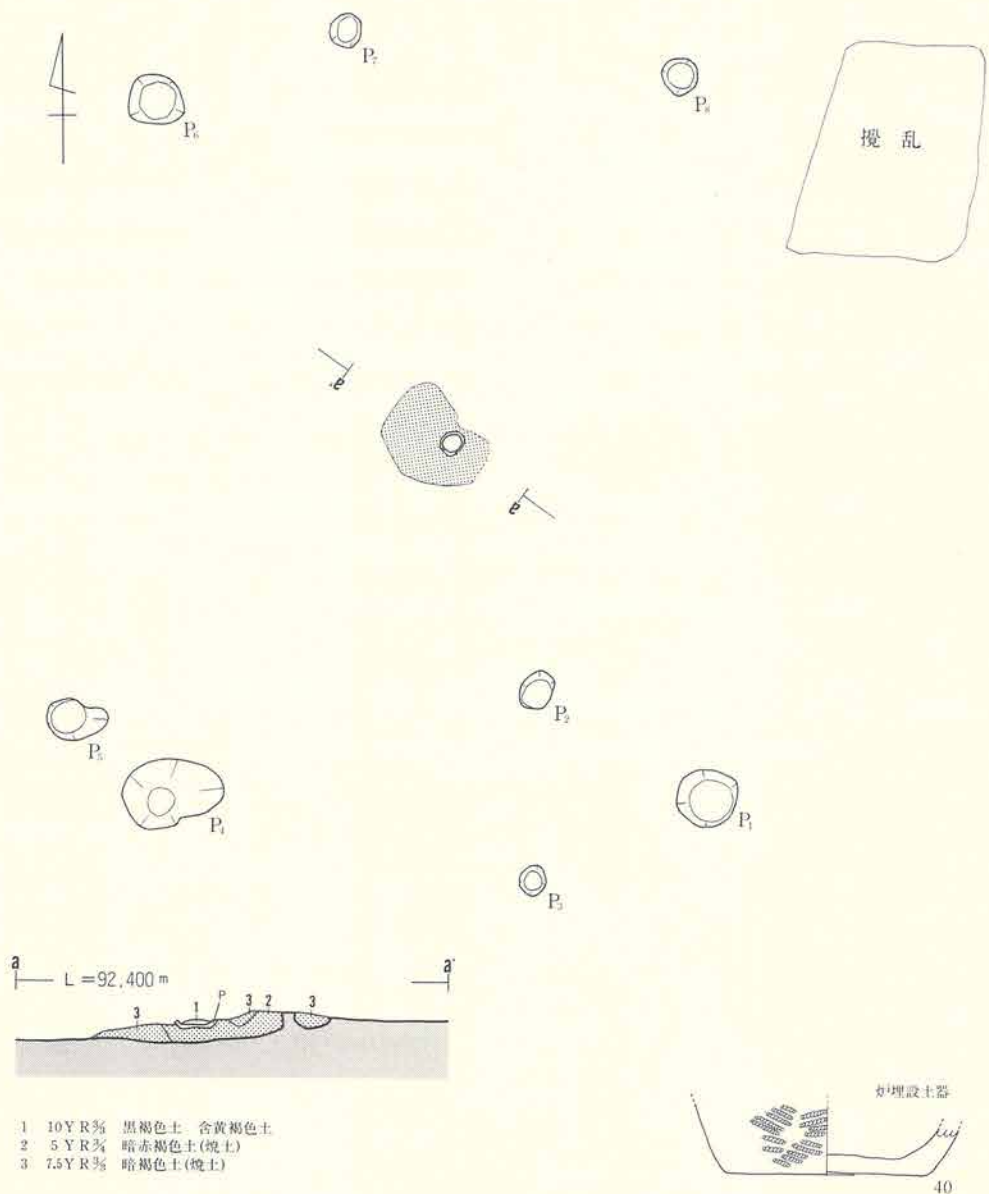
調査区域中央部やや北東グリッド B III f 0、g 0 にまたがって位置し、B III i 0 土坑の北約 6 m、B II e 7 住居跡の東南東約 10 m にある。検出面はⅢ層である。

検出できたのは柱穴と炉のみである。壁が遺存していないため規模・形状は特定できないが、柱穴配置からほぼ直径 5 m 前後の円形と推定される。床面は小さな凹凸があり、平坦で堅くしまっている。柱穴は P₁～P₃ の 8 個が検出されており、径 13～35 × 16～55 cm、深さは 11～35 cm である。柱穴の埋土は黒色～黒褐色土で、黄褐色土が粒状または小ブロック状で混入している。P₂ を除く 7 個が壁柱穴と推定される。また、P₁～P₃ は入り口の施設の可能性が考えられる。

炉は土器埋設炉で、住居跡のほぼ中央部に位置している。焼土の中心から僅かに東寄りに約 3 cm の掘り込みをもって土器が埋設されている。焼土は東及び北東側の一部が削平されており、土器の回りに 40 × 60 cm の不整形に広がり、厚さは最大で 7 cm である。

遺物 (第 19 図、写真図版 37)

土器 40 が出土している。炉の埋設土器として使用されていたものである。地文に L R 単節縄文が縦回転で施文されている。胎土には金雲母が含まれている。



- 1 10Y R 6% 黑褐色土 含黄褐色土
- 2 5 Y R 2% 暗赤褐色土(燧土)
- 3 7.5Y R 6% 暗褐色土(燧土)

No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径	30×35	16×22	13×16	35×55	22×32	25×30	17×18	19×19
深	26	16	11	17	35	18	26	34

第19図 BIII f0 住居跡・出土遺物

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、調査区域中央部から南側にかけて2棟検出されている。両者とも1個の掘り方に2本の柱を据えており、掘り方の長軸方向は東西である。時期は出土遺物から平安時代と推定されるが、遺構の性格は不明である。

CⅢb2 掘立柱建物跡

遺構（第20図、写真図版12・13）

調査区域中央部グリッドCⅢb2、b3にまたがって位置し、CⅢe3掘立柱建物跡の北約10m、CⅢb4土坑の西約6mにある。Ⅲ層面を検出中、土層の変化で掘り方と柱痕跡が確認されたものである。

規模は1間×1間で、1個の掘り方に2本の柱が据えられているのが特徴である。

北側の掘り方は、平面形は隅丸の長方形で、開口部径1.5×2.05m、底部径1.1×1.7m、深さは最深部で60cmである。底面は小さな凹凸があり、東側が低くなっている。壁は僅かに外傾しながら立ち上がっている。南側の掘り方は、平面形は北側のそれより東西方向に細長い隅丸の長方形で、開口部径0.8×2.05m、底部径0.3～0.6×1.95m、深さは最深部で55cmである。底面は小さな凹凸があり、中央やや東側は、P₃側とP₄側を2分するかのようには最深部から約25cm程高く盛り上がっている。壁は南側の一部を除き、ほぼ垂直に立ち上がっている。

両掘り方とも、長軸方向はほぼ東西である。柱痕跡以外の埋土は黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土の混土で、全体にややしまりに欠ける。また、柱あたりは酸化して赤褐色に変色している。

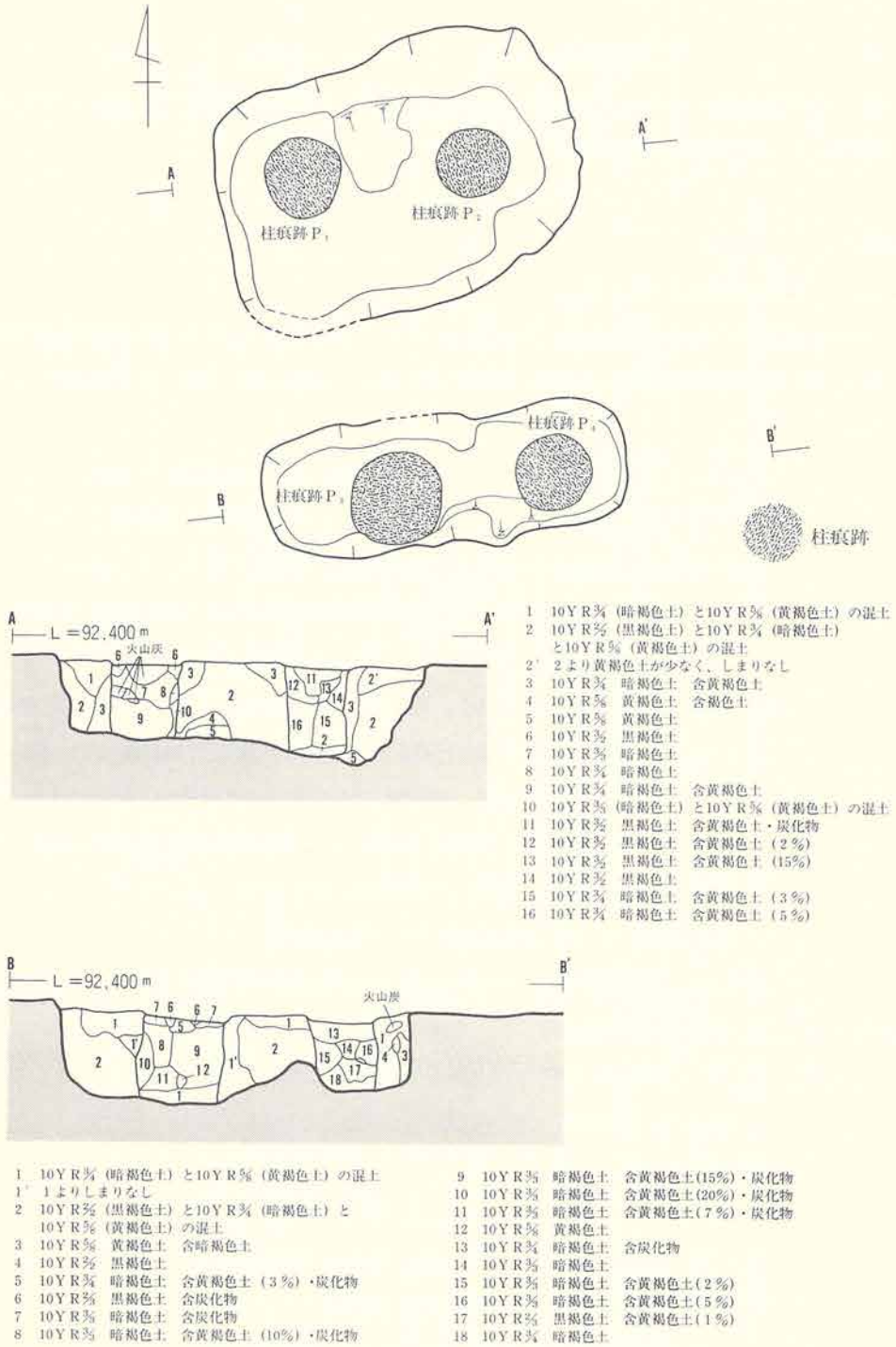
柱痕跡P₁～P₄は径40～52×43～55cmのほぼ円形で、深さは45～55cmである。柱間寸法はP₁～P₂、P₃～P₄が0.9m、P₁～P₄が1.8m、P₂～P₃が1.95mである。P₁～P₂～P₃～P₄は若干平行四辺形気味で、南北に若干長くなっている。柱痕跡埋土は黄褐色土が混入している黒褐色～暗褐色土が主体で、炭化物が混入し、全体にややしまりに欠ける。P₁の埋土上部と、南側の掘り方埋土東壁際上部には十和田系火山灰がブロック状に混入している。

本遺構から遺物が出土しているが、全て柱痕跡からの出土である。

遺物（第21図、写真図版37）

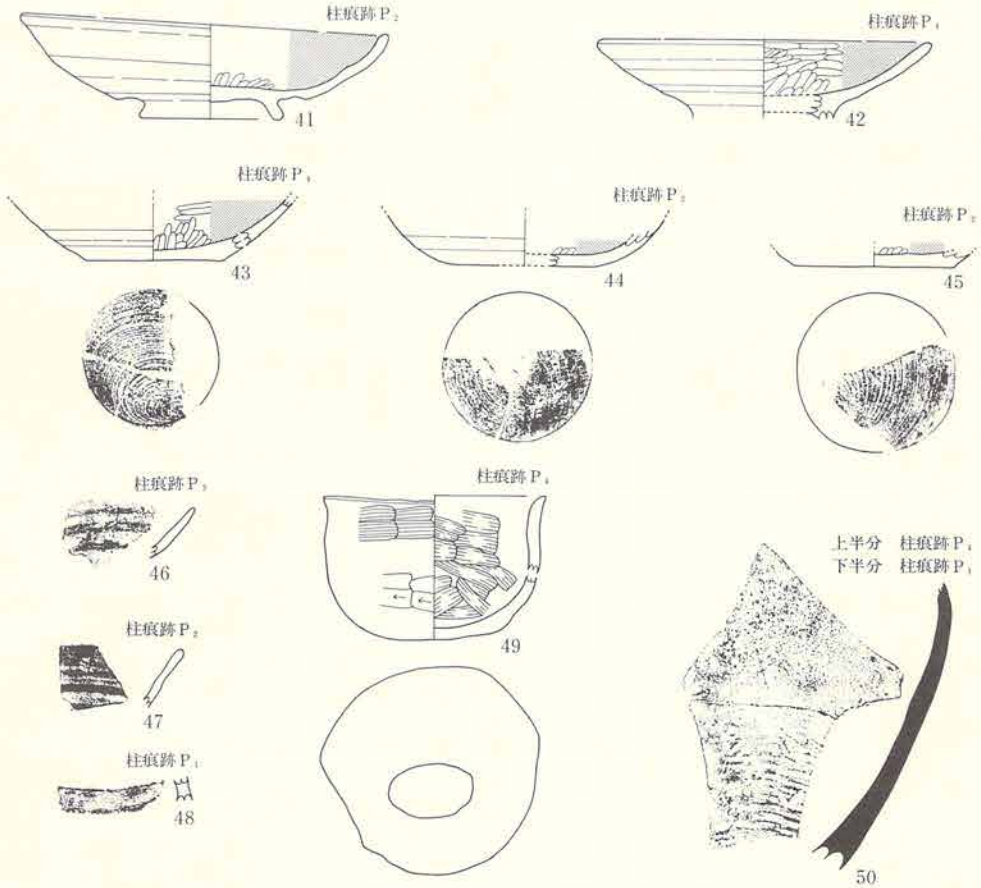
土器41～50が出土している。柱痕跡P₁から48と50の下半分、柱痕跡P₂から41、44、45、47、柱痕跡P₃から46、柱痕跡P₄から42、43、49と50の上半分が出土している。

41～45はロクロ使用で内面黒色処理された土師器坏である。41は高台付の坏である。高台は高さ1cm位でハの字状に開いている。体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は僅かに外方に引き出されている。内面はヘラミガキされている。全体に歪な形をしている。42も高台付の坏と思われるが、高台部は欠失しており僅かに2mm程残存するのみである。体部は大きく外



第20図 CIIIb2 掘立柱建物跡

傾しながら立ち上がり、口唇部は丸みをもっている。内面はヘラミガキされており、黒色処理は口縁部外面1cm位まで及んでいる。43、44は底部から体部にかけてである。43は内湾しながら立ち上がり、底部内面は丸くなっている。44も内湾しながら立ち上がるものと思われる。両者とも内面はヘラミガキされ、底部切り離し技法は回転糸切りである。45は底部である。内面は黒色処理され、底部切り離し技法は回転糸切りである。46は土師器杯の、47は須恵器杯の口縁部で、どちらもロクロ使用である。47の口唇部は僅かに肥厚し、胎土には径3mm大の砂礫が混入している。48は土師器杯の高台部で、ハの字状に開く形と思われる。49は鉢形の手捏ね土器である。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反している。底部は丸みを帯びており、体部下端から底部に欠けて径2×3cmの穴が穿たれている。外面は体部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデ、内面はヘラナデされている。50は須恵器甕の体部下半部で、異なる柱痕跡から出土したものが接合したものである。底部から軽く内湾しながら立ち上がるものと



第21図 CIIIb2 掘立柱建物跡出土遺物

思われる。外面には下位に平行叩き目痕があるが、内面には当て具痕はなく、縦方向にナデられている。外面には自然釉が認められる。

CⅢ e 3 掘立柱建物跡

遺構（第22図、写真図版13）

調査区域中央部やや南側グリッドCⅢ e 3に位置し、CⅢ b 2 掘立柱建物跡の南約10 m、CⅢ c 2 陥し穴状遺構の南約6 mにある。Ⅲ層面を検出中、土層の変化で掘り方が確認されたものである。

CⅢ b 2 掘立柱建物跡同様、長軸方向を東西にもつ掘り方が2個並んでいる。

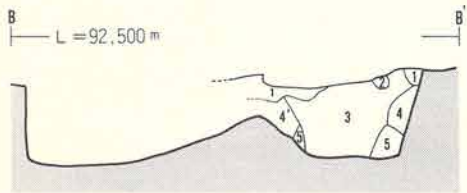
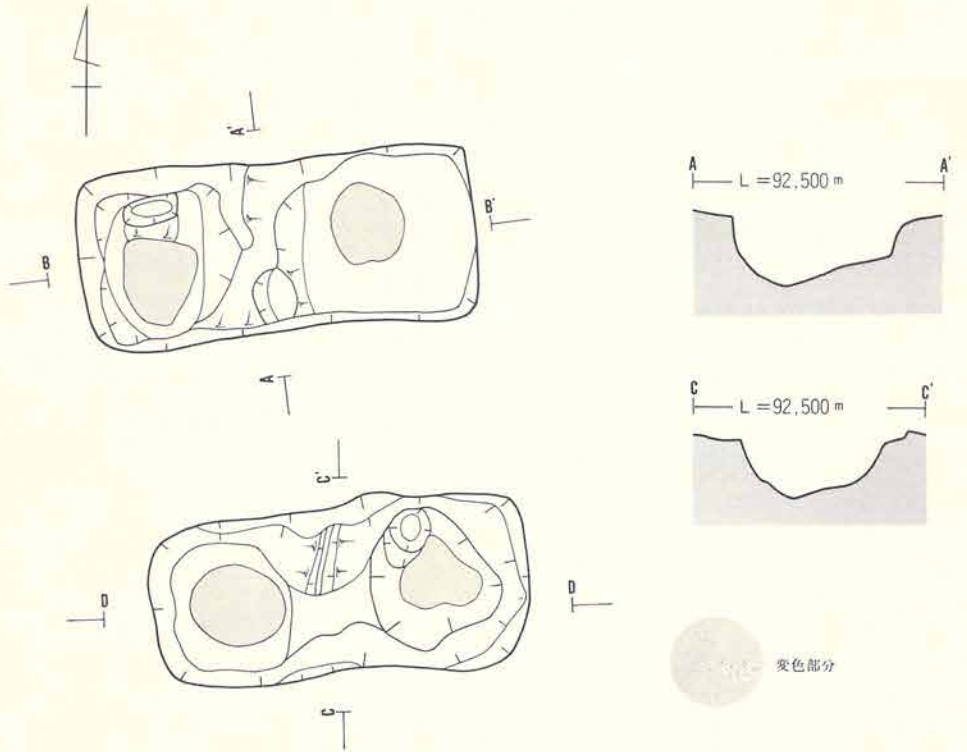
北側の掘り方は、平面形は隅丸長方形で、規模は開口部径0.9～1×2.1 m、底部径0.85～0.9×1.95 m、深さは最深部で45 cmである。底面は小さな凹凸があり、中央やや西側は掘り方を東西に2分するかのように、最深部から約25 cm程高く盛り上がっている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は、精査の際に誤って取り除いてしまい僅かしか残っておらず、黒褐色土と黄褐色土の混土が主体で、よくしまっている。南側の掘り方も、平面形は隅丸長方形で、規模は開口部径0.85～0.95×2 m、底部径0.75～0.8×1.85 m、深さは最深部で40 cmである。底面は凹凸があり、北側の掘り方同様、掘り方を2分するかのように中央部付近が最深部から15 cm程高く盛り上がっている。壁は東側がほぼ垂直に立ち上がるが、他は外傾しながら立ち上がっている。埋土は、北側の掘り方同様僅かしか残っておらず、炭化物が混入している黒褐色土が主体で、よくしまっている。また、北側の掘り方埋土3層上部には十和田系火山灰が混入している。

両掘り方とも、底面に赤褐色に変色している部分がそれぞれ2ヵ所ずつあり、それが柱あたりと考えられることから、CⅢ b 2 掘立柱建物跡同様、1個の掘り方に柱がそれぞれ2本ずつ立っていたものと推定される。

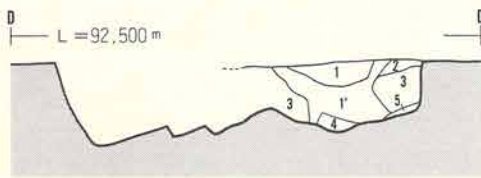
柱痕跡がなく正確な間尺は不明であるが、柱あたりから推定して、1間×1間（1.05～1.1×1.8 m）で、南北に若干長い建物であったと考えられる。

遺物（第22図、写真図版37）

土器51は土師器杯の底部から体部下半部で、北側の掘り方埋土上部から出土したものである。底部から軽く内湾気味に立ち上がっている。外面は調整されており、底部切り離し技法は回転糸切りである。



- 1 10 Y R 5% 黒褐色土
- 2 10 Y R 5% 暗褐色土 含炭化物(少量)
- 3 10 Y R 5% (黒褐色土)と10 Y R 5% (明黄褐色土)の混土、含炭化物(少量)
- 4 10 Y R 5% (黒褐色土)と10 Y R 5% (明黄褐色土)の混土
- 4' 4に炭化物を少量含む
- 5 10 Y R 5% (暗褐色土)と10 Y R 5% (明黄褐色土)の混土



- 1 10 Y R 5% 黒褐色土 含炭化物
- 1' 1より炭化物を多く含む
- 2 10 Y R 5% 黒褐色土
- 3 10 Y R 5% (暗褐色土)と10 Y R 5% (黄褐色土)の混土含炭化物
- 4 10 Y R 5% 暗褐色土
- 5 10 Y R 5% 黒色土



第22図 CIIIe3 掘立柱建物跡・出土遺物

3 墓塚

土壙墓が2基、火葬墓が1基検出されている。

C I d 4 土壙墓

遺構（第23図、写真図版14）

調査区域西隅グリッドC I d 4、e 4にまたがって位置し、C I e 7土壙墓の西約12mにある。水田部を粗掘り中、検出されたものである。検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、長軸方向は北西-南東である。規模は開口部径60×90cm、底部径50×85cm、深さは6～11cmで、北西側が深くなっている。壁は緩く外傾しながら立ち上がる。底部は若干凹凸があり、北西側には径25×35cm、深さ11cmの掘り込みがある。埋土は6層に分けられ、炭化材の細片が多量に混入している黒褐色土が主体である。埋土上部から、土器が斜めに伏せた状態で出土している。

遺物（第23図、写真図版38）

土器52が出土している。甕の底部から体部下半部で、地文にはRL単節縄文が横回転で施文されている。胎土には径1～5mmの砂礫が含まれ、底部には網代痕が残っている。

時期

出土遺物から弥生時代初頭と推定される。

C I e 7 土壙墓

遺構（第23図、写真図版14）

調査区域西隅グリッドC I e 7、f 7にまたがって位置し、C I d 4土壙墓の東約12mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は長楕円形で、規模は0.55～0.65×1.8m、深さは4～16cmで南側ほど低くなっている。埋土は4層に分けられ、褐色土が主体である。

遺物（第23図、写真図版38）

土器53、54が出土している。どちらもロクロ使用の赤焼き土器の坏である。53は埋土下部から伏せた状態で出土したものである。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は軽く外反している。54は外傾して立ち上がり、口縁部は外反し、口唇部は肥厚している。53、54どちらも器高は低く、口径に比べ底径が小さくなっている。

時期

出土遺物から平安時代（10世紀後半から11世紀）と推定される。

B II d 7 火葬墓

遺構 (第 23 図、写真図版 14)

調査区域北西側グリッド B II d 7、e 7 にまたがって位置し、B II d 6 土坑の南東約 4 m にある。検出面は II b 層である。

墓壙の平面形は円形で、規模は開口部径 38 × 38 cm、底部径 28 × 34 cm、深さは最深部で 28 cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は凹凸がなく平坦であるが、中央部が若干窪んでいる。埋土は 2 層に分けられる。1 層は黒色土で上部に炭化材と若干の人骨片が混入し、2 層は黒色～黒褐色土で若干の人骨片が混入している。

墓壙内には、土師器の鉢が伏せた状態で埋設されており、中には成人 3 個体分の人骨片が埋納されている。土師器の下には厚さ最大 6 cm で炭化材が敷かれている。

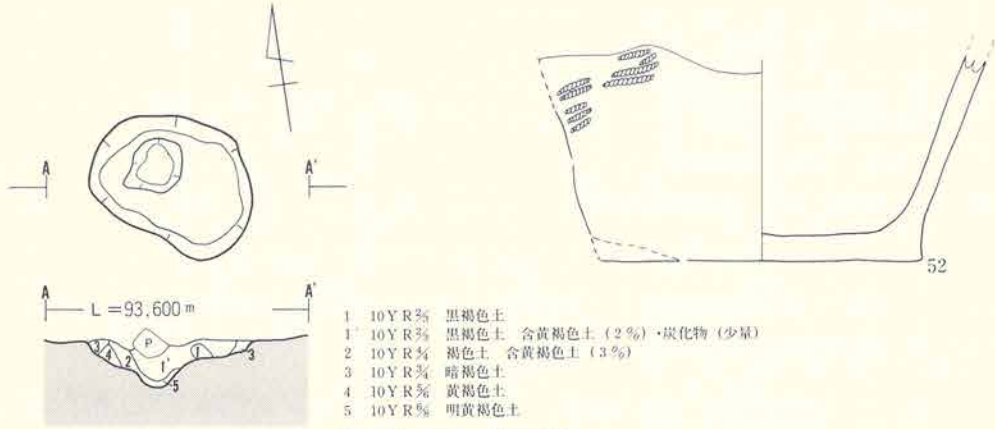
埋土中及び土師器内の人骨片はいずれも火葬人骨片である。

遺物 (第 23 図、写真図版 38)

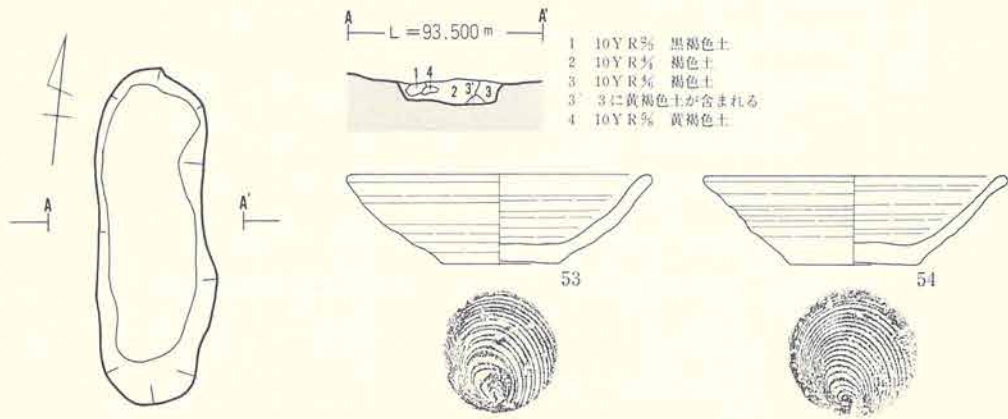
土器 55 は蔵骨器として使用されていたロクロ使用の土師器の鉢である。口縁部径 25 cm、胴部最大径 23 cm、底部径 9.5 cm、器高 18 cm である。体部中位やや上方に体部最大径をもち、内湾気味に下降し底部へと続いている。体部上位は最大径の位置から内湾しながら頸部へ移行し、強く外傾する口縁部へと続いている。口縁部は外方へ挽き出され、縁帯状をなし、口唇部は上方へつまみ出されている。内面は黒色処理されており、下位は放射状に、中位は縦方向の後横方向に、上位は横方向にそれぞれヘラミガキされている。底部はヘラナデ調整され上げ底風になっている。底部切り離し技法は不明である。

時期

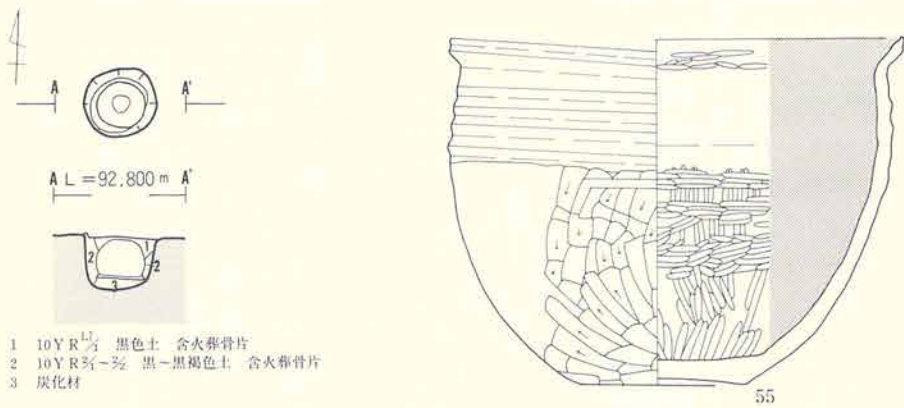
蔵骨器として使用されている土師器の鉢の形態から平安時代 (9 世紀末から 10 世紀初頭) と推定される。



C I d4 土坑墓・出土遺物



C I e7 土坑墓・出土遺物



B II d7 火葬墓・出土遺物

第23図 C I d4・C I e7 土坑墓・B II d7 火葬墓・出土遺物

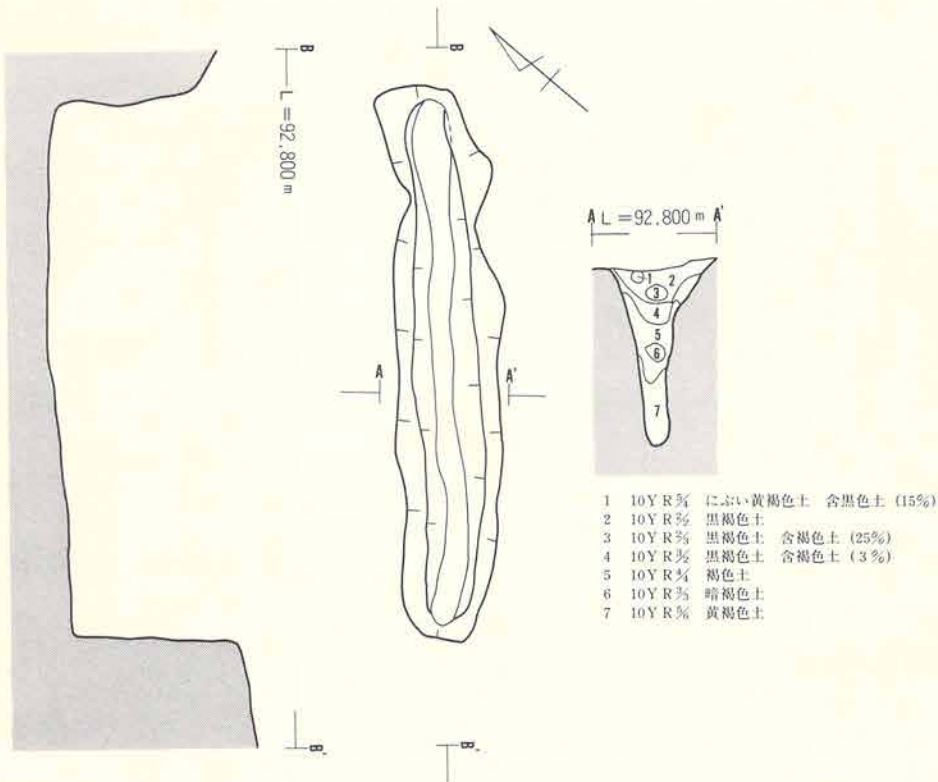
4 陥し穴状遺構

8基検出されており、いずれも溝状の陥し穴状遺構で、調査区域内に散在している。長軸方向は北東-南北(4基)、南北(3基)、西南西-東北東(1基)である。時期は形態から縄文時代と推定される。

A II h 0 陥し穴状遺構 (第24図、写真図版15)

調査区域北西端グリッドA II h 0に位置し、A II h 0①土坑の西約40cmにある。検出面はIII層である

平面形は細長い溝状で、長軸方向は北東-南西である。規模は開口部径55×295cm、底部径20×275cm、深さは中央部で95cm、両端部で80~90cmである。短軸の断面は漏斗形である。両壁ともほぼ垂直に立ち上がり、北西壁は底部から50cm位から、また、南東壁は65cm位からそれぞれ外傾しながら立ち上がっている。長軸の断面はほぼ長方形で、北東壁は内湾した後、外傾しながら立ち上がり、南西壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部はほぼ平坦で、中央部が若干低い。埋土は7層に分けられ、上部は黒褐色土、中部は暗褐色土、下部は黄褐色土が主



第24図 A II h 0 陥し穴状遺構

体である。

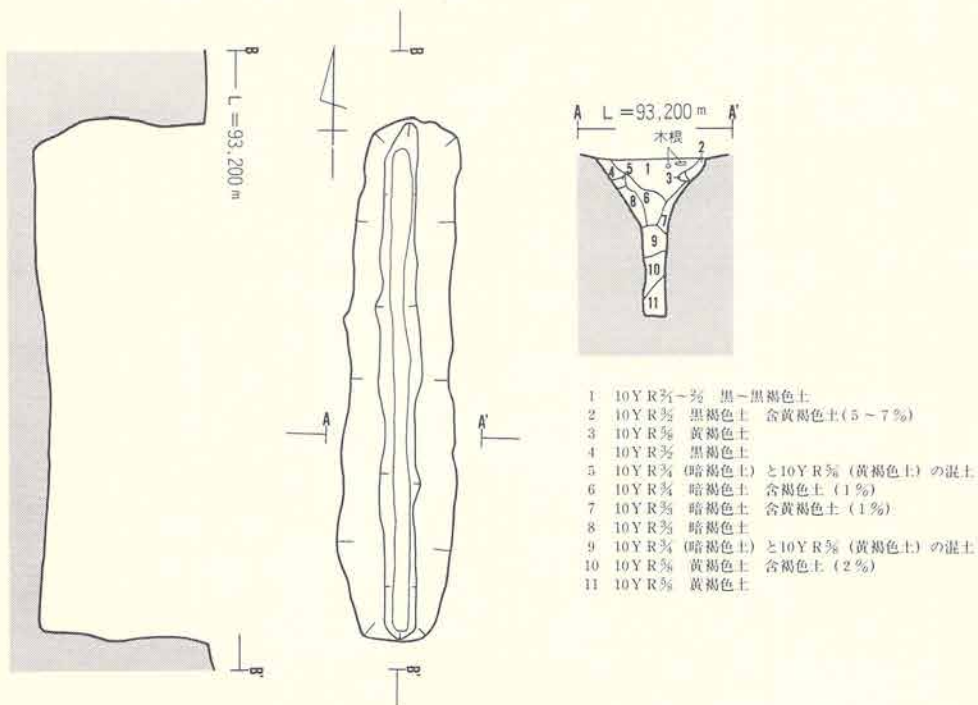
出土遺物はない。

B I g 7 陥し穴状遺構 (第 25 図、写真図版 15)

調査区域西端部グリッド B I g 7 に位置し、B I i 5 焼土遺構の北東約 10 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形は細長い溝状で、長軸方向は南北である。規模は開口部径 60×275 cm、底部径 10×255 cm、深さは中央部で 80 cm、両端部で 90 cm である。短軸の断面は漏斗形で、底部から 50 cm 位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後外傾している。長軸の断面は長方形で、南端はほぼ垂直に立ち上がるが、北端はいったん外傾した後、ほぼ垂直に立ち上がっている。底部は平坦で、南端部が若干深くなっている。埋土は 11 層に分けられ、上部は黒色土・黒褐色土・暗褐色土、中部は暗褐色土と黄褐色土との混土、下部は黄褐色土である。

出土遺物はない。



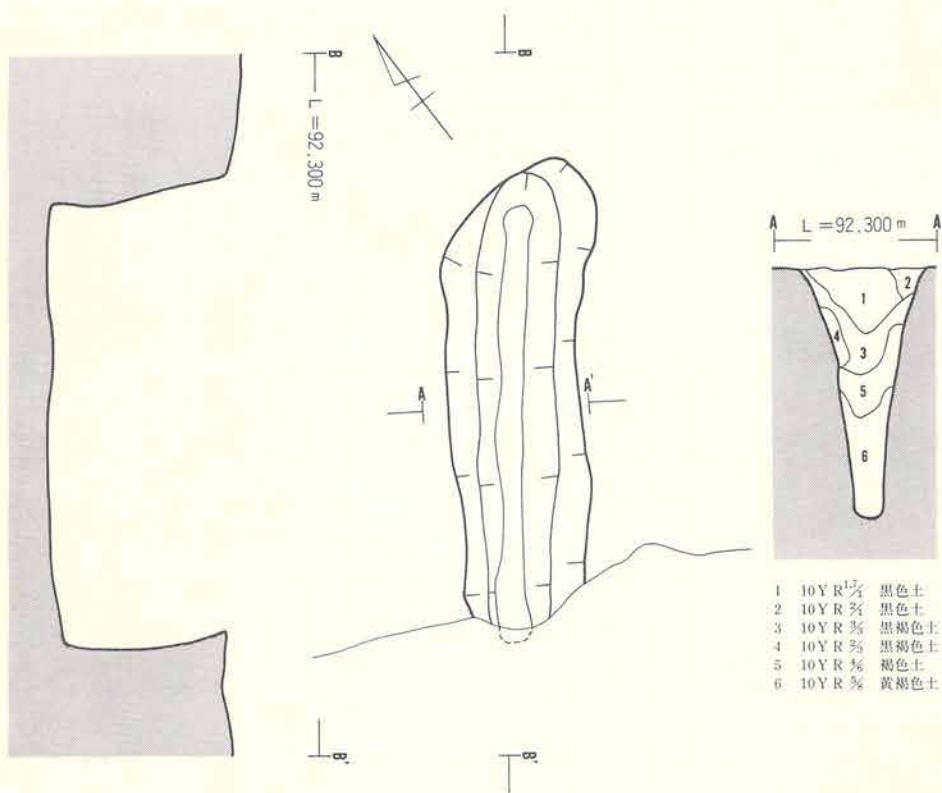
第25図 B I g 7 陥し穴状遺構

B II a 9 陥し穴状遺構 (第 26 図、写真図版 16)

調査区域北端グリッド B II a 9 に位置し、B II c 9 住居跡の北約 5 m にあり、南西端部を 12 号溝跡によって切られている。検出面はⅢ層である。

平面形は細長い溝状で、長軸方向は北東-南西である。規模は開口部径 70 × 250 cm、底部径 15 × 230 cm、深さは中央部で 95 cm、両端部で 90 cm である。短軸の断面は V 字形で、底部から緩やかに外傾しながら立ち上がっている。長軸の断面は平行四辺形気味で、両壁とも若干北東側に傾いている。底部はほぼ平坦である。埋土は 6 層に分けられ、上部は黒色土、中部は黒褐色土と褐色土、下部は黄褐色土である。

出土遺物はない。



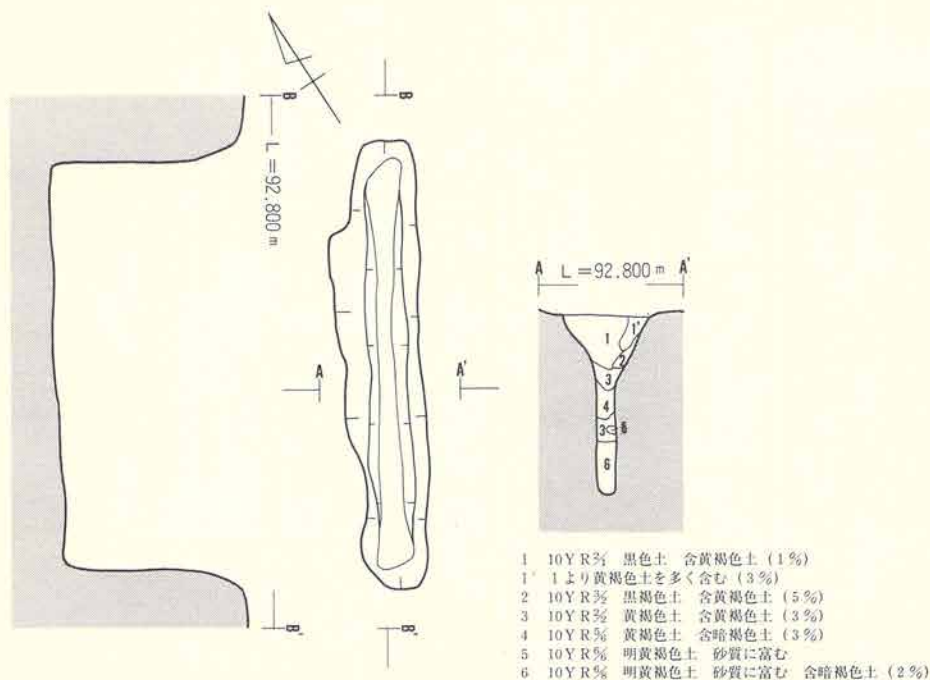
第26図 B II a9 陥し穴状遺構

B II c 2 陥し穴状遺構 (第 27 図、写真図版 16)

調査区域北西部グリッド B II c 2 に位置し、1 号溝跡の東約 6 m、B II a 0 炉跡の南東約 10 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形は細長い溝状で、長軸方向は北東-南西である。規模は開口部径 40 × 235 cm、底部径 10 × 20 × 215 cm、深さは中央部で 100 cm、両端部で 95 ~ 100 cm である。短軸の断面は漏斗形で、底部から 60 cm 位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後外傾している。長軸の断面はほぼ長方形で、両壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。底部はほぼ平坦で、南西側が若干高くなっている。埋土は 7 層に分けられ、上部は黒色土、中部は黒褐色土と黄褐色土、下部は明黄褐色土である。

出土遺物はない。



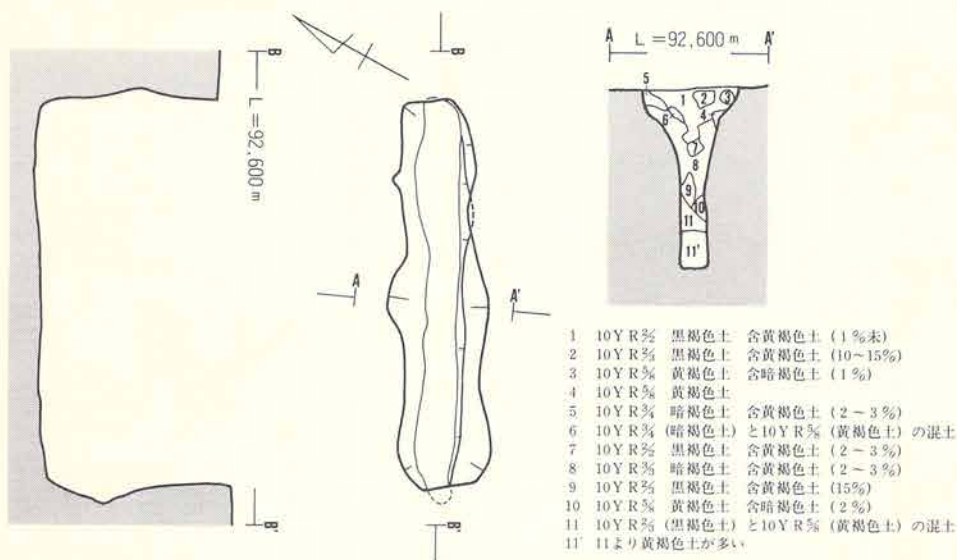
第 27 図 B II c 2 陥し穴状遺構

B II h 8 陥し穴状遺構 (第 28 図、写真図版 17)

調査区域中央部やや北西側グリッド B II h 8 に位置し、B II h 8 土坑の南約 2 m、B II i 7 土坑の北東約 2 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形は細長い溝状で、長軸方向は北東-南西である。規模は開口部径 55 × 205 cm、底部径 15 × 25 × 215 cm、深さは中央部で 95 cm、両端部で 95 ~ 100 cm である。短軸の断面は漏斗形で、底部から 50 cm までほぼ垂直に立ち上がり、いったん外反した後ほぼ垂直気味に立ち上がっている。長軸の断面はほぼ長方形で、北東端はほぼ垂直気味に立ち上がり、南西端は外傾した後内湾しながら立ち上がっている。底部はほぼ平坦である。埋土は 12 層に分けられ、上部は黒褐色土と暗褐色土が主体で、下部は黒褐色土と黄褐色土の混土である。

出土遺物はない。



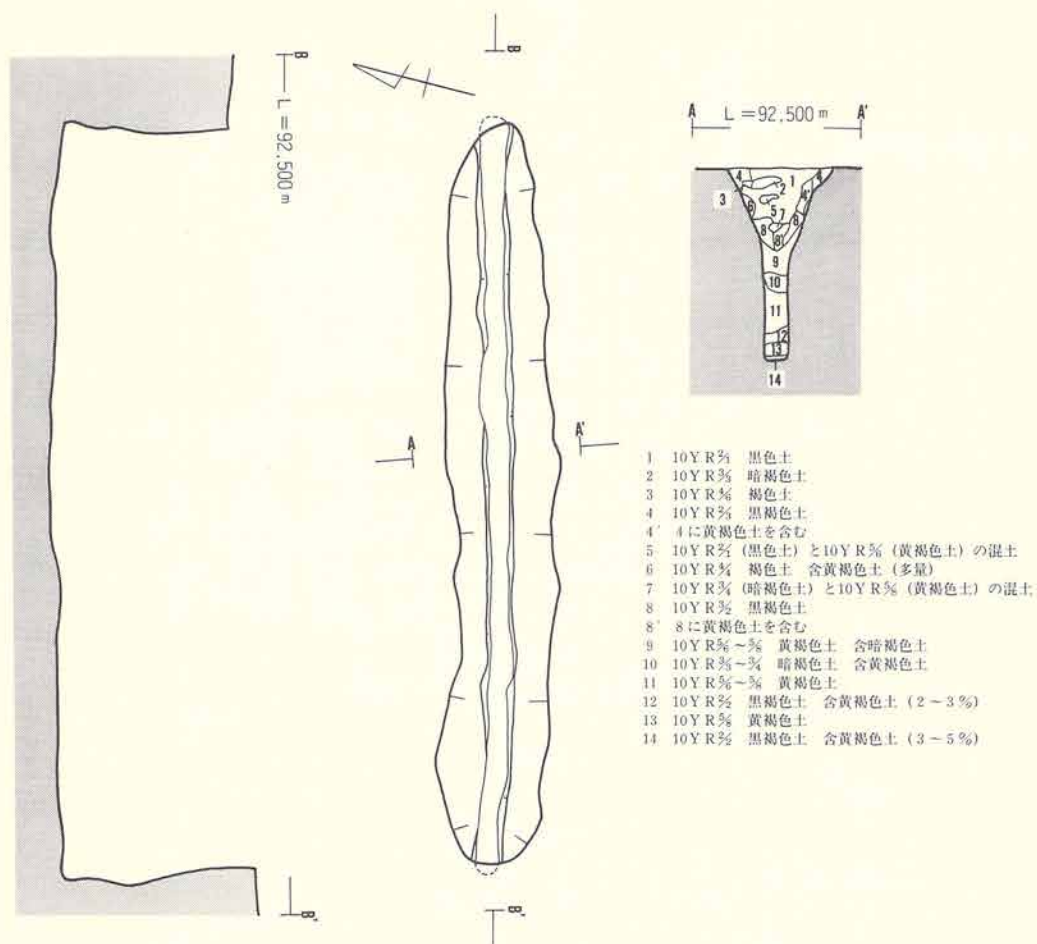
第28図 B II h 8 陥し穴状遺構

C III c 2 陥し穴状遺構 (第 29 図、写真図版 17)

調査区域中央部やや南東側グリッド C III c 2 と c 3 にまたがって位置し、C III b 2 掘立柱建物跡の南約 4 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形は細長い溝状で、長軸方向は、西南西-東北東である。規模は開口部径 60 × 390 cm、底部径 10 ~ 14 × 400 cm、深さは中央部で 100 cm、両端部で 90 ~ 100 cm である。短軸の断面は漏斗形で、底部から 60 cm 位までほぼ垂直に立ち上がり、その後外傾している。長軸の断面はほぼ長方形で、両壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。底部はほぼ平坦である。埋土は 16 層に分けられ、上部は黒色土、下部は暗褐色土と黄褐色土が主体である。

出土遺物はない。



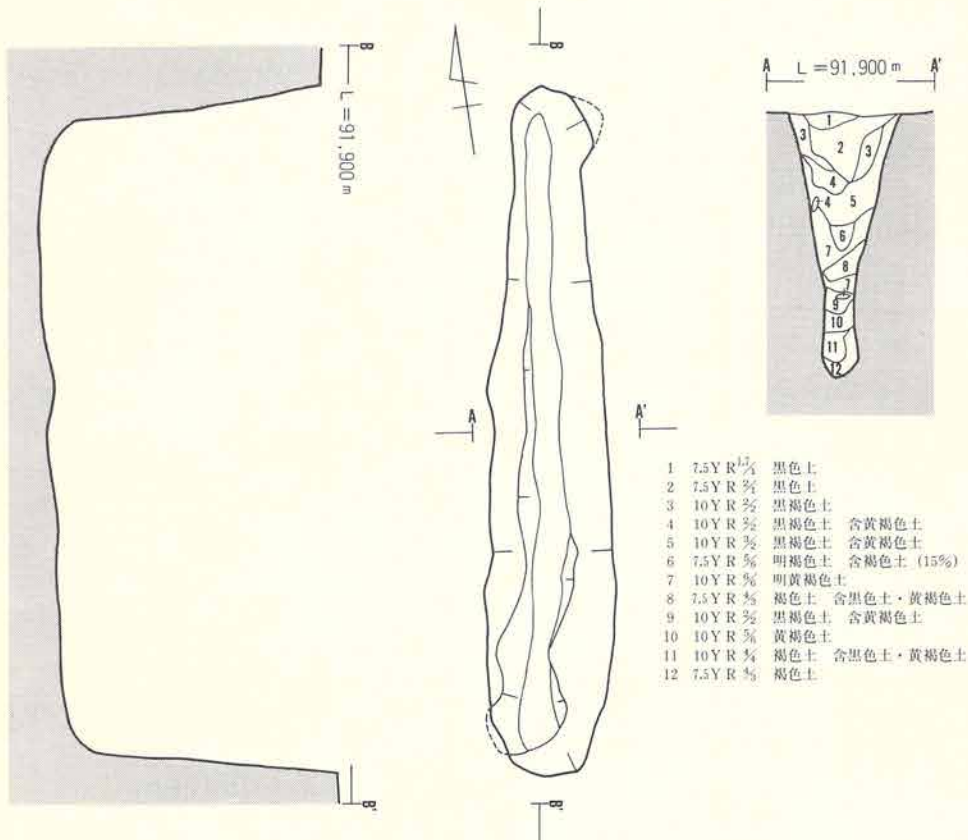
第29図 CIIIc2 陥し穴状遺構

DIV b 4 陥し穴状遺構 (第30図、写真図版18)

調査区域南東部グリッドDIV b 4に位置し、DIV c 6土坑の北西約8mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は細長い溝状で、長軸方向はほぼ南北である。規模は開口部径35～70×365cm、底部径10～20×335cm、深さは中央部で150cm、両端部で145～150cmである。短軸の断面はV字形で、底部から45cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後緩く外傾している。長軸の断面は逆台形状である。底部はほぼ平坦である。埋土は12層に分けられ、上半分は黒色土・黒褐色土、下半分は褐色土・明黄褐色土が主体である。

出土遺物はない。



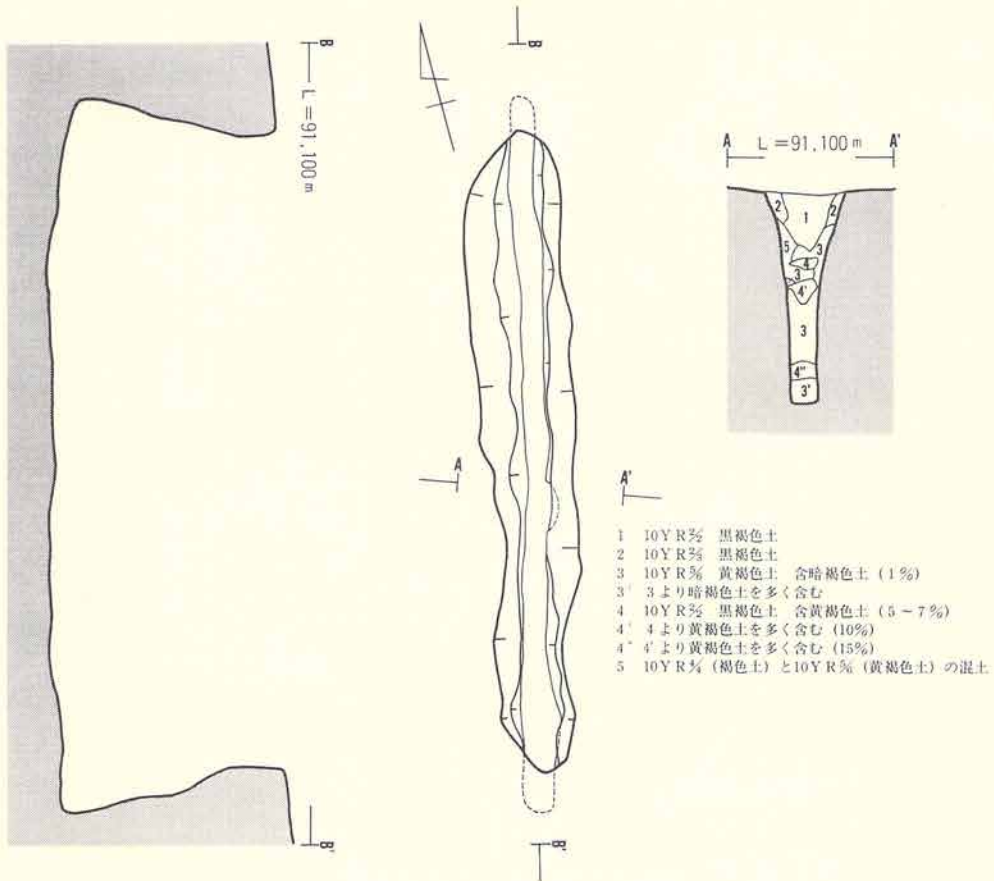
第30図 DIVb4 陥し穴状遺構

D V d 0 陥し穴状遺構 (第 31 図、写真図版 18)

調査区域南東部グリッド D V d 0 に位置し、D IV c 6 土坑の東約 12 m にある。検出面はⅢ層である。なお、本遺構の南側の一部は 11 号溝跡によって切られている。

平面形は細長い溝状で、長軸方向はほぼ南北である。規模は開口部径 40 ~ 50 × 340 cm、底部径 10 ~ 20 × 380 cm、深さは中央部で 125 cm、両端部で 110 ~ 115 cm である。短軸の断面は開口部が狭い V 字状で、底部から 70 cm まではほぼ垂直に立ち上がり、その後緩く外傾している。長軸の断面は両端とも内傾し、フラスコ状である。底部はほぼ平坦で、両端が若干浅くなっている。埋土は 8 層に分けられ、上半分は黒褐色土が、下半分は黄褐色土が主体である。

出土遺物はない。



第31図 D V d0 陥し穴状遺構

5 土坑

土坑は柱穴状のものを含め、全部で34基検出されている。大半は調査区域中央部から北側にかけての検出である。

A II h 0 ①土坑 (第32図、写真図版19)

調査区域北西端グリッドA II h 0に位置し、A II h 0陥し穴の南東約10 cm、A II h 0 ②土坑の東約40 cmにある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径70×80 cm、底部径60×70 cm、深さは最深部で25 cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部はほぼ平坦である。埋土は3層に分けられ、黄褐色土が混入する暗褐色土が主体である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

A II h 0 ②土坑 (第32図、写真図版19)

調査区域北西端グリッドA II h 0に位置し、A II h 0 ①土坑の東約40 cm、A II h 0 ③土坑の北西約40 cmにある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径85×90 cm、底部径70×75 cm、深さは最深部で25 cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部はほぼ平坦である。埋土は3層に分けられ暗褐色土が主体で、3層上部には炭化物が混入している。

出土遺物はなく、時期は不明である。

A II h 0 ③土坑 (第32図、写真図版19)

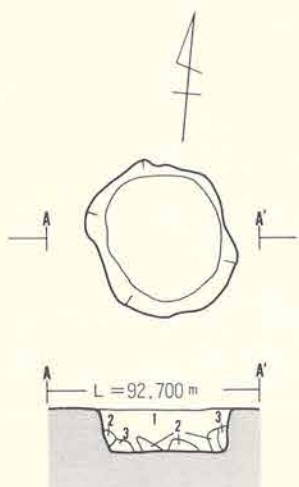
調査区域北西端グリッドA II h 0に位置し、A II h 0 ②土坑の南東約40 cmにある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ長方形で、規模は開口部径80×100 cm、底部径50×75 cm、深さは最深部で25 cmである。壁は外傾しながら立ち上がり、底部はほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、いずれも黒褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

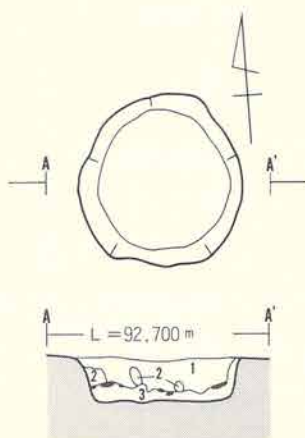
B I a 6 土坑 (第32図、写真図版19)

調査区域北西端グリッドB I a 6、a 7、b 6、b 7にまたがって位置し、B I a 6住居跡の炉の南西約40 cm、B I b 6土坑の東約2 mにある。B I a 6住居跡の床面精査中確認されたものである。



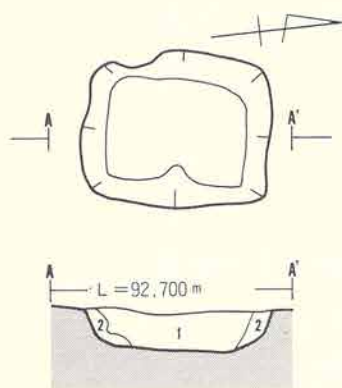
- 1 10Y R 暗褐色土 含黄褐色土 (1%)
- 2 10Y R 暗褐色土 含黄褐色土 (5%)
- 3 10Y R (暗褐色土) と 10Y R (黄褐色土) の混土

A II h0 ①土坑



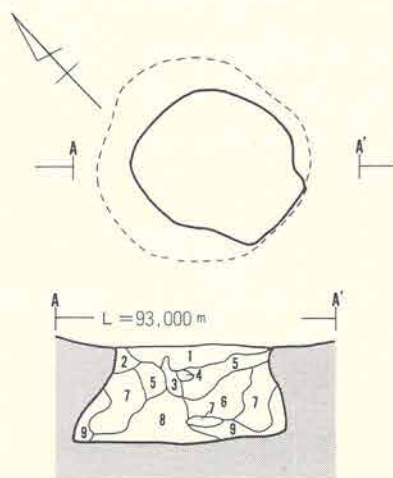
- 1 10Y R 暗褐色土 含黄褐色土 (1%)
- 2 10Y R (暗褐色土) と 10Y R (黄褐色土) の混土
- 3 10Y R 暗褐色土 含黄褐色土 (7%) 含炭化物

A II h0 ②土坑



- 1 10Y R 黑褐色土
- 2 10Y R 黑褐色土 含黄褐色土 (10%)

A II h0 ③土坑



- 1 10Y R 暗褐色土
- 2 10Y R 濃い黄褐色土 含褐色土 (2%)
- 3 10Y R 黑褐色土
- 4 10Y R 明黄褐色土
- 5 10Y R 暗褐色土
- 6 10Y R 黑褐色土
- 7 10Y R 暗褐色土 含褐色土 (25-30%)
- 8 10Y R 褐色土 含黄褐色土 (30-40%)
- 9 10Y R 濃い黄褐色土 含褐色土 (30-40%)

B Ia6 土坑

第32図 A II h0①・②・③・B Ia6 土坑

開口部は径70×90cmの不整形で、底部は直径約110cmの円形、深さは最深部で52cmである。

壁は内湾しながら立ち上がり、上方で垂直に立ち上がる。断面形はフラスコ状である。底部は凹凸がなく平坦である。埋土は全体によくしまり9層に分けられ、暗褐色土が主体である。自然堆積である。

出土遺物はないが、住居跡の床面より下で検出されたことから、住居跡より古いものと考えられる。

B I b 6 土坑 (第 33 図、写真図版 20)

調査区域北西端グリッド B I b 6 に位置し、B I a 6 土坑の西約 2 m にある。検出面はⅢ層である。

開口部は径 60 × 70 cm の不整形で、底部は 75 × 85 cm の楕円形である。深さは最深部で 36 cm である。壁は緩く内湾しながら立ち上がっている。断面形はフラスコ状で、底部は凹凸がなく平坦である。埋土は堅くしまり 3 層に分けられ、暗褐色土が主体である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B II c 8 土坑 (第 33 図、写真図版 20)

調査区域北北西グリッド B II c 8 に位置し、B II c 9 住居跡の西約 1 m にある。検出面はⅢ層である。

柱穴状の小土坑で、規模は開口部径 30 × 35 cm、底部径 15 × 20 cm、深さは最深部で 13 cm である。壁は外傾しながら立ち上がり、底部は若干凹凸がある。埋土は 3 層に分けられ、1 層には炭化物が多量に混入している。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B II d 5 土坑

遺構 (第 33 図、写真図版 20)

調査区域北西グリッド B II d 5 に位置し、B II d 6 土坑の南西約 3 m、2 号溝跡の東約 4 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ楕円形で、規模は開口部径 35 × 45 cm、底部径 25 × 35 cm、西側ほど深く、最深部で 16 cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は凹凸が多い。埋土は 4 層に分けられ、極暗褐色土が主体である。1 層は炭化物であり、3 層にも炭化物が混入している。

遺物 (第 33 図、写真図版 39)

土器 56 ~ 58 が埋土中位から出土している。ロクロ使用の土師器坏で、56、57 は口縁部、58

は底部である。内面はヘラミガキされ、黒色処理が施されている。58の底部切り離し技法は回転糸切りである。

時期

出土遺物から平安時代と推定される。

B II d 6 土坑 (第 33 図、写真図版 20)

調査区域北西グリッド B II d 6 に位置し、B II d 7 火葬墓の北西約 4 m にある。検出面は II b 層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 135 × 145 cm、底部径 110 × 120 cm、深さは最深部で 15 cm である。壁は外傾気味にやや緩く立ち上がっている。底部は凹凸があり、中央部が高くなっている。埋土は 11 層に分けられる。中央部は黒色～暗褐色土で、壁寄りには黒色～黒褐色土と黄褐色土との混土である。人為的埋め戻しである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B II e 6 ①土坑 (第 33 図、写真図版 21)

調査区域北西グリッド B II e 6 に位置し、B II d 7 火葬墓の西南西約 3.7 m、B II e 6 ②土坑の北約 2 m にある。検出面は II b 層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 35 × 36 cm、底部径 25 × 30 cm、深さは最深部で 18 cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は凹凸があり、中央から西壁に向かいやや緩く立ち上がる。埋土は 3 層に分けられる。3 層とも黒褐色土で、1・3 層には炭化物が混入し、特に 1 層の上部に多い。

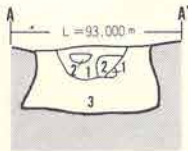
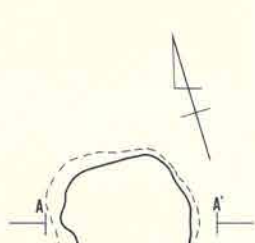
出土遺物はなく、時期は不明である。

B II e 6 ②土坑 (第 34 図、写真図版 21)

調査区域北西グリッド B II e 6 に位置し、B II e 6 ①土坑の南約 2 m、B II d 7 火葬墓の南西約 4.8 m にある。検出面は II b 層である。

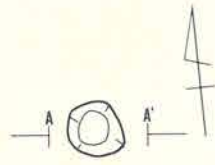
平面形は径 65 × 90 cm の不整形で、深さは最深部で 28 cm である。壁は東・西壁が緩く外傾し、南・北壁がほぼ垂直に立ち上がっている。底部は小さな凹凸がある。埋土は 5 層に分けられ、炭化物が混入する黒褐色土が大半を占めている。

出土遺物はなく、時期は不明である。



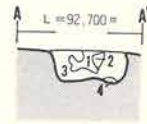
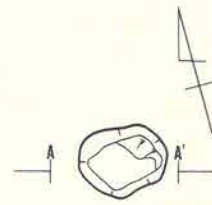
- 1 10Y R% 黑褐色土
- 2 10Y R% 暗褐色土
- 3 10Y R% 暗褐色土 含黄褐色土 (10%)

BI b6 土坑

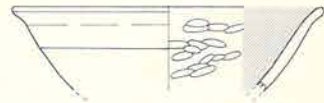


- 1 10Y R% 黑色土 含炭化物 (少量)
- 2 10Y R% 黑褐色土
- 3 10Y R% 暗褐色土

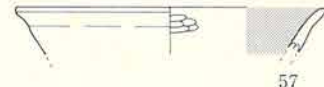
BII c8 土坑



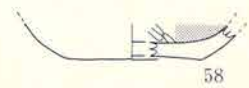
- 1 炭化物
- 2 10Y R% 黄褐色土 含暗褐色土
- 3 7.5Y R% 棕暗褐色土 含暗褐色土, 含炭化物
- 4 10Y R% 褐色土



56

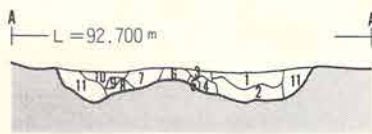
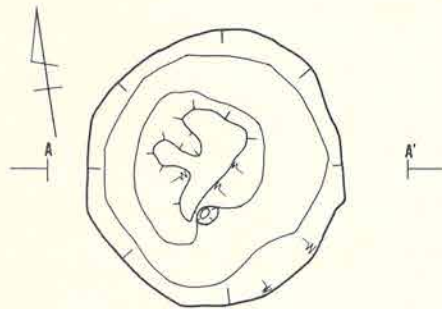


57



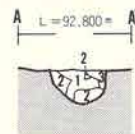
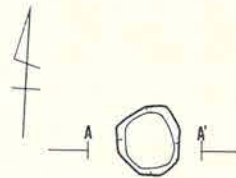
58

BII d5 土坑・出土遺物



- 1 10Y R% 黑褐色 含黄褐色土 (1~2%)
- 2 10Y R% (暗褐色土) と 10Y R% (褐色土) と 10Y R% (黄褐色土) の混土
- 3 10Y R% (黑褐色土) と 10Y R% (褐色土) の混土
- 4 10Y R% ~% 黑-黑褐色土
- 5 10Y R% 黄褐色土 含炭化物 (少量)
- 6 10Y R% 褐色土
- 7 10Y R% 暗褐色土 含黑色土
- 8 10Y R% (黑褐色土) と 10Y R% (褐色土) と 10Y R% (黄褐色土) の混土
- 9 10Y R% 暗褐色土 含黄褐色土
- 10 10Y R% 黑褐色土
- 11 10Y R% (黑色土) と 10Y R% (黄褐色土) の混土

BII d6 土坑



- 1 10Y R% 黑褐色土 含炭化物 (多量)
- 2 10Y R% 黑褐色土
- 3 10Y R% 黑褐色土 含炭化物 (少量)

BII e6 ①土坑

第33図 BI b6・BII c8・BII d5・BII d6・BII e6 ①土坑

B II f 4 ①土坑、B II f 4 ②土坑

遺構 (第34図、写真図版21)

調査区域北西グリッドB II f 4に位置し、40 cmの間隔で対をなして並んでいる。検出面はⅢ層である。両者とも長軸方向は北東-南西である。

B II f 4 ①土坑は平面形が径40～50×105 cmの長楕円形で、深さは最深部で22 cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は北東側と南西側が径35 cmの円形状に窪み、南西側が若干低くなっている。埋土は大半を除去してしまい、北東側の一部のみの残存であるが、3層に分けられ、上部は黒褐色土、下部は暗褐色土と黄褐色土の混土である。

B II f 4 ②土坑はB II f 4 ③土坑に南西部の一部を切られている。平面形は径40～50×100 cmの長楕円形で、深さは最深部で24 cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は北東側と南西側が20×25 cmの楕円形状に窪み、南西側が若干低くなっている。埋土は大半を除去してしまい、北東壁際の黒褐色土が僅かに残存するのみである。埋土には十和田系火山灰が混入している。

遺物 (第34図、写真図版39)

B II f 4 ②土坑の埋土上部から土器59が出土している。壺の頸部から口縁部で、口縁部は軽く外傾する。頸部と口縁部にはπ字工字文が施文されている。内面には口縁部に沿って沈線が1本巡っている。

時期

遺物が埋土上部から出土しているが、時期は特定できず不明である。

B II f 4 ③土坑

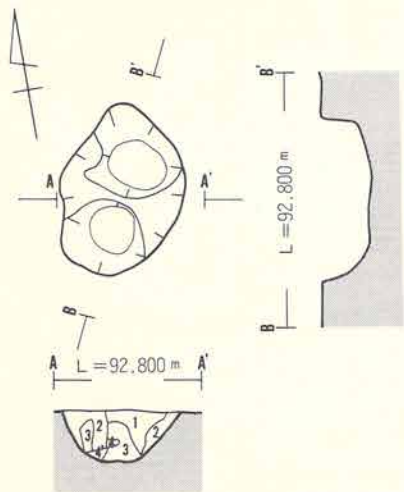
遺構 (第34図、写真図版22)

調査区域北西グリッドB II f 4に位置し、B II f 4 ②土坑の南西部の一部を切っている。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ楕円形で、規模は開口部径150×180 cm、底部径110×125 cm、深さは最深部で20 cmである。壁は緩く外傾しながら立ち上がっている。底部は凹凸があり、中央部が若干高くなっている。埋土は9層に分けられ、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土が主体である。人為的埋め戻しである。

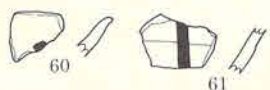
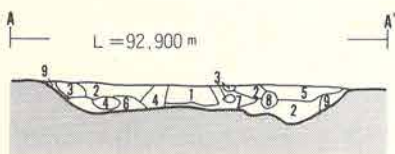
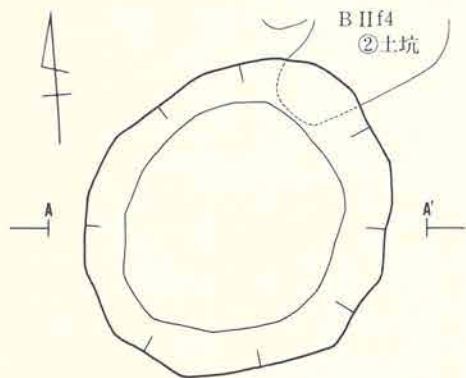
遺物 (第34図、写真図版39)

土器60と61が埋土上部から出土している。どちらもロクロ使用の土師器坏で、60は口縁部片、61は体部片で、同一個体と思われる。外面には墨書が認められる。

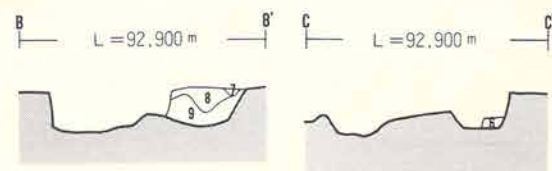
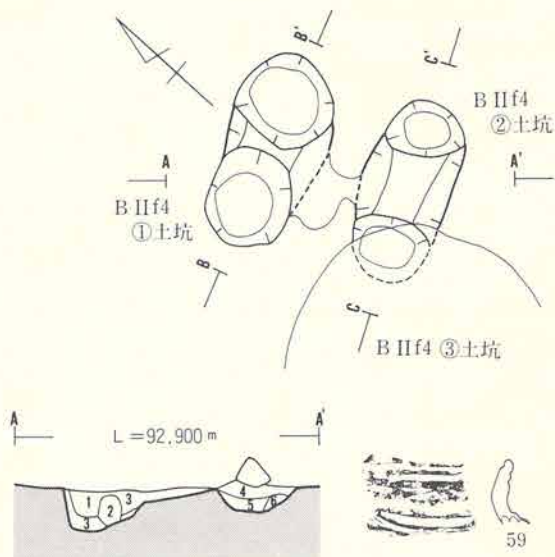


- 1 10 Y R% 黑褐色土 含炭化物 (多量)
- 2 10 Y R% 黑褐色土 含炭化物 (少量)
- 3 10 Y R% 黑褐色土 含炭化物 (多量)・暗褐色土
- 4 10 Y R%~% 明黄褐色土
- 4' 4に暗褐色土を含む

B II e6 ②土坑



B II f4 ③土坑・出土遺物



- 1 7.5 Y R% 黑色土
- 2 10 Y R% 黑褐色土 含黑色土・黄褐色土
- 3 10 Y R% 暗褐色土 含黄褐色土
- 4 10 Y R% 黑褐色土 含褐色土・黄褐色土・炭化物
- 5 10 Y R% 黑色土 含褐色土・黄褐色土
- 6 10 Y R% (黑褐色土)と10 Y R% (暗褐色土)の混土, 含炭化物
- 7 7.5 Y R% 黑色土 含黄褐色土
- 8 10 Y R% 黑褐色土 含黄褐色土・炭化物
- 9 10 Y R% (暗褐色土)と10 Y R% (黄褐色土)の混土

B II f4 ①・②土坑・出土遺物

- 1 10 Y R% (黑褐色土)と10 Y R% (暗褐色土)の混土, 含黄褐色土
- 2 10 Y R% 黑褐色土 含褐色土・黄褐色土
- 3 7.5 Y R% 黑色土
- 4 10 Y R% 黑褐色土 含黄褐色土
- 5 10 Y R% 黑色土 含褐色土・黄褐色土・炭化物
- 6 10 Y R% (黑褐色土)と10 Y R% (明黄褐色土)の混土
- 7 7.5 Y R% 褐色土 含褐色土
- 8 10 Y R% 褐色土
- 9 10 Y R% 黑褐色土 含黄褐色土

第34図 B II e6 ②・B II f4 ①・②・③土坑

時期

遺物が埋土上部から出土しているが、時期は特定できず不明である。

B II f 8 土坑 (第 35 図、写真図版 22)

調査区域北西グリッド B II f 8 に位置し、B II e 7 住居跡の東約 1.5 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、規模は開口部径 100 × 125 cm、底部径 85 × 100 cm、深さは最深部で 18 cm である。壁は緩く外傾しながら立ち上がっている。底部は凹凸があり、中央から南・東壁に向かい次第に高くなっている。埋土は 5 層に分けられる。1 層は黒色土で多量の炭化物が混入している。2～5 層は黒褐色土で、2 層には炭化物が若干混入している。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B II g 5 土坑 (第 35 図、写真図版 22)

調査区域中央部やや西寄りグリッド B II g 5 に位置し、B II f 4 ③土坑の南東約 4 m にある。

検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、規模は開口部径 30 × 40 cm、底部径 20 × 21 cm、深さは最深部で 20 cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部には小さな凹凸があるがほぼ平坦で、中央から東壁にかけて若干高くなっている。埋土は 5 層に分けられ、2 層の黒褐色土には炭化物が混入している。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B II g 8 土坑 (第 35 図、写真図版 22)

調査区域中央部やや北西グリッド B II g 8 に位置し、B II e 7 住居跡の南約 4 m、B II h 8 土坑の北約 1 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形は円形で、規模は開口部径 24 × 25 cm、底部径 14 × 15 cm、深さは最深部で 16 cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は凹凸が若干あり、壁際は丸味を帯びている。埋土は 3 層に分けられ、いずれも黒色土である。1 層には炭化物が混入している。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B II h 8 土坑 (第 35 図、写真図版 23)

調査区域中央部やや北西グリッド B II h 8 に位置し、B II e 7 住居跡の南約 6 m、B II g 8

土坑の南約1 mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、規模は開口部径25×30 cm、底部径15×20 cm、深さは最深部で17 cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は凹凸が若干あり、中央部から西側が高くなっている。埋土は3層に分けられる。1層は黒褐色土、2・3層は黒色土で、1・2層には炭化物と黄褐色土が混入している。

出土遺物はなく、時期は不明である。

BⅢc0土坑

遺構（第35図、写真図版23）

調査区域北側グリッドBⅢc0に位置し、BⅡc9住居跡の東約2 mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、規模は開口部径65×80 cm、底部径50×55 cm、深さは最深部で25 cmである。壁は緩く外傾して立ち上がっている。底部は凹凸がなく平坦である。埋土は5層に分けられ、炭化物が混入する黒褐色土が主体である。

遺物（第35図、写真図版39）

土器62～64が埋土中～下部にかけて出土している。

62は甕の体部下半部で、地文にLR単節縄文が斜め回転で施文されている。63、64は浅鉢の体部片で、地文にはどちらもLR単節縄文が斜め回転で施文されている。

時期

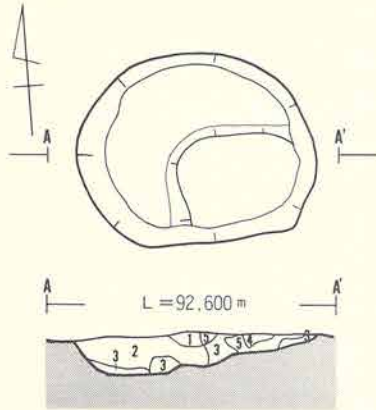
出土遺物から、弥生時代初頭と推定される。

BⅢd3土坑（第35図、写真図版23）

調査区域北側グリッドBⅢd3に位置し、BⅢe3土坑の北西約2 m、3号焼土遺構の東約4 mにある。検出面はⅢ層である。

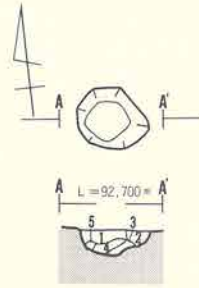
平面形は楕円形で、規模は開口部径95×125 cm、底部径85×95 cm、深さは最深部で16 cmである。壁は外傾しながら緩く立ち上がり、底部は凹凸が多く、中央部が若干高くなっている。埋土は3層に分けられ、黒褐色土が主体で、1層には炭化物が若干混入している。

出土遺物はなく、時期は不明である。



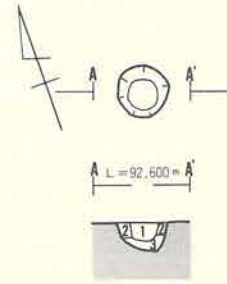
- 1 10Y R% 黒色土 含炭化物(多量)
- 2 10Y R% 黒褐色土 含炭化物(少量)
- 3 10Y R% 黒褐色土
- 4 10Y R% 黒褐色土 含褐色土(2~3%)
- 5 10Y R% 黒褐色土

B II f8 土坑



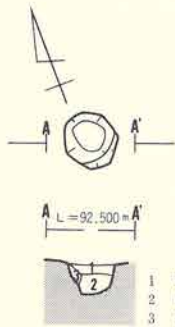
- 1 10Y R% 黒色土 含黄褐色土
- 2 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土・炭化物
- 3 10Y R% (黒褐色土)と10Y R% (明黄褐色土)の混土
- 4 10Y R% 褐色土
- 5 10Y R% 黒褐色土 含黑色土・黄褐色土

B II g5 土坑



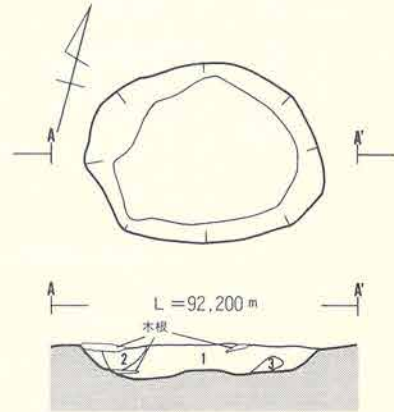
- 1 7.5Y R% 黒色土 含炭化物
- 2 7.5Y R% 黒-黒褐色土
- 3 10Y R% 黒色土 含黄褐色土

B II g8 土坑



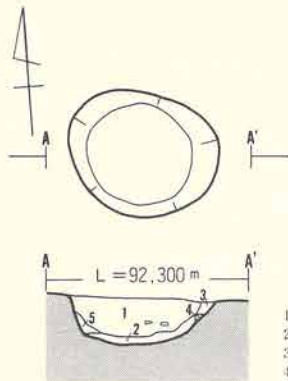
- 1 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土・炭化物
- 2 10Y R% 黒色土 含黄褐色土・炭化物
- 3 10Y R% 黒色土

B II h8 土坑



- 1 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土(1%) 含炭化物
- 2 10Y R% (褐色土)と10Y R% (黄褐色土)の混土
- 3 10Y R% (暗褐色土)と10Y R%(黄褐色土)の混土

B III d3 土坑



- 1 10Y R% 黒褐色土 含炭化物(少量)
- 2 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土(15%)
- 3 10Y R% 黒褐色土
- 4 10Y R% 褐色土
- 5 7.5Y R% 黒色土 含黄褐色土(1%)

B III c0 土坑・出土遺物



第35図 B II f8・B II g5・B II g8・B II h8・B III c0・B III d3 土坑

B III e 3 ①土坑 (第 36 図、写真図版 23)

調査区域北側グリッド B III e 3、e 4 にまたがって位置し、B III d 3 土坑の南東約 2 m、B III e 3 ②土坑の北北東約 1 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形は不整形で、規模は開口部径 60 × 95 cm、底部径 60 × 90 cm、深さは最深部で 30 cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は小さな凹凸があり、中央から東側が若干低くなっている。埋土は 5 層に分けられる。暗褐色土・黄褐色土が混入する黒褐色土と、黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土の混土が主体である。人為的埋め戻しである。

出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

B III e 3 ②土坑 (第 36 図、写真図版 24)

調査区域北側グリッド B III e 3 に位置し、B III e 3 ①土坑の南南西約 1 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 85 × 100 cm、底部径 75 × 80 cm、深さは最深部で 18 cm である。壁は西壁が外傾しながら緩く立ち上がり、その後若干内湾している。底部は凹凸が若干あるがほぼ平坦であり、西壁際から径 8 × 9 × 22 cm の礫が 1 個出土している。埋土は 7 層に分けられる。黒色土・黒褐色土・暗褐色土が主体で、3 層と 6 層には炭化物が混入している。

出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

B III e 5 土坑

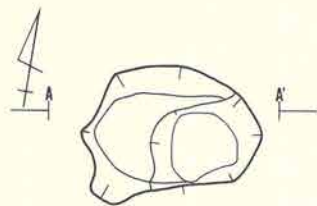
遺構 (第 36 図、写真図版 24)

調査区域北側 B III e 5 に位置し、B III f 5 ①土坑の東北東約 2 m、B III f 5 ②土坑の北東約 0.5 m にある。検出面はⅢ層である。

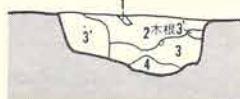
平面形は楕円形で、規模は開口部径 100 × 110 cm、底部径 80 × 90 cm、深さは最深部で 29 cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部はほぼ平坦で、中央から南東にかけて若干低くなっている。埋土は 6 層に分けられる。黒褐色土が主体であり、1・2 層には炭化物が混入している。

遺物 (第 37 図、写真図版 39)

土器 65、66 が出土している。65 は甕の体部下半部から頸部である。体部上位に最大径を持ち、内湾しながら頸部へ続き、体部と頸部の境には段が付されている。地文には L R 単節縄文が上位と下位は横回転で、中位は斜め回転で施文されている。外面には中位から上位にかけて、内面には下端にそれぞれ炭化物が付着している。66 は甕の体部上半部から口縁部である。上半部は内湾しながら段をもって頸部へ続き、頸部は外傾している。口唇部には L R 単節縄文が回

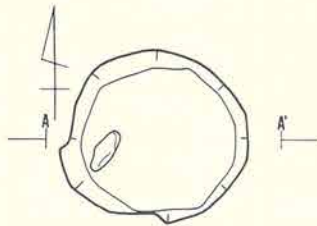


L = 92,200 m

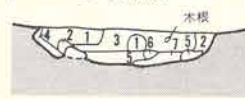


- 1 10Y R% (暗褐色土) と10Y R (黄褐色土) との混土
- 2 10Y R% 黒褐色土 含暗褐色土 (15%)
含黄褐色土 (5%)
- 3 10Y R% (黒褐色土) と10Y R% (暗褐色土) と
10Y R% (黄褐色土) の混土
- 3' 3よりしまりなく、黄褐色土を多く含む
- 4 10Y R% (暗褐色土) と10Y R% (黄褐色土) の混土

B IIIe3 ①土坑

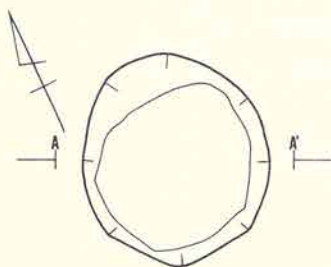


L = 92,200 m

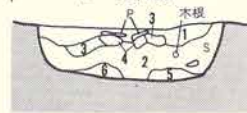


- 1 10Y R% 黒色土 含褐色土
- 2 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土
- 3 10Y R% 黒褐色土 含炭化物
- 4 10Y R% (黒褐色土) と10Y R% (黄褐色土) の混土
- 5 10Y R% 暗褐色土 含褐色土・黄褐色土
- 6 10Y R% 褐色土 含黄褐色土・炭化物
- 7 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土

B IIIe3 ②土坑

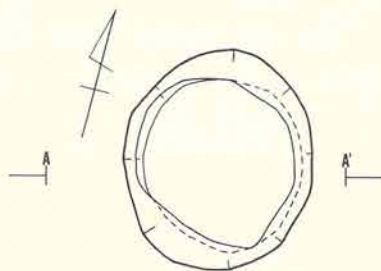


L = 92,100 m

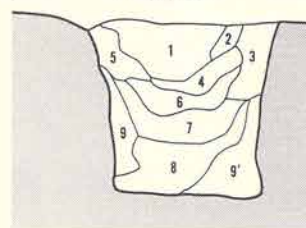


- 1 10Y R% 黒褐色土 含炭化物 (少量)
- 2 10Y R% 黒褐色土 含炭化物 (少量)
- 3 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土 (25%)
- 4 10Y R% 明黄褐色土
- 5 10Y R%~% 黒褐色土 含黄褐色土 (10%)
- 6 10Y R% 暗褐色土 含黄褐色土 (25~30%)

B IIIe5 土坑



L = 92,100 m



- 1 10Y R% 黒色土
- 2 10Y R%~% 黒褐色土
- 3 10Y R%~% 黒褐色土 含黄褐色土 (2%)
- 4 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土 (30%)
- 5 10Y R% 黒褐色土
- 6 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土 (15%) 含炭化物 (少量)
- 7 10Y R%~% 黒褐色土 含黄褐色土 (20%)
- 8 10Y R% (黒褐色土) と10Y R% (黄褐色土) の混土
- 9 10Y R% (黒褐色土) と10Y R% (黄褐色土) の混土
- 9' 9より黄褐色を多く含む

B IIIf5 ①土坑

第36図 B IIIe3①・②・B IIIe5・B IIIf5 ①土坑

転施文され、逆三角形の刻みが1カ所ある。地文にはLR単節縄文が頸部付近には斜め回転で、下位には横回転で施文されている。外面には炭化物が付着している。どちらも胎土に径1~2mmの砂礫が含まれている。

時期

出土遺物から弥生時代初頭と推定される。

B III f 5 ①土坑

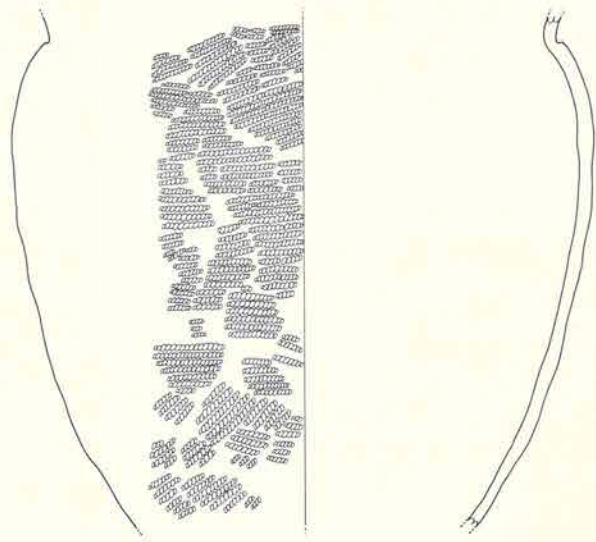
(第36図、写真図版24)

調査区域北側グリッドB III f 5に位置し、B III f 5 ②土坑の西約0.5mにある。検出面はⅢ層である。

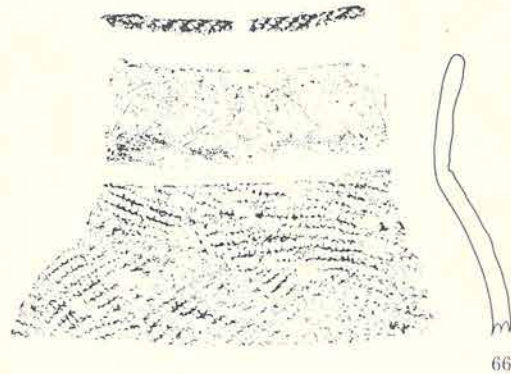
平面形はほぼ円形であり、規模は開口部径100×115cm、底部径85×90cm、深さは最深部で92cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ50cm位から若干外傾している。底部は凹凸がなく、水平

で平坦である。埋土は10層に分けられる。上位は黒色土・黒褐色土、下位は黒褐色土と黄褐色土との混土である。6層の黒褐色土には微小な炭化物が混入している。自然堆積である。

出土遺物はなく、時期・性格は不明である。



65 (S=1/4)



66

第37図 BIIIe5土坑出土遺物

B III f 5 ②土坑

遺構（第 38 図、写真図版 24）

調査区域北側 B III f 5 に位置し、B III e 5 土坑の南西約 0.5 m、B III f 5 ①土坑の東約 0.5 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 90×100 cm、底部径 80×85 cm、深さは最深部で 50 cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は凹凸が若干あるが、平坦でほぼ水平である。埋土は 6 層に分けられ、黒褐色土が主体であり、1・2・3 層には炭化物が若干混入している。

遺物（第 38 図、写真図版 39）

土器 67～69 と石器 70 が出土している。

67 は甕の口縁部で、軽く内湾し、LR 単節縄文が斜め回転で施文されている。68 は甕の体部上半部から頸部である。軽く内湾しながら頸部へ続いている。地文は LR 単節縄文斜め回転である。胎土には径 1 mm の砂礫が多く含まれる。69 は体部片で、地文は LR 単節縄文斜め回転である。内外面には炭化物が付着している。70 は凹石で、両面が窪んでいる。

時期

出土遺物から、弥生時代初頭と思われる。

B III g 3 土坑（第 38 図、写真図版 25）

調査区域中央部やや北側グリッド B III g 3 に位置し、B III g 4 土坑の北西約 4 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 53×57 cm、底部径 68×73 cm、深さは最深部で 36 cm である。壁は内湾しながら立ち上がっている。底部は凹凸がなく、滑らかで平坦である。埋土は 6 層に分けられ、黒色土、黒褐色土が主体である。2・3 層には炭化物が混入している。自然堆積である。

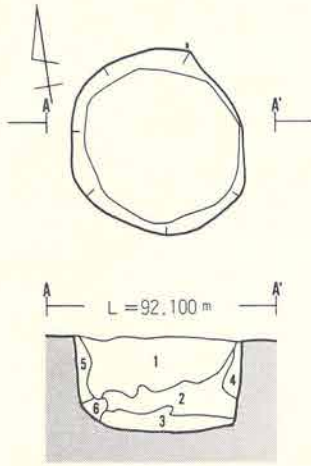
出土遺物はなく、時期は不明である。

B III g 4 土坑（第 38 図、写真図版 25）

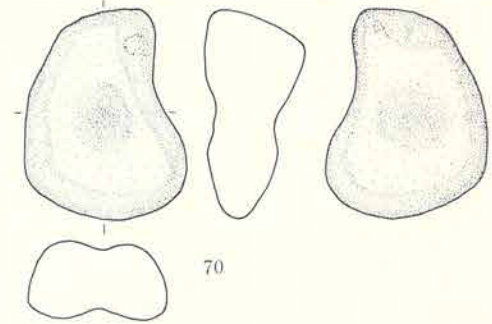
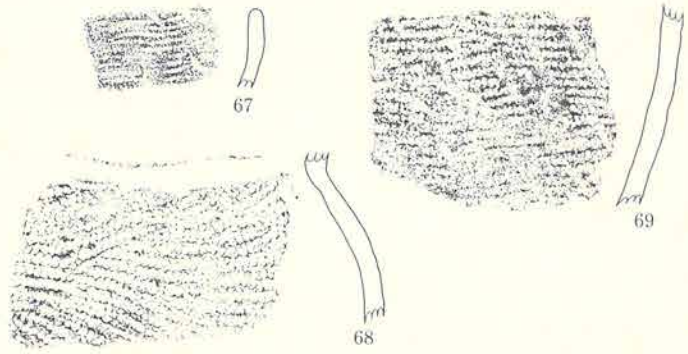
調査区域中央部やや北東グリッド B III g 4 に位置し、B III g 3 土坑の南東約 4 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 120×130 cm、底部径 100×115 cm、深さは最深部で 27 cm である。壁はやや外傾気味に立ち上がっている。底部は凹凸があるがほぼ平坦である。埋土は 6 層に分けられ、黄褐色土が混入する黒褐色土が主体である。人為的埋め戻しである。

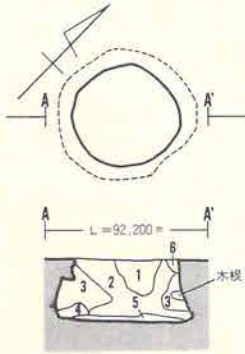
出土遺物はなく、時期は不明である。



- 1 10Y R% 黒褐色土 含炭化物
- 2 10Y R% 黒褐色土 含炭化物
- 3 10Y R%~% 黒褐色~暗褐色土 含炭化物
- 4 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土 (大ブロック)
- 5 10Y R% (黒褐色土) と10Y R% (黄褐色土) の混土
- 6 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土 (15~20%)

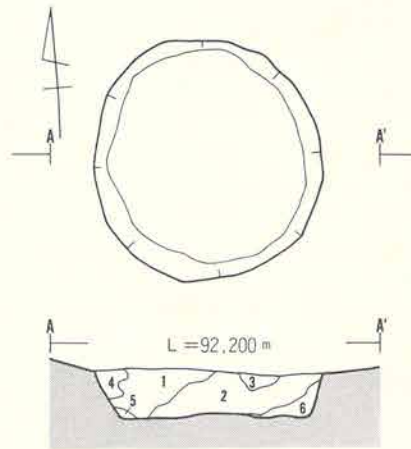


BIII f5②土坑・出土遺物



- 1 10Y R% 黒色土
- 2 10Y R% 黒褐色土 含炭化物
- 3 10Y R% 黒褐色土 含炭化物
- 4 10Y R% 黒褐色土
- 5 10Y R% 黒褐色土
- 6 10Y R% 褐色土

BIII g3 土坑



- 1 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土 (1%)
- 2 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土 (3%)
- 3 10Y R% 暗褐色土
- 4 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土 (5~7%)
- 5 10Y R% 黒褐色土 含黄褐色土 (20%)
- 6 10Y R% (黒褐色土) と10Y R% (黄褐色土) の混土

BIII g4 土坑

第38図 BIII f5②・BIII g3・BIII g4土坑

BⅢh6土坑（第39図、写真図版25）

調査区域中央部やや北東グリッドBⅢh6に位置し、BⅢg4土坑の東南東約6mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は不整形で、規模は開口部径130×140cm、底部径95×105cm、深さは最深部で28cmである。壁は緩く外傾しながら立ち上がっている。底部は凹凸が多く、北側が若干窪む。埋土は5層に分けられ、黒褐色土と暗褐色土が主体である。1・2層には炭化物が若干混入している。人為的埋め戻しである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

BⅢi0土坑（第39図、写真図版25）

調査区域中央部グリッドBⅢi0に位置し、BⅢi2土坑の西約8m、BⅢj1土坑の北西約3mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、規模は開口部径125×145cm、底部径115×135cm、深さは最深部で38cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は北壁際が若干窪むが、ほぼ平坦である。埋土は3層に分けられ、3層とも明黄褐色土が混入する黒褐色土で、よくしまっている。人為的埋め戻しである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

BⅢi2土坑（第39図、写真図版26）

調査区域中央部グリッドBⅢi2に位置し、BⅢi0土坑の東約8m、BⅢi4土坑の西約9mにある。検出面はⅢ層である。

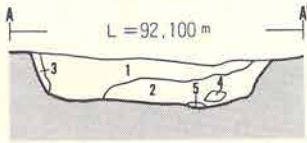
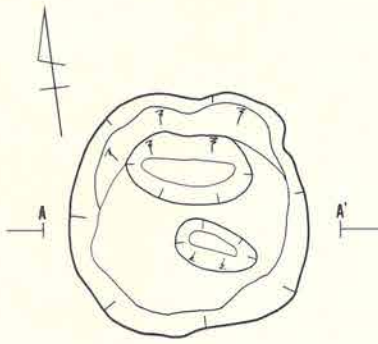
平面形はほぼ円形で、規模は開口部径125×140cm、底部径110×125cm、深さは最深部で26cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は凹凸があり北西側が窪んでいる。埋土は6層に分けられ、黒褐色土と黄褐色土の混土が主体である。人為的埋め戻しである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

BⅢi4土坑（第39図、写真図版26）

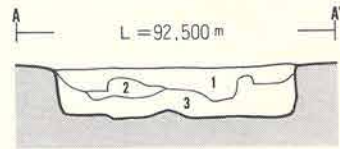
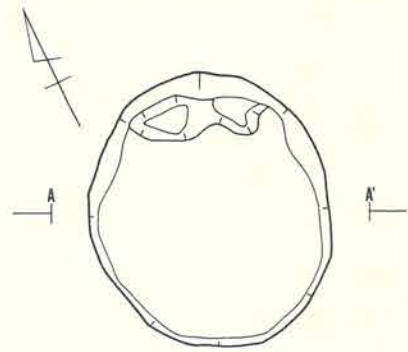
調査区域中央部グリッドBⅢi4とi5にまたがって位置し、BⅢh6土坑の南西約5m、BⅢi2土坑の東約9mにある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径50×60cm、底部径44×46cm、深さは最深部で12cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は凹凸が若干あるが、ほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、炭化物と黄褐色土が混入する黒褐色土が主体である。人為的埋め戻しである。



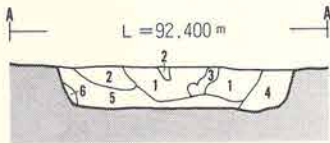
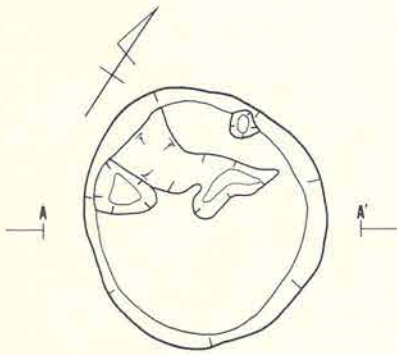
- 1 10Y R% 黑褐色土 含黄褐色土 (7%) 含炭化物 (少量)
- 2 10Y R% 暗褐色土 含黄褐色土 (5%) 含炭化物 (少量)
- 3 10Y R% 褐色土
- 4 10Y R% 暗褐色土 含黄褐色土 (20%)
- 5 10Y R% 黄褐色土 含暗褐色土

BIIIh6 土坑



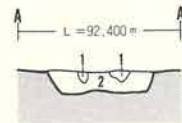
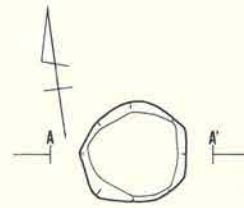
- 1 10Y R% 黑褐色土 含明黄褐色土 (1%)
- 2 10Y R% 黑褐色土 含明黄褐色土 (5~7%)
- 3 10Y R% 黑褐色土 含明黄褐色土 (7~10%)

BIIIi0 土坑



- 1 10Y R% (黑褐色土) と 10Y R% (黄褐色土) の混土
- 2 10Y R% (黑褐色土) と 10Y R% (暗褐色土) の混土
- 3 10Y R% 黄褐色土 含暗褐色土 (1%)
- 4 10Y R% (黑色土) と 10Y R% (暗褐色土) の混土
- 5 10Y R% 黑褐色土 含黄褐色土 (10%)
- 6 10Y R% 黄褐色土 含黑褐色土 (25%)

BIIIi2 土坑



- 1 10Y R% 黑褐色土
- 2 10Y R% 黑褐色土 含黄褐色土 (1%)・炭化物

BIIIi4 土坑

第39図 BIIIh6・BIIIi0・BIIIi2・BIIIi4 土坑

る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III j 1 土坑（第 40 図、写真図版 26）

調査区域中央部グリッド B III j 1 に位置し、B III i 0 土坑の南東約 3 m、B III i 2 土坑の西南西約 5 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 65 × 75 cm、底部径 60 × 65 cm、深さは最深部で 17 cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は凹凸が若干あるが、ほぼ平坦である。埋土は 3 層に分けられ、黒褐色土が主体であり、3 層とも黄褐色土が混入している。人為的埋め戻しである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

C II g 9 土坑（第 40 図、写真図版 26）

調査区域南側グリッド C II g 9 に位置し、C III e 3 掘立柱建物跡の南西約 16 m にある。検出面はⅢ層である。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 95 × 105 cm、底部径 100 × 115 cm、深さは最深部で 60 cm である。壁は僅かに内湾気味に立ち上がっている。底部は凹凸がなく、平坦である。埋土は 8 層に分けられ、黒色土と黒褐色土が主体であり、いずれにも黄褐色土が混入している。1・2 層には炭化物が混入している。

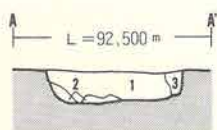
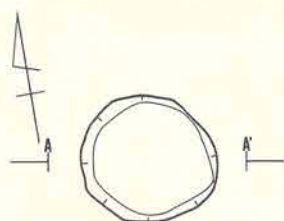
出土遺物はなく、時期は不明である。

C III b 4 土坑（第 40 図、写真図版 27）

調査区域中央部グリッド C III b 4 に位置し、C III b 2 掘立柱建物跡の東約 5 m にある。検出面はⅢ層である。

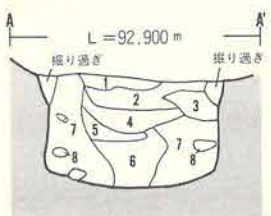
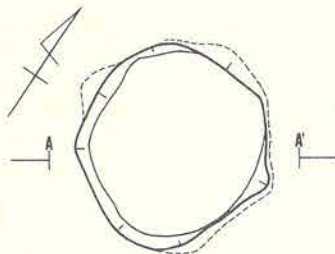
平面形は隅丸長方形で、規模は開口部径 100 × 240 cm、底部径 70 × 210 cm、深さは最深部で 23 cm である。壁は緩く外傾しながら立ち上がっている。底部は凹凸が多く、南・北壁際が若干窪んでいる。埋土は 3 層に分けられ、上部は黒褐色土、下部は暗褐色土と黄褐色土との混土である。1 層には炭化物が、1・2 層には十和田系火山灰が混入している。

出土遺物はなく、時期は不明である。



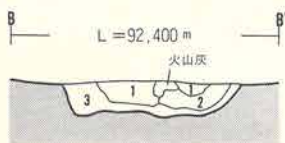
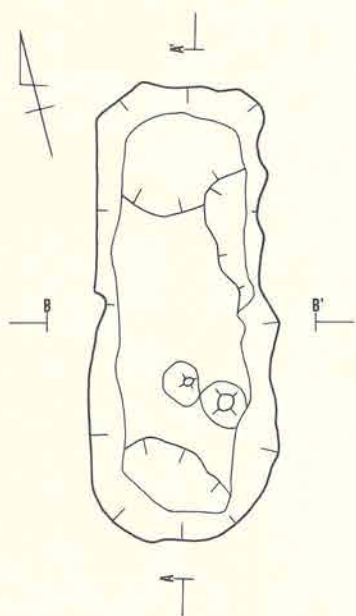
- 1 10Y R₂ 黑褐色土 含黄褐色土 (1%)
- 2 10Y R₂ 黑褐色土 含黄褐色土 (2~3%)
- 3 10Y R₂ 暗褐色土 含黄褐色土 (3~4%)

BIIIj1 土坑



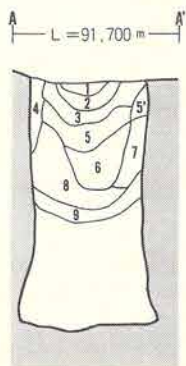
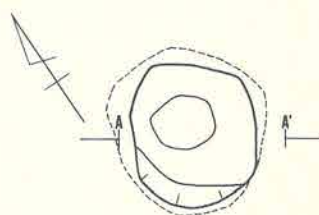
- 1 10Y R₂ 黑褐色土 含黄褐色土 含炭化物 (少)
- 2 10Y R₂ 黑褐色土 含黄褐色土 含炭化物 (少)
- 3 10Y R₂ 黑色土 含黑褐色土 含黄褐色土
- 4 10Y R₂ 黑褐色土 含黄褐色土
- 5 10Y R₂ 黑色土 含黄褐色土
- 6 10Y R₂ 黑褐色土 含黄褐色土
- 7 7.5Y R₂ 黑色土 含黄褐色土
- 8 7.5Y R₂ 褐色土 含黑色土 含黄褐色土

CIIg9 土坑



- 1 10Y R₂ 黑褐色土 含黄褐色土 (1%)・炭化物 含火山灰
- 2 10Y R₂ 黑褐色土 含黄褐色土 (1~2%) 含火山灰
- 3 10Y R₂ (暗褐色土) と10Y R₂ (黄褐色土) の混土

CIIIb4 土坑



- 1 10Y R₂ 黑色土
- 2 10Y R₂-2 黑色土
- 3 7.5Y R₂ 黑色土
- 4 10Y R₂ 褐色土 含小礫
- 5 10Y R₂ 黑褐色土
- 5' 5よりやわらかく、しまりなし
- 6 10Y R₂ 暗褐色土 含明黄褐色土
- 7 10Y R₂ 暗褐色土
- 8 10Y R₂ 黑褐色土
- 9 10Y R₂ (黑褐色土) と10Y R₂ (黄褐色土) の混土
- 9より下位は不明

DIVc6 土坑

第40図 BIIIj1・CIIg9・CIIIb4・DIVc6 土坑

DIV c 6 土坑 (第 40 図、写真図版 27)

調査区域南東部グリッド DIV c 6 と d 6 にまたがって位置し、DIV b 4 陥し穴状遺構の南東約 8 m にある。検出面はⅢ層である。

規模は開口部径 65 × 75 cm、底部径 80 × 90 cm、深さは最深部で 130 cm である。壁は底部から約 50 cm 位まで僅かに内湾し、その後はほぼ垂直気味に立ち上がっている。底部は中央部が僅かに窪んでいる。埋土は、調査の際に下半分を取り除いてしまい不明である。上半分は 9 層に分けられ、上部は黒色土・黒褐色土・暗褐色土が、下部は黒褐色土と暗褐色土の混土が主体である。自然堆積である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

6 炉跡

炉跡は1基検出されている。

B II a 0 炉跡

遺構（第41図、写真図版27）

調査区域北西部グリッドB II a 0に位置し、B I a 6住居跡の東約11 m、1号溝跡の西約5 mにある。検出面はⅢ層である。

焼土は37×40 cmの不整形に広がり、厚さは最大で8 cmである。焼土の中央からやや北東寄りに、底部を欠いた弥生土器が正立で埋設されている。焼土及び土器内は木根で攪乱を受けている。周辺には本遺構に伴う柱穴や周溝は検出されなかった。

遺物（第41図、写真図版39）

埋設土器として使用されていた甕は、欠失している部分があり復元できたのは一部である。71は体部で、軽く内湾しながら立ち上がるものと思われる。地文はR L単節縄文が縦回転で施文されている。胎土には径1～4 mmの砂礫が含まれている。

時期

検出面と埋設土器から弥生時代初頭と推定される。



第41図 B I a 0 炉跡・出土遺物

7 焼土遺構

焼土遺構は3基で、調査区域西端部に1基、北側に2基である。

1号焼土遺構（第42図、写真図版28）

調査区域西端グリッドB I i 5に位置し、B I g 7陥し穴状遺構の南西約12mにある。検出面はⅢ層である。

径2.5×4.6mの不整形で深さ2～12cmの掘り込みの中に、焼土が4ヵ所に散在しているものである。焼土4ヵ所のうち、最大のものは径40×80cmの不整形で、厚さは2～6cmである。掘り込みの埋土は黒褐色～暗褐色土が主体で、全体に植生根による攪乱をうけている。周辺には本遺構に伴う柱穴や周溝は検出されなかった。

出土遺物がなく、時期は不明である。

2号焼土遺構

遺構（第43図、写真図版28）

調査区域北側グリッドB III e 1に位置し、B III f 0住居跡の北約8m、B III d 2土坑の西南西約4mにある。検出面はⅡb層下部からⅢ層上部にかけてである。

焼土は径60×80cmの不整形に広がっている。中心部はよく焼成しており、厚さは最大で6cmである。

遺物（第43図、写真図版39）

焼土上から土器72～74が出土している。72は甕の口縁部片である。外面には炭化物が付着し、胎土には径1～3mmの砂礫が含まれている。73、74は甕の体部片である。73は地文にLR単節縄文が斜め回転で施文されており、胎土に径1～3mmの砂礫が含まれている。73は外面に、74は内面にそれぞれ炭化物が付着している。

時期

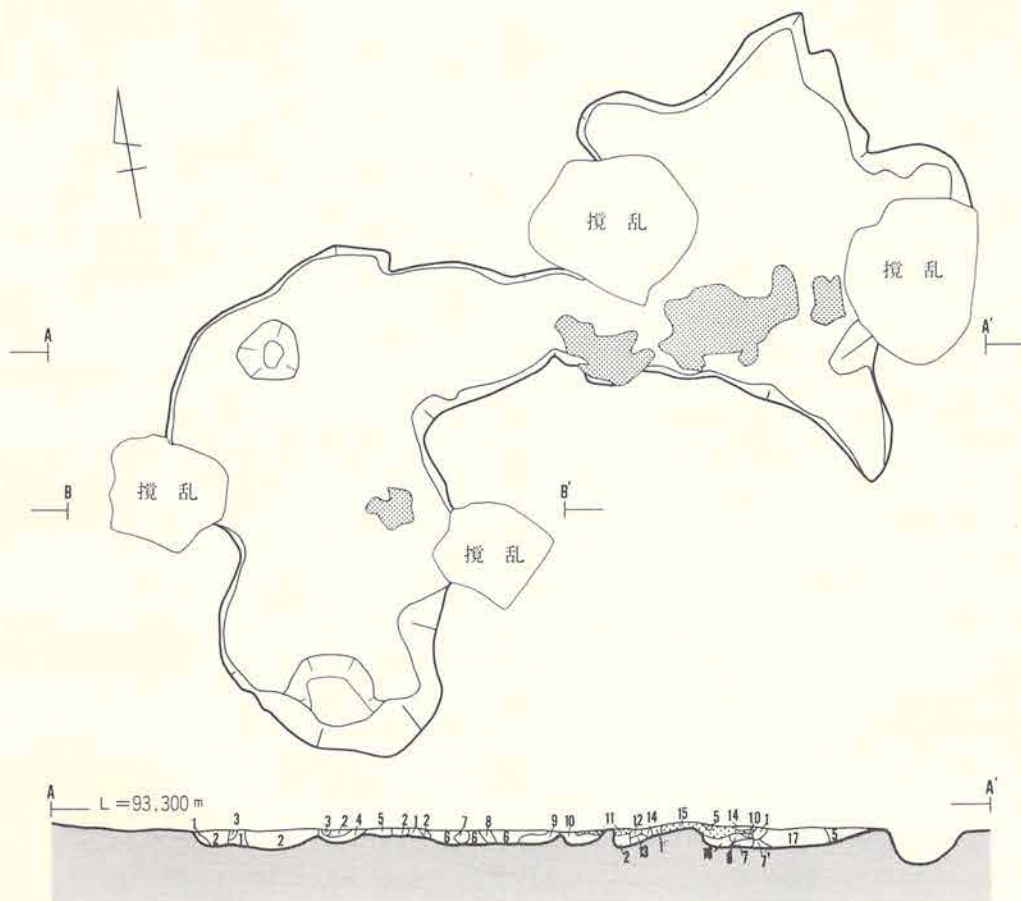
焼土の形成面と出土遺物から、弥生時代初頭と推定される。

3号焼土遺構

遺構（第44図、写真図版29）

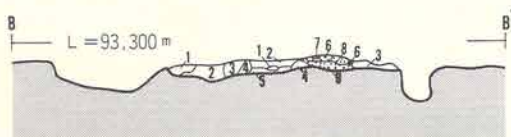
調査区域北側グリッドB III d 2に位置し、B III d 3土坑の西約8mにある。検出面はⅡb層下部からⅢ層上部にかけてである。

焼土は径50×70cmの不整形に広がっている。中心部はよく焼成しており、厚さは最大で6cmである。



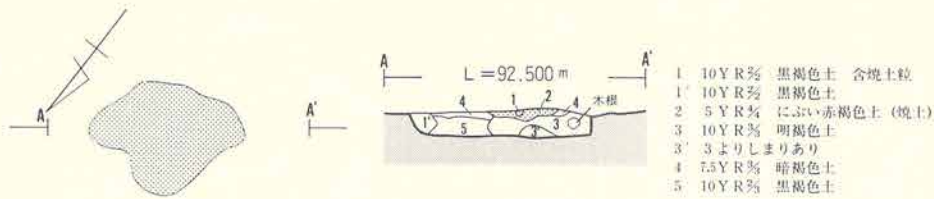
- 1 10 Y R 5% (黒褐色土) と 10 Y R 5% (黄褐色土) の混土
- 2 10 Y R 5% 黒褐色土 含黄褐色土
- 3 10 Y R 5% 暗褐色土
- 4 10 Y R 5% 黒褐色土 含褐色土・黄褐色土
- 5 10 Y R 5% 褐色土
- 6 10 Y R 5% (黒褐色土) と 10 Y R 5% (黒褐色土) の混土
- 7 10 Y R 5% 黄褐色土
- 7' 7より明るくしまりなし
- 8 10 Y R 5% 褐色土

- 9 10 Y R 5% (暗褐色土) と 10 Y R 5% (黄褐色土) の混土
- 10 10 Y R 5% 黒褐色土 含焼土粒・黒色土
- 11 5 Y R 5% 赤褐色土 (焼土)
- 12 10 Y R 5% (黒褐色土) と 10 Y R 5% (黒褐色土) の混土
- 13 10 Y R 5% (黒褐色土) と 10 Y R 5% (暗褐色土) の混土
- 14 7.5 Y R 5% 暗褐色土 含焼土粒
- 15 5 Y R 5% 赤褐色土 (焼土)
- 16 10 Y R 5% 暗褐色土 含焼土粒
- 17 10 Y R 5% 黒褐色土 含焼土粒・黄褐色土



- 1 10 Y R 5% (黒褐色土) と 10 Y R 5% (黄褐色土) の混土
- 2 10 Y R 5% 黒褐色土 含褐色土・黄褐色土
- 3 10 Y R 5% 褐色土 含黒褐色土
- 4 10 Y R 5% 明黄褐色土
- 5 10 Y R 5% (黒褐色土) と 10 Y R 5% (黒褐色土) の混土
- 6 5 Y R 5% 暗赤褐色土 (焼土)
- 7 2.5 Y R 5% 明赤褐色土 (焼土)
- 8 5 Y R 5% 暗赤褐色土 (焼土)
- 9 5 Y R 5% 赤褐色土 (焼土)
- 10 10 Y R 5% 黒褐色土
- 11 10 Y R 5% (暗褐色土) と 10 Y R 5% (黄褐色土) の混土

第42図 1号焼土遺構



72

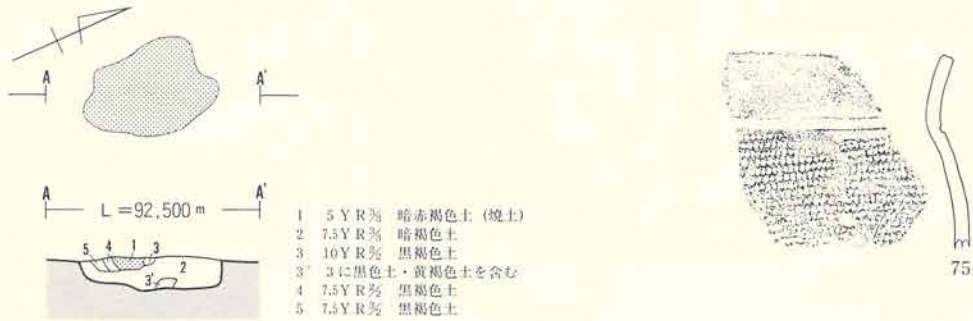


73



74

第43図 2号焼土遺構・出土遺物



75

第44図 3号焼土遺構・出土遺構

遺物 (第44図、写真図版39)

土器75が焼土付近から出土している。甕の体部上半部から口縁部で、頸部に沈線が1本巡り、口唇部は平らで凹んでいる。地文にはLR単節縄文が斜め回転で施文されている。胎土には金雲母が含まれ、内外面とも炭化物が付着している。

時期

焼土の形成面と出土遺物から、弥生時代初頭と推定される。

8 溝跡

溝跡は13条検出されている。調査区域西側に平行する2条、南側に1条、北側に2条、東及び南東側に8条である。方向は北西-南東、北東-南西、南-北、東-西である。時期・性格は不明である。

1号溝跡（第47図、写真図版29）

調査区域西側に位置し、南-北に延びている。本遺構の東側には2号溝跡が12m隔てて並行して走っている。検出面はⅢ層である。

南端は調査区域外へ延び、北端は崖際まで続いている。全長は約67mで、幅は30～70cm、深さは6～23cmである。断面形は浅いU字状である。埋土は黒褐色土が主体で、黄褐色土が混入している。

出土遺物はない。

2号溝跡（第47図、写真図版29）

調査区域西側に位置し、1号溝跡と並行している。検出面はⅢ層である。

南端は調査区域外へ延び、北端は崖際まで続いている。全長は約52.5mで、幅は45～80cm、深さは6～31cmである。全体に北側が若干低くなっている。断面形は皿状や箱型である。底面は小穴や小さな凹凸がある。埋土は黒褐色土、暗褐色土が主体で黄褐色土が粒状で混入している。

出土遺物はない。

3号溝跡（第48図、写真図版30）

調査区域南側にあり、東-西に延びている。検出面はⅢ層である。

両端とも消滅している。全長は約60mで、幅は40～110cm、深さは11～27cmである。全体に東側が低くなっている。断面形は浅皿状で、底面は小穴や小さな凹凸がある。埋土は黒褐色土が主体で、明褐色土や黄褐色土が粒状に混入し、堅くしまっている。

出土遺物はない。

4号溝跡（第48図、写真図版30）

調査区域東側にあり、南-北に延びている。検出面はⅢ層である。

南端は消滅し、北端は調査区外へ延びている。全長は約28.5mで、幅は50～90cm、深さは9～39cmである。全体に北側が低くなっている。断面形は浅皿状や鍋底状で、底面は小穴があ

るが、ほぼ平坦である。埋土は黒色土、黒褐色土である。

出土遺物はない。

5号溝跡（第49図、写真図版31）

調査区域東側に位置し、北西-南東に延びている。検出面はⅢ層である。

北西端は自然消滅し、南東端はグリッドCIV g 8で9号溝跡に合流する。また、グリッドBIV j 2で4号溝跡を切っている。全長は約46.5 mで、幅は35～65 cm、深さは8～38 cmで、南東側ほど広くかつ深くなっている。断面形は逆台形で、底面は若干凹凸があるがほぼ平坦である。埋土は黒褐色土でややしまりがあり、下半部には黄褐色土が粒状に混入している。

出土遺物はない。

6号溝跡（第49図、写真図版31）

調査区域東端に位置し、北西-南東に延びている。検出面はⅡ層下部からⅢ層にかけてである。北西端はグリッドCIV b 6付近で調査区域外へ延び、南東端はグリッドDV a 0で消滅している。また、グリッドCIV g 8で8号溝跡と合流している。全長は約60.5 m、幅は30～145 cm、深さは7～53 cmである。南東側ほど狭くかつ浅くなっている。断面形は台形や中央が窪んだ鍋底型である。底面は凹凸が少なく平坦である。埋土は黒色～黒褐色土で、北西側は下部に、南東側は上部に黄褐色土や明黄褐色土が粒状に混入している。

出土遺物はない。

7号溝跡

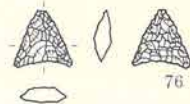
遺構（第50図、写真図版32）

調査区域南東部に位置し、北西-南東に延びている。検出面はⅢ層である。

北西端はグリッドCIV j 3で、南東端はグリッドDIV c 8でそれぞれ消滅している。また、グリッドDIV a 5、b 6で、それぞれ8号溝跡、10号溝跡と合流している。全長は約24.5 mで、幅は50～185 cm、深さは5～30 cmである。南東側が低くなっている。断面形は浅皿状や上端の開きが大きいV字状である。8号溝跡・10号溝跡との合流点には、径40×45～50 cm、深さ12～23 cmの掘り込みがある。埋土は黒褐色～暗褐色土で、全体に堅くしまっている。

遺物（第45図、写真図版39）

石器76が断面7A-7A'の埋土上部から出土している。無茎石鏃で、基部は浅いU字状に窪み、側縁は直線状である。



第45図 7号溝跡出土遺物

8号・9号溝跡（第50図、写真図版32）

調査区域南東部に位置し、南西―北東に延びている。検出面はⅢ層である。

8号溝跡は南西端がグリッドDⅣa5で7号溝跡と、また、北東端はグリッドCⅤh8で5号溝跡と合流している。全長は約17.8mで、幅は35～80cm、深さは4～21cmである。北東端が低くなっている。断面形は浅皿状である。埋土は黒褐色土である。

9号溝跡は8号溝跡からグリッドCⅣi6で別れ並行して走り、グリッドCⅣg8で5号溝跡と合流している。全長は約8.5m、幅は25～50cm、深さは2～10cmである。北東側が低くなっている。溝の断面形は浅皿状である。埋土は黒褐色土である。

埋土断面観察から9号溝跡が新しい可能性がある。

10号溝跡（第50図、写真図版33）

調査区域南西部に位置し、北東―南西へ延びている。検出面はⅢ層である。

北東端はグリッドDⅣb6で8号溝跡と合流し、南西端は調査区域外へ延びている。全長は約7mで、幅は50～105cm、深さは10～20cmである。南西側が低くなっている。断面形は浅皿状である。埋土は暗褐色土である。

出土遺物はない。

11号溝跡（第51図、写真図版33）

調査区域南東端に位置し、北西―南東へ延びている。検出面はⅢ層である。

全長は約12.5mで、幅は30～55cm、深さは6～22cmで、両端とも消滅している。全体に南東側が低くなっている。断面形はU字状である。埋土は黒褐色土である。

出土遺物はない。

12号・13号溝跡

遺構（第52図、写真図版33・34）

調査区域北側から北東側にかけて位置し、曲折しながらほぼ東西に延びている。検出面はⅢ層である。

12号溝跡は、途中の攪乱部や調査区域外の部分も含めると全長は約73m、幅は30～90cm、深さは8～48cmである。途中グリッドAⅡi9で1号溝跡を切っている。全体に東側が深く、断面形はU字状である。埋土は黒褐色土や暗褐色土である。

13号溝跡はグリッドAⅠj9で12号溝跡から別れ、西に延び、グリッドAⅠi6で消滅している。全長は約13m、幅は40～70cm、深さは4～11cmであり、全体に西側が深くなって

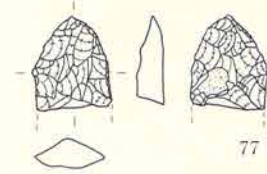
いる。断面形は浅皿状である。埋土は黒褐色土である。

埋土断面観察から 12 号溝跡が新しい可能性がある。

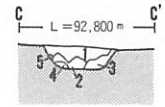
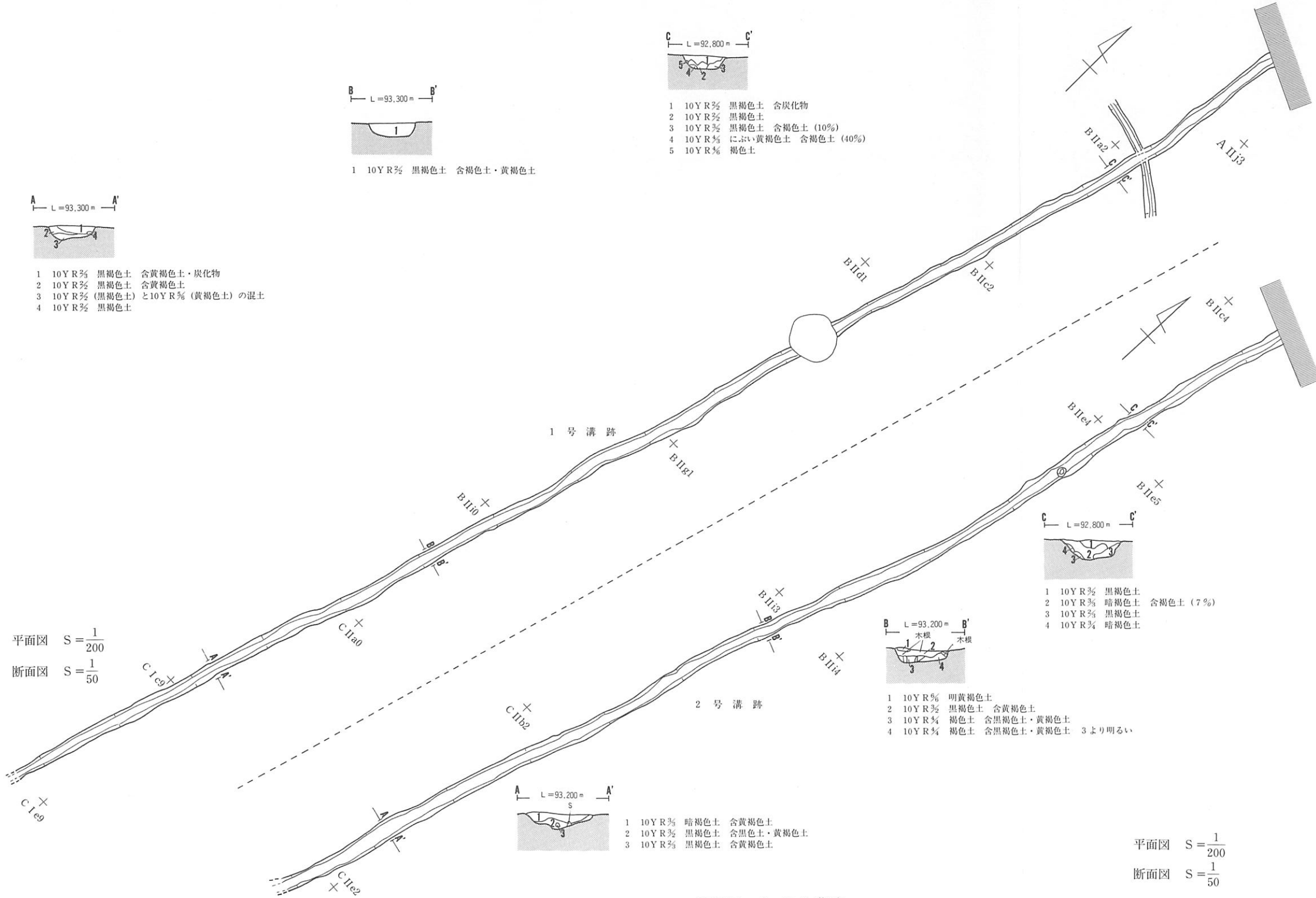
遺物（第 46 図、写真図版 39）

石器 77 が 12 号溝跡の断面 A - A' の埋土中から出土している。

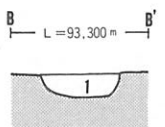
チャート質の尖頭器で、先端部が一部欠損している。横断面形は菱形状の四角形である。



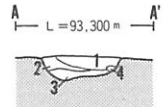
第46図 12号溝跡出土遺物



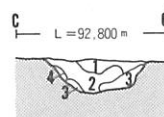
- 1 10Y R^{2/2} 黑褐色土 含炭化物
- 2 10Y R^{2/2} 黑褐色土
- 3 10Y R^{2/2} 黑褐色土 含褐色土 (10%)
- 4 10Y R^{2/2} にぶい黄褐色土 含褐色土 (40%)
- 5 10Y R^{2/2} 褐色土



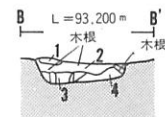
- 1 10Y R^{2/2} 黑褐色土 含褐色土・黄褐色土



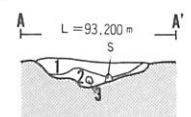
- 1 10Y R^{2/2} 黑褐色土 含黄褐色土・炭化物
- 2 10Y R^{2/2} 黑褐色土 含黄褐色土
- 3 10Y R^{2/2} (黑褐色土) と10Y R^{2/2} (黄褐色土) の混土
- 4 10Y R^{2/2} 黑褐色土



- 1 10Y R^{2/2} 黑褐色土
- 2 10Y R^{2/2} 暗褐色土 含褐色土 (7%)
- 3 10Y R^{2/2} 黑褐色土
- 4 10Y R^{2/2} 暗褐色土



- 1 10Y R^{2/2} 明黄褐色土
- 2 10Y R^{2/2} 黑褐色土 含黄褐色土
- 3 10Y R^{2/2} 褐色土 含黑褐色土・黄褐色土
- 4 10Y R^{2/2} 褐色土 含黑褐色土・黄褐色土 3より明るい

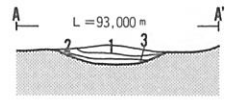
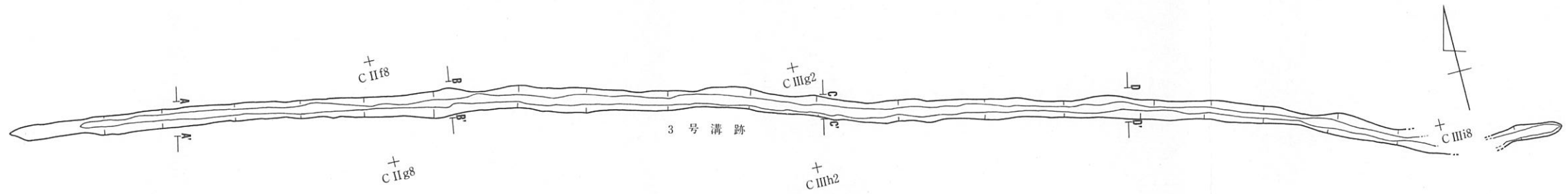


- 1 10Y R^{2/2} 暗褐色土 含黄褐色土
- 2 10Y R^{2/2} 黑褐色土 含黑色土・黄褐色土
- 3 10Y R^{2/2} 黑褐色土 含黄褐色土

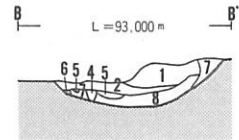
平面図 $S = \frac{1}{200}$
断面図 $S = \frac{1}{50}$

平面図 $S = \frac{1}{200}$
断面図 $S = \frac{1}{50}$

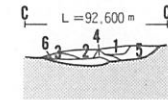
第47図 1・2号溝跡



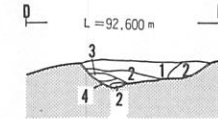
- 1 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土 含炭化物
- 2 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土
- 3 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土



- 1 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土 含炭化物
- 2 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土
- 3 10Y R $\frac{5}{2}$ (黑褐色土) と 10Y R $\frac{5}{2}$ (黄褐色土) の混土
- 4 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土 含炭化物
- 5 7.5Y R $\frac{5}{2}$ 褐色土
- 6 10Y R $\frac{5}{2}$ 黄褐色土
- 7 10Y R $\frac{5}{2}$ (暗褐色土) と 10Y R $\frac{5}{2}$ (黄褐色土) の混土
- 8 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土



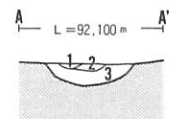
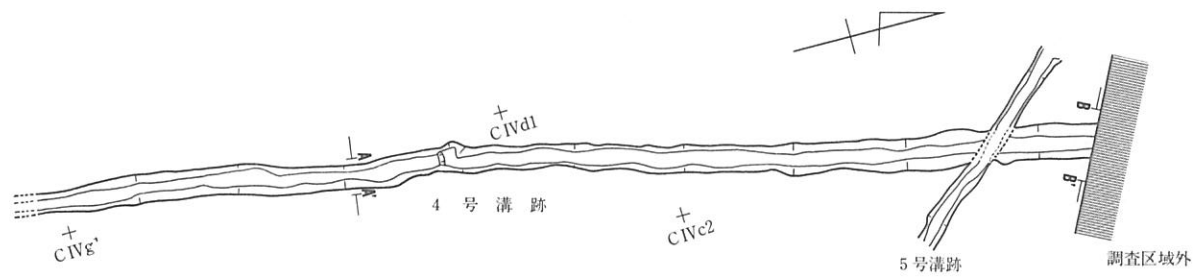
- 1 10Y R $\frac{5}{2}$ 暗褐色土
- 2 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土
- 3 10Y R $\frac{5}{2}$ (暗褐色土) と 10Y R $\frac{5}{2}$ (明黄褐色土) の混土
- 4 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土
- 5 10Y R $\frac{5}{2}$ 黄褐色土
- 6 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土 含黄褐色土



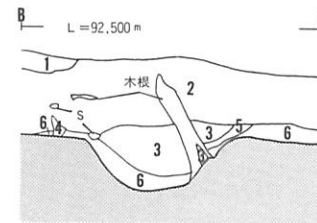
- 1 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土 含黄褐色土 (5%)
- 2 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土 含黄褐色土 (20%)
- 3 10Y R $\frac{5}{2}$ (暗褐色土) と 10Y R $\frac{5}{2}$ (黄褐色土) の混土
- 4 10Y R $\frac{5}{2}$ 明黄褐色土

平面図 $S = \frac{1}{200}$

断面図 $S = \frac{1}{50}$



- 1 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑色土
- 2 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑色土 1よりしまりあり
- 3 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土

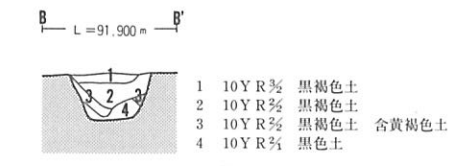
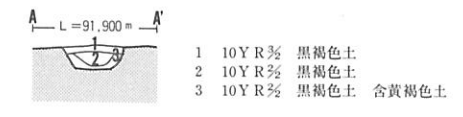
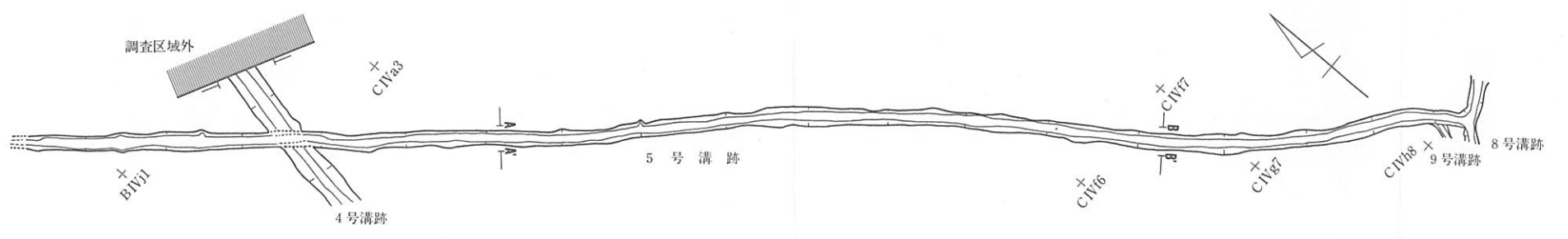


- 1 7.5Y R $\frac{1.5}{2}$ 黑色土
- 2 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑色土
- 3 7.5Y R $\frac{5}{2}$ 黑色土
- 4 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土
- 5 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土
- 6 10Y R $\frac{5}{2}$ 黑褐色土 5より明るい

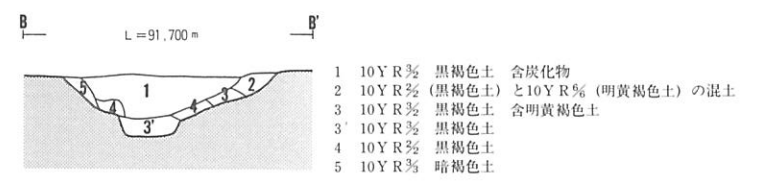
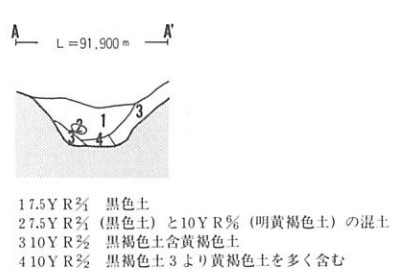
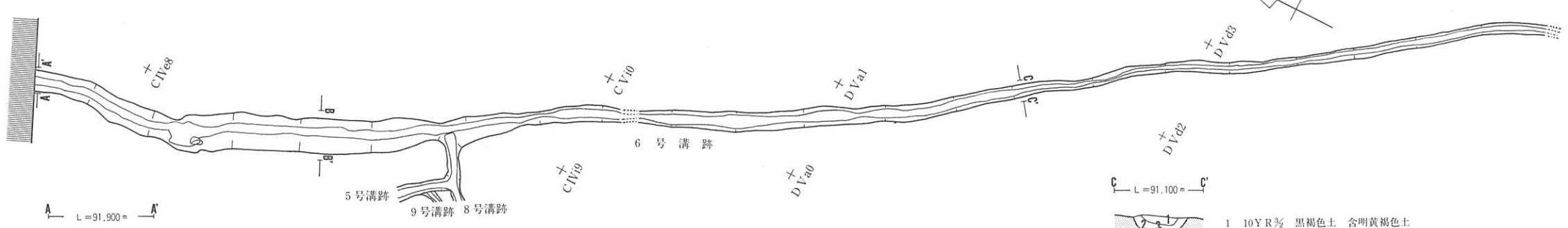
平面図 $S = \frac{1}{200}$

断面図 $S = \frac{1}{50}$

第48図 3・4号溝跡

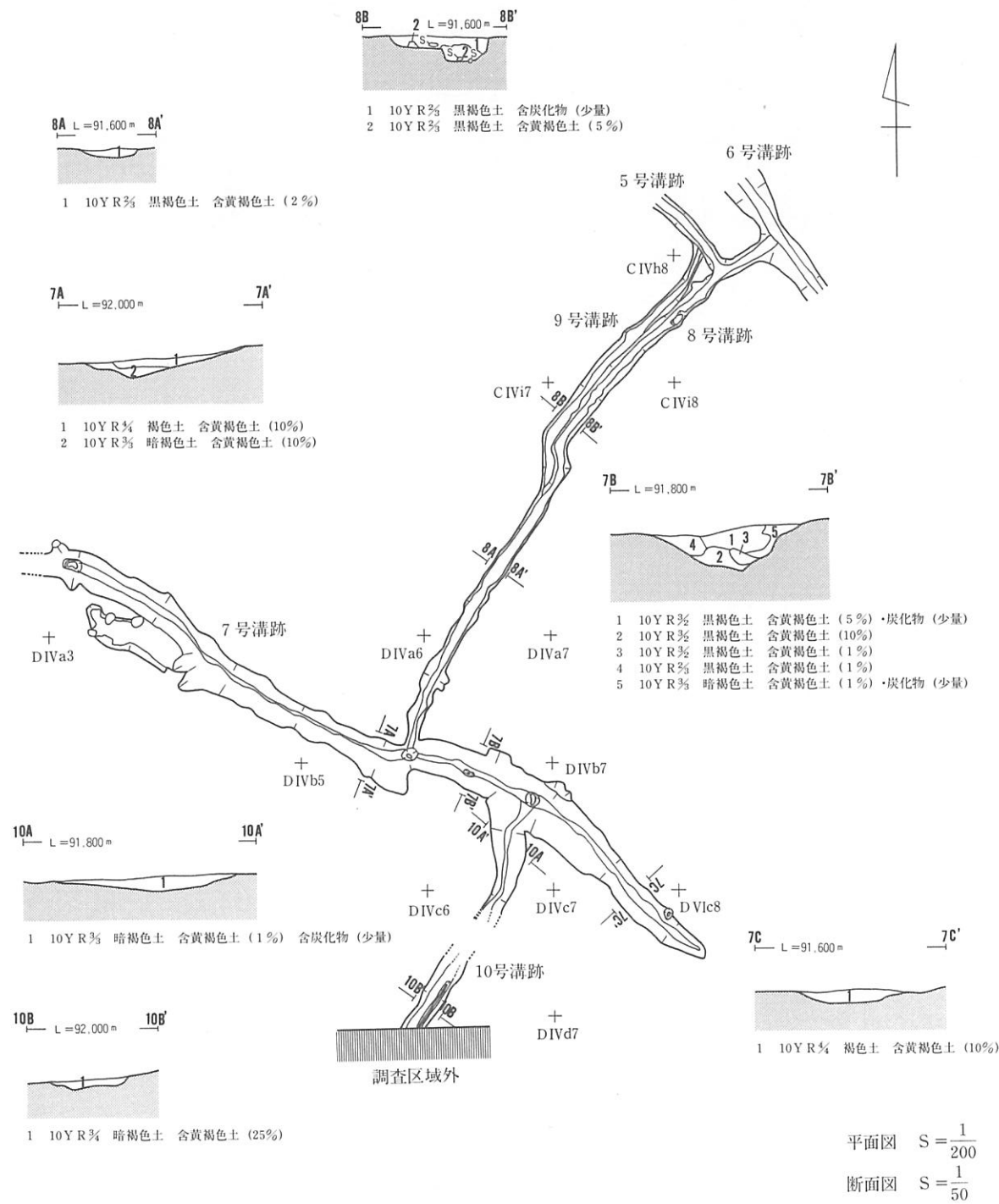


平面図 $S = \frac{1}{200}$
断面図 $S = \frac{1}{50}$

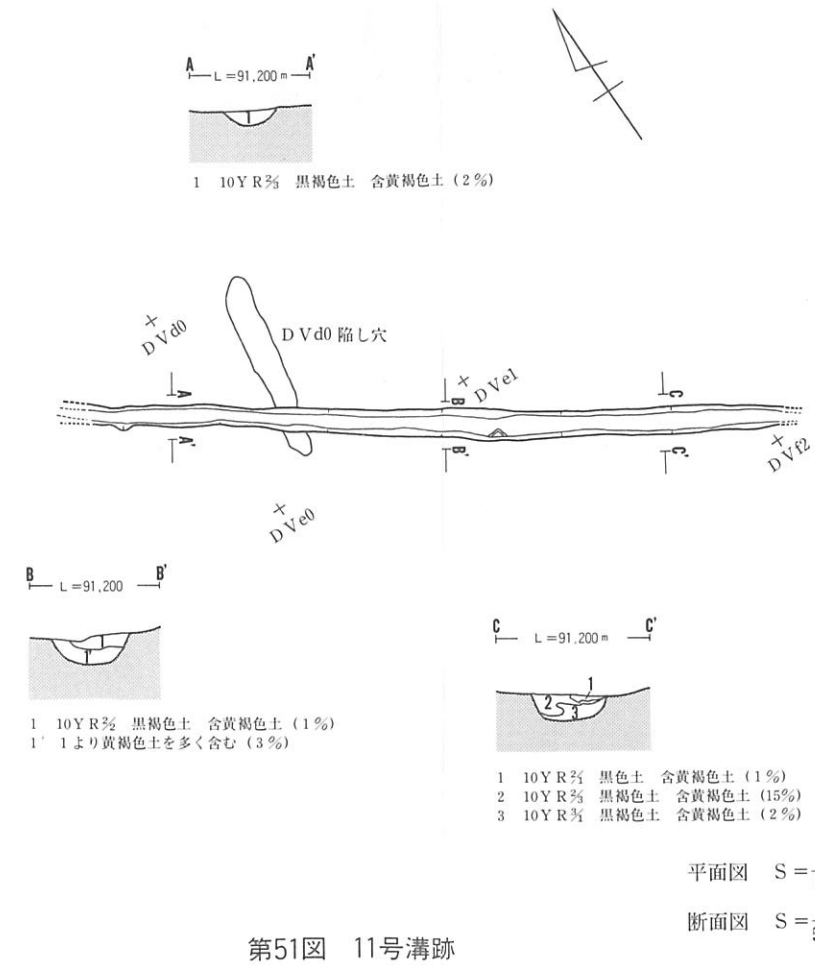


平面図 $S = \frac{1}{200}$
断面図 $S = \frac{1}{50}$

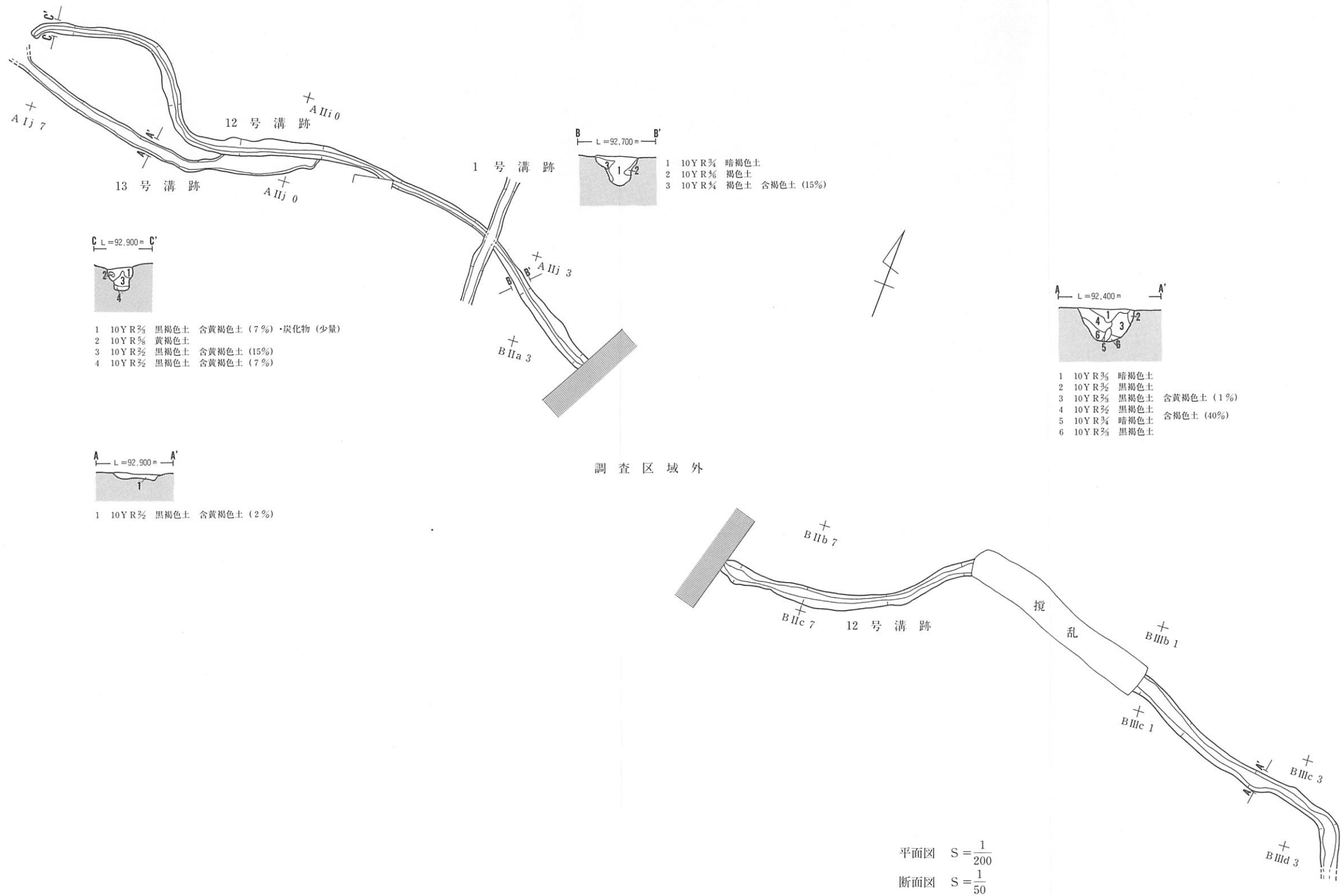
第49図 5・6号溝跡



第50図 7・8・9・10号溝跡



第51図 11号溝跡



B L=92,700 m B'

1 10YR 2/6 暗褐色土
2 10YR 2/6 褐色土
3 10YR 2/6 褐色土 含褐色土 (15%)

C L=92,900 m C'

1 10YR 2/6 黑褐色土 含黄褐色土 (7%) 炭化物 (少量)
2 10YR 2/6 黄褐色土
3 10YR 2/6 黑褐色土 含黄褐色土 (15%)
4 10YR 2/6 黑褐色土 含黄褐色土 (7%)

A L=92,900 m A'

1 10YR 2/6 黑褐色土 含黄褐色土 (2%)

A L=92,400 m A'

1 10YR 2/6 暗褐色土
2 10YR 2/6 黑褐色土
3 10YR 2/6 黑褐色土 含黄褐色土 (1%)
4 10YR 2/6 黑褐色土 含褐色土 (40%)
5 10YR 2/6 暗褐色土
6 10YR 2/6 黑褐色土

第52图 12·13号沟迹

9 遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器である。調査区域中央部から北側にかけての出土が多い。

(1) 土器

縄文時代後期・晩期の土器、弥生時代初頭・終末期の土器、土師器、須恵器が出土しており、特に弥生時代初頭の土器が多い。記載にあたり、縄文時代後期の土器をⅠ群とし、以下晩期の土器をⅡ群、縄文時代の土器で時期不明のものをⅢ群、弥生時代の土器をⅣ群、古代に属するものをⅤ群に分類した。さらに、小分類はa類・b類…とした。

Ⅰ群土器（第53図、写真図版40）

縄文時代後期の土器群である。78は深鉢の体部上半部から口縁部で、口唇部は丸みを持つ。地文はLR単節縄文縦回転である。外面は一部煤けており、胎土には径1～2mmの砂礫が含まれている。79は深鉢の口縁部で、口唇部は丸みを持つ。地文はRL単節縄文横回転で、外面には炭化物が付着している。胎土には金雲母が含まれている。80は深鉢の底部から体部下半部で、底部から大きく外傾しながら立ち上がっている。底部は上げ底である。地文はRL単節縄文で、上位は横回転、下位は斜め回転である。内外面ともに炭化物が付着している。81、82は壺の体部片である。文様帯を沈線で区分し、上位の沈線の上側には列点文が2列に施されている。沈線間には2本の施文具で、起点が広く終点が狭くなる沈線が施されている。地文はRL単節縄文が縦回転で施文されている。82は外面が煤けている。83は深鉢の口縁部で、口唇部は平らに調整されている。地文はLR単節縄文横回転で、平行沈線間は磨消されている。78は後期初頭、81、82は後期前葉、79、80、83は後期末と考えられるが、78は中期末、80は晩期の可能性もある。

Ⅱ群土器（第53～55図、写真図版40～42）

縄文時代晩期の土器群である。型式名にあわせてa～dに細分される。

a類（第53図、写真図版40）

大洞B式に相当する土器群である。

84は深鉢で、底部から軽く内湾しながら立ち上がっている。口縁部は若干内湾し、口唇部は調整されほぼ平らである。地文はLR単節縄文で上位は横回転、下位は斜め回転で施文されている。外面上位と内面下位に炭化物が付着している。85、86は注口土器で、同一個体と思われる。85は同部で無文、86は注口部で三叉文が施されている。87は壺の肩部から頸部で、頸部に沈線が1本巡り、その下にX字状の磨消縄文が施されている。

b類 (第 54 図、写真図版 41)

大洞 C₁ 式に相当する土器群である。

88、89 は鉢型土器の体部上半部から口縁部である。88 は頸部に沈線が 1 本、内面にも口縁に沿って沈線が 1 本それぞれ巡っている。地文は L R 単節縄文横回転である。外面には炭化物が付着している。89 は沈線が 4 本巡り、最上位の沈線には刺突が加えられている。また、内面にも口縁に沿って沈線が 1 本巡っている。

c類 (第 54 図、写真図版 41)

大洞 C₂ 式に相当する土器群である。

90、91 は深鉢の口縁部で、幅広い頸部に平行沈線がそれぞれ 4 本ずつ巡っている。90 は口唇部に小さな刻みが施され、外面には炭化物が付着している。91 は口縁部に小突起が付いている。92 は深鉢の体部上半部から口縁部である。幅広い頸部に 4 本の沈線が巡り、口唇部には小さな刻みが施されている。地文は L R 単節縄文が頸部付近は横回転、体部は斜め回転で施文されている。外面には炭化物が付着している。90 と同一個体と思われる。93 は浅鉢の体部片で、地文は R L 単節縄文横回転で、2 本の平行沈線の上下は磨消されている。94 は台付き鉢の台部で、ハの字状に開き、内面はよく磨かれている。台部下端は内外面とも一部煤けている。95、96 は壺の頸部から口縁部である。95 は口縁部上端を欠く。頸部に沈線が 1 本巡り、口縁部は無文で、内傾した後外反しながら立ち上がっている。内外面ともよく磨かれ、胎土には金雲母が含まれている。96 は外傾する口縁部で、口唇部が隆帯状に突出し、その上下に沈線が巡っている。口縁部内側にも沈線が 1 本巡っている。97、98 は壺の肩部で、同一個体と思われる。沈線が 5 本巡り、1 本目と 2 本目、4 本目と 5 本目の沈線間には連続する刻み目が施されている。

d類 (第 54・55 図、写真図版 41・42)

大洞 A' 式に相当する土器群である。

99 は深鉢である。底部から外傾して立ち上がり、体部上半部で最大径を持つ。その後軽く内湾しながら頸部へ続き、頸部から口縁部にかけてほぼ垂直気味に立ち上がっている。内面には輪積痕が残る。地文は L R 単節縄文で、上位は横回転、下位は斜め回転で施文されている。内外面とも上半部から口縁部にかけて炭化物が付着している。100、101 は深鉢の体部上半部から口縁部である。100 は頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外傾している。地文は L R 単節縄文横回転である。胎土には径 1～3 mm の砂礫が含まれ、内面には炭化物が付着している。101 は小波状口縁で、地文は L R 単節縄文横回転である。外面には炭化物が付着し、胎土には径 1～2 mm の砂礫が含まれている。102 は浅鉢である。底部から大きく外傾しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に内湾している。口縁部は短く、ほぼ垂直気味に立ち上がり、頸部には内外面ともほぼ同じ位置に沈線が 1 本ずつ巡っている。地文は L R 単節縄文横回転である。胎土には径 1

～3mmの砂礫が含まれている。103は鉢型土器である。底部から直線的に立ち上がり、体部上半部から垂直気味に立ち上がっている。口縁部には3本の沈線が巡り、中央の沈線には長さ7mmの袢りが6カ所ある。内面には口縁に沿って沈線が1本巡っている。地文はLR単節縄文で、上位は横回転、下位は斜め回転で施文されている。内外面ともに炭化物が付着している。104は小型の鉢型土器である。内外面とも口縁に沿って沈線が1本ずつ巡っている。外面は調整されているが、内面は輪積痕が残っている。105は深鉢の口縁部である。内面は口唇部近くに段をもち、それより上は薄くなっている。口唇部には指頭状の圧痕がみられる。地文はLR単節縄文横回転で、外面には炭化物が付着している。106～108は鉢型土器の口縁部で変形工字文が施されている。106の口唇部には頂部に刻みを有する小突起が付き、内面には口縁に沿って沈線が1本巡っている。107の内面にも口縁に沿って沈線が1本巡っている。109～111は鉢または浅鉢の体部片で、2個一対の貼り瘤を持つ変形工字文が施されている。111は胎土に金雲母が含まれている。112は台付浅鉢の台である。「ハ」の字状に開き、下端には平行沈線が2本巡っている。

Ⅲ群土器（第55・56図、写真図版42・43）

縄文土器であるが、時期が不明であるものを一括した。

113～121は深鉢の底部である。113は底部から垂直気味に立ち上がっている。地文はRL単節縄文縦回転で、胎土に径1～3mmの砂礫が含まれている。114は軽く内湾気味に立ち上がっている。地文はLR単節縄文縦回転である。115は地文はLR単節縄文が縦回転と横回転で施文されている。内面には炭化物が付着し、底部外面は調整痕が残っている。116は胎土に径1～3mmの砂礫が多く含まれている。117～119は地文は不明であり、117は底部から垂直気味に立ち上がった後、外傾している。120は底面に木葉痕が、また、121にも同様に網代痕が残っている。122～128は鉢型土器の底部である。122、123は軽く内湾気味に立ち上がるものと思われる。124は外面に炭化物が付着しており、125は底面が調整され平らである。126は外面にケズリ、内面にナデの調整が施されており、底面には網代痕が残っている。127の底部はやや丸底風である。128は垂直気味に立ち上がり、その後外傾している。地文は122はLR単節縄文斜め回転、123、124、125はLR単節縄文横回転である。

Ⅳ群土器（第56～59図、写真図版43～46）

弥生時代の土器群である。時期別に2分される。

a類（第56～59図、写真図版43～45）

弥生時代初頭のもので、砂沢式に並行する土器群である。

129 は壺の口縁部で、頂部が窪む山形突起と頂部に刻みを有する小突起をもっている。口唇部の突起間には沈線が施され、内面にも口縁に沿って平行沈線が2本巡っている。胎土には金雲母が含まれている。130 は壺の肩部で変形工字文が施されている。131 は甕の底部から体部下半部で、底部から外傾しながら立ち上がっている。地文はLR単節縄文斜め回転で、内外面とも炭化物が付着している。

132 は甕の底部から体部上半部で、底部から外傾しながら立ち上がり、その後垂直気味に立ち上がっている。地文はLR単節縄文が横回転と斜め回転で施文されている。内面には炭化物が付着し、胎土には径1～3mmの砂礫が含まれている。

133～136 は甕の口縁部で、頸部に沈線が施されないものである。133 は僅かに外傾し、口唇部は外方へ挽き出されている。地文はLR単節縄文横回転で、内外面とも煤けている。134 は外反し、外面には炭化物が付着している。135 は口縁部上端が僅かに外方へ折れている。地文はLR単節縄文横回転で口縁部にも施文されている。外面には炭化物が付着し、胎土には径1～3mmの砂礫が含まれている。136 は僅かに外傾し、口唇部は平らに調整されている。地文はRL単節縄文斜め回転で、外面には炭化物が付着している。

137～141 は甕の口縁部で、頸部に沈線が施されているものである。137 は僅かに外傾し、上端ほど薄くなっている。内面には沈線が1本巡っている。地文はLR単節縄文横回転で、内外面とも炭化物が付着している。138 は頸部から大きく外傾し、口唇部には指頭状の圧痕がある。頸部には沈線が1本巡っている。地文はLR単節縄文斜め回転と思われる。外面には炭化物が付着し、胎土には径1～3mmの砂礫が多く含まれている。139 は外傾し、口唇部は丸く調整され、頂部に刻みを有する小突起をもっている。頸部には沈線が1本巡り、更に、その上側に細い沈線が1本施されている。地文はLR単節縄文横回転である。140 は僅かに外反し、波状口縁で、谷部は窪んでいる。頸部には1本の沈線が巡っている。地文はRL単節縄文横回転で、外面は一部煤けている。胎土には径1～3mmの砂礫が含まれている。141 は外反し、口唇部には刻みが施され、頸部には沈線が1本巡っている。胎土には径1～2mmの砂礫が多く含まれている。

142 は甕の口縁部で、体部と頸部の境に段を持っている。地文はLR単節縄文横回転で、胎土に径1～3mmの砂礫が含まれている。

143～146 は甕の口縁部で、口唇部に指頭状の圧痕を有し、小波状をなすものである。143 は外傾し、地文はLR単節縄文横回転である。144 は外反し、地文はLR単節縄文横回転で、外面口縁部上端に炭化物が付着している。145 はほぼ直立する口縁で、沈線が1本巡り、それより上方は薄くなっている。外面には炭化物が付着している。146 は外反し、地文はLR単節縄文横回転で、口縁部上端に炭化物が付着している。

147～150 は甕の口縁部で、突起を有するものである。147 はほぼ直立する口縁で、突起は上

方ほど肥厚し、頂部は平らである。口唇部には縄文原体（LR単節縄文）が回転施文されている。胎土に径1～3mmの砂礫が含まれている。148は体部と頸部の境に段を持っている。突起は上方ほど肥厚する山形突起で、頂部は平らである。内面には沈線が1本巡っている。149は僅かに外傾している。突起は山形状で上方ほど肥厚し、頂部は窪んでいる。沈線が2本巡っているが、うち1本は口縁に沿って巡り、突起の下でとぎれている。内面にも平行沈線が2本巡っている。突起の両側の口唇部には沈線が施されている。胎土には金雲母が含まれている。150は頂部に刻みを有する山形突起を持ち、内面には沈線が1本巡っている。胎土には金雲母が含まれている。

151～158は鉢の口縁部である。151、152は外傾する短い口縁を持ち、頸部に沈線が巡り、内面にも口縁に沿って沈線が1本ずつ巡っている。地文はともにLR単節縄文横回転である。153は内面に2本の沈線が巡っている。154は口縁に沿って外面に2本、内面に1本の沈線が巡っている。155、156は山形の突起を持つものである。155は2個一対の貼瘤をもつ変形工字文が施されている。突起は頂部に刻みを有する山形状で、突起の両側の口唇部には沈線が巡っている。内面にも山形の口縁に沿って頂部の刻みへ続く沈線が1本巡っている。156は突起の頂部が窪み、突起の両側の口唇部には沈線が施されている。外面には平行沈線が2本巡り、その上側には山形の口縁に沿って、沈線が3本巡り、突起の下でとぎれている。内面にも沈線が1本巡っている。157、158は山形口縁をなすものと思われ、口唇部に沈線が施されている。外面には沈線が157には4本、158には3本それぞれ巡っている。また、両者とも内面に沈線が2本巡り、そのうち1本は口縁に沿って巡っている。

159は鉢の体部から頸部で、頸部に沈線が1本巡り、その沈線から左斜め下に2本の平行沈線が施されている。地文は原体不明である。内面には炭化物が付着している。

160、161は鉢の底部である。160は外面が煤け、胎土に金雲母が含まれている。161は底部が丸底風で沈線が施され、内面は丁寧に磨かれている。

162、163は台付鉢の台部で、163は沈線が1本巡り、胎土には金雲母が含まれている。

164～170は浅鉢または鉢の口縁部で、内面には口縁に沿って沈線が1本巡っている。また、166～170には変形工字文が施されている。

171～174は高坏の口縁部および体部である。171は頂部に刻みを有する山形突起を持ち、突起の両側の口唇部には沈線が施されている。また、2個一対の貼瘤を持つ変形工字文が施され、内面にも沈線が2本巡っている。そのうち1本は山形状の口縁に沿って巡り、突起の刻みへと続いている。172は口唇部が丸く調整されている。173は変形工字文が施され、内面には口縁に沿って沈線が1本巡っている。174は沈線が巡り、変形工字文の一部をなすものと思われる。

175は高坏の脚部である。平行沈線が下端に3本、それより上に2本、施文具を斜め下方から

当てて施文されている。胎土には金雲母が含まれている。176 は蓋の把手部と思われる。

b類 (第 59 図、写真図版 45・46)

弥生時代終末期のもので、赤穴式に並行する土器群である。

177 は壺の底部から体部下半部である。底部からやや垂直気味に立ち上がった後、大きく開いている。R L 単節の縄文原体を用い縞縄文が体部と底部の一部に施されている。外面は煤けている。178 は壺の肩部である。2 本の沈線が巡り、上位の沈線の上側には列点文が施され、更に、R L 単節の縄文原体で縞縄文が施されている。下位の沈線の下側には R L 単節縄文が横回転で施文され、下端には同原体が縞縄文風に施文されている。

179～188 は甕の口縁部である。179～181 は折り返し口縁で、2 本の沈線が平行 (179)、途中で交わり「コ」の字状 (181)、山形状 (181) にそれぞれ施されている。179 の口唇部は平らに調整されている。182～186 は肥厚する口縁である。182 は口縁に沿って縄文原体が 2 列に圧痕され、下位の圧痕は途中から 2 個一対の刺突列に変わっている。体部には R L 単節の縄文原体が縞縄文風に施されている。183 は口縁に沿って平行沈線が 2 本巡り、燃糸文が斜位に施されている。184 は 2 本の沈線が山形状に巡っている。185 は口縁部に R L 単節縄文が横回転で施文され、肥厚部に刺突が施されている。186 は肥厚部に R L 単節縄文が横回転で、下には縦回転で施文されている。182、183、184 の口唇部には R L 単節縄文が回転施文されている。187 は沈線が 3 本巡り、口唇部には縄文 (原体不明) が回転施文されている。188 にも口唇部に縄文 (原体不明) が回転施文されている。

189～194 は甕の体部片である。189 は上端に沈線が 1 本巡り、その下に山形の弧を描くように 2 本の沈線が巡っている。地文は R L 単節縄文斜め回転である。190 は沈線が 3 本巡り、その下に L R 単節縄文が横回転で施文されている。191、192 は R L 単節の縄文原体で縞縄文が施されている。193 は上端に 2 本の平行沈線が巡り、その下に燃糸文が斜位に施されている。194 は 2 本の平行沈線の上に弧状の沈線が 1 本施されている。

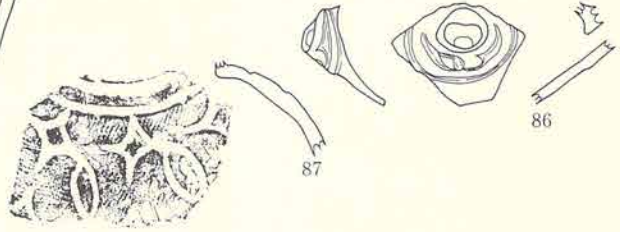
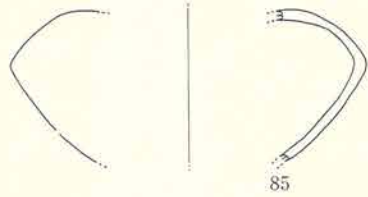
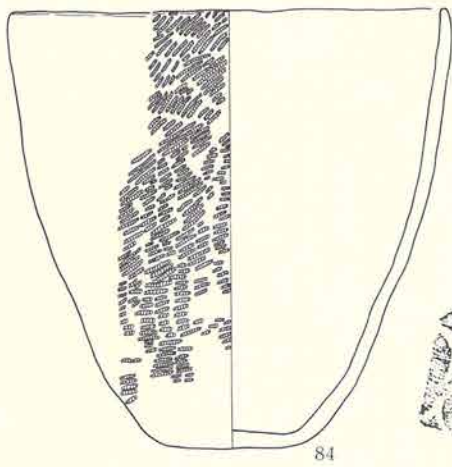
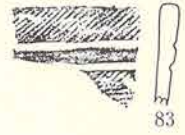
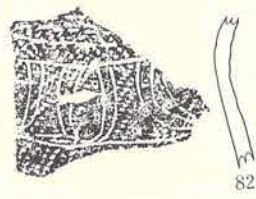
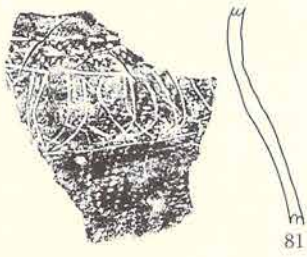
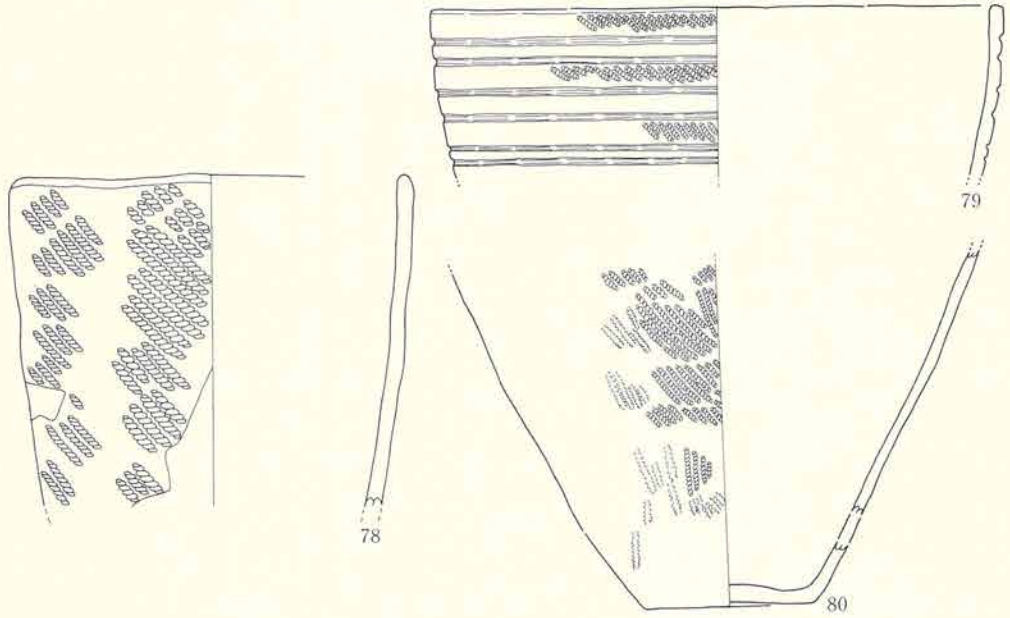
195、196 は甕の底部である。195 はほぼ垂直気味に立ち上がった後外傾し、燃糸文が縦位に施文されている。196 は底部が僅かに外方へ張り出している。どちらにも底面に燃糸文が施文されている。

V 群土器 (第 60 図、写真図版 46)

古代に属する土器群である。

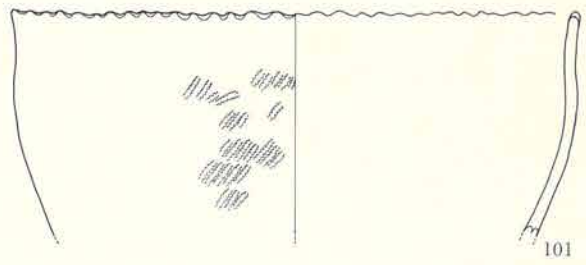
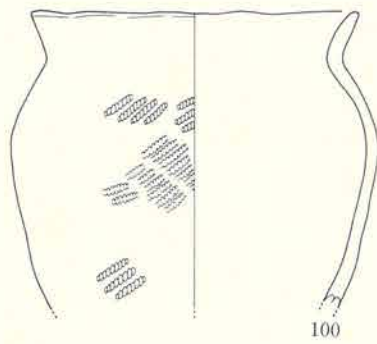
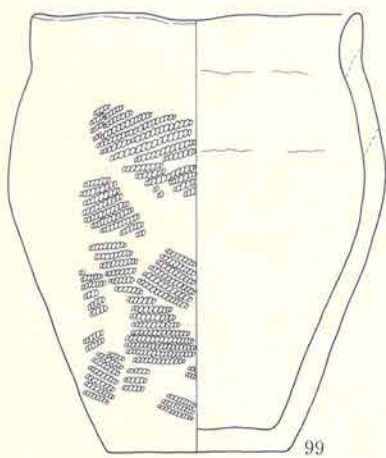
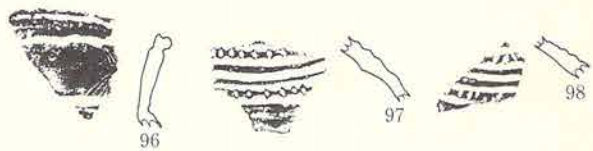
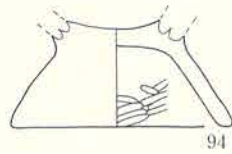
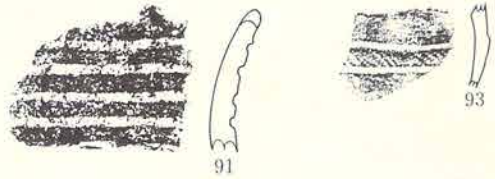
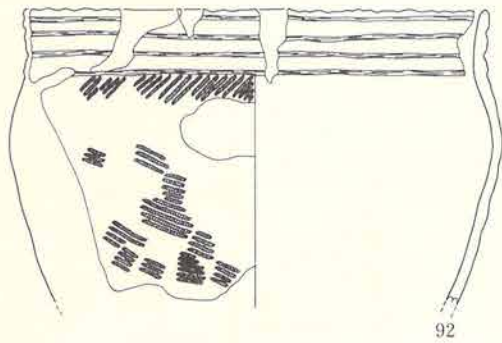
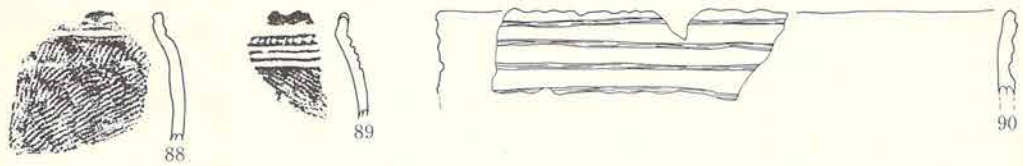
197 は土師器の高台付き杯の高台部で、「ハ」の字状に開いている。198 は須恵器の高台付き杯の高台部である。高台は高さが 5 mm で「ハ」の字状に開いている。ロクロ使用であるが、底部切り離し技法は不明である。199、200 はロクロ使用の須恵器杯の口縁部である。200 は口縁

部上端が外方へ折れている。201 はロクロ使用の須恵器の鉢である。調整痕はない。底部切り離し技法は回転糸切りである。202 はロクロ使用の長頸壺の肩部である。回転ヘラケズリが施されている。



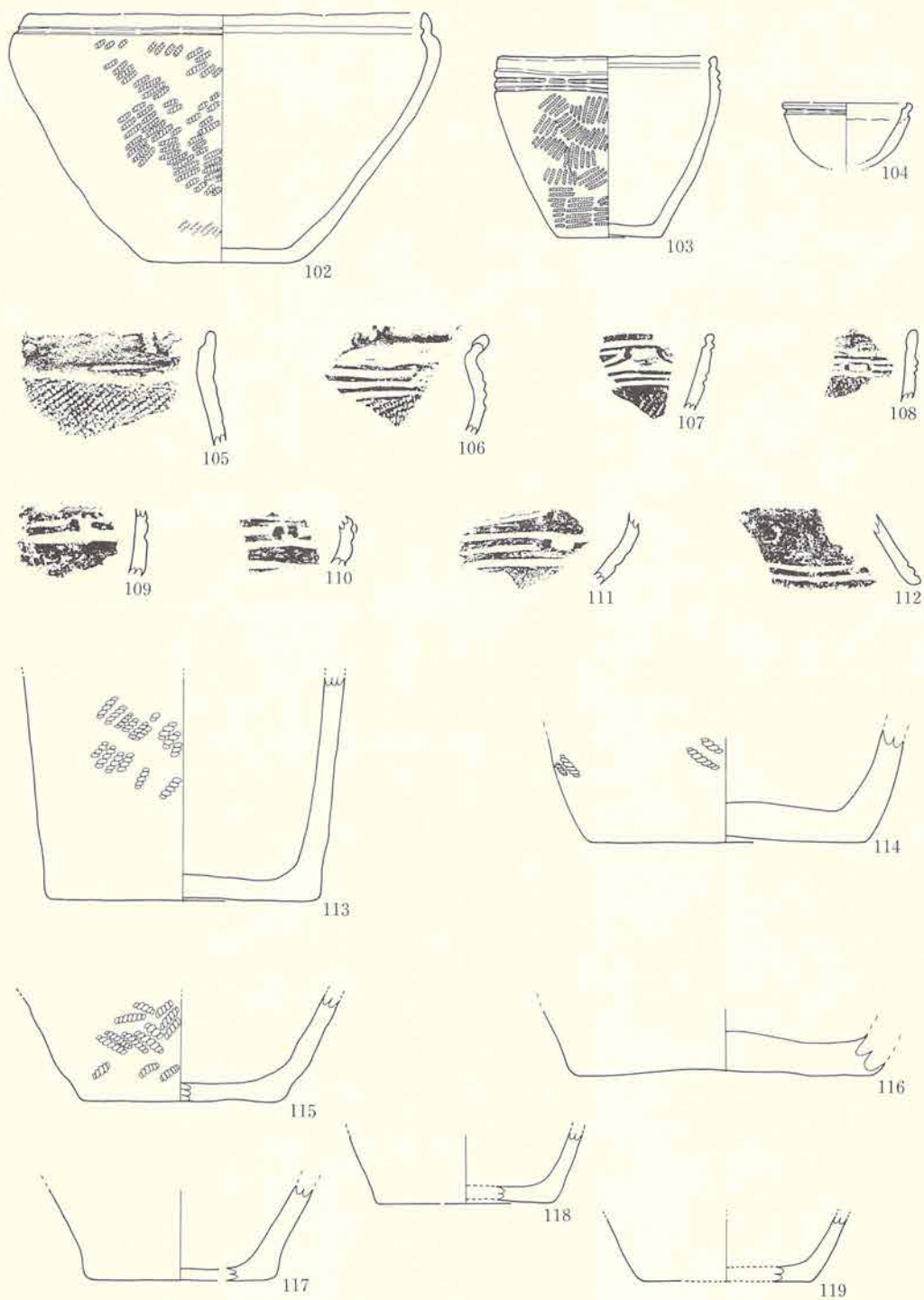
78-80.84 S = 1/4

第53図 遺構外出土遺物(1)

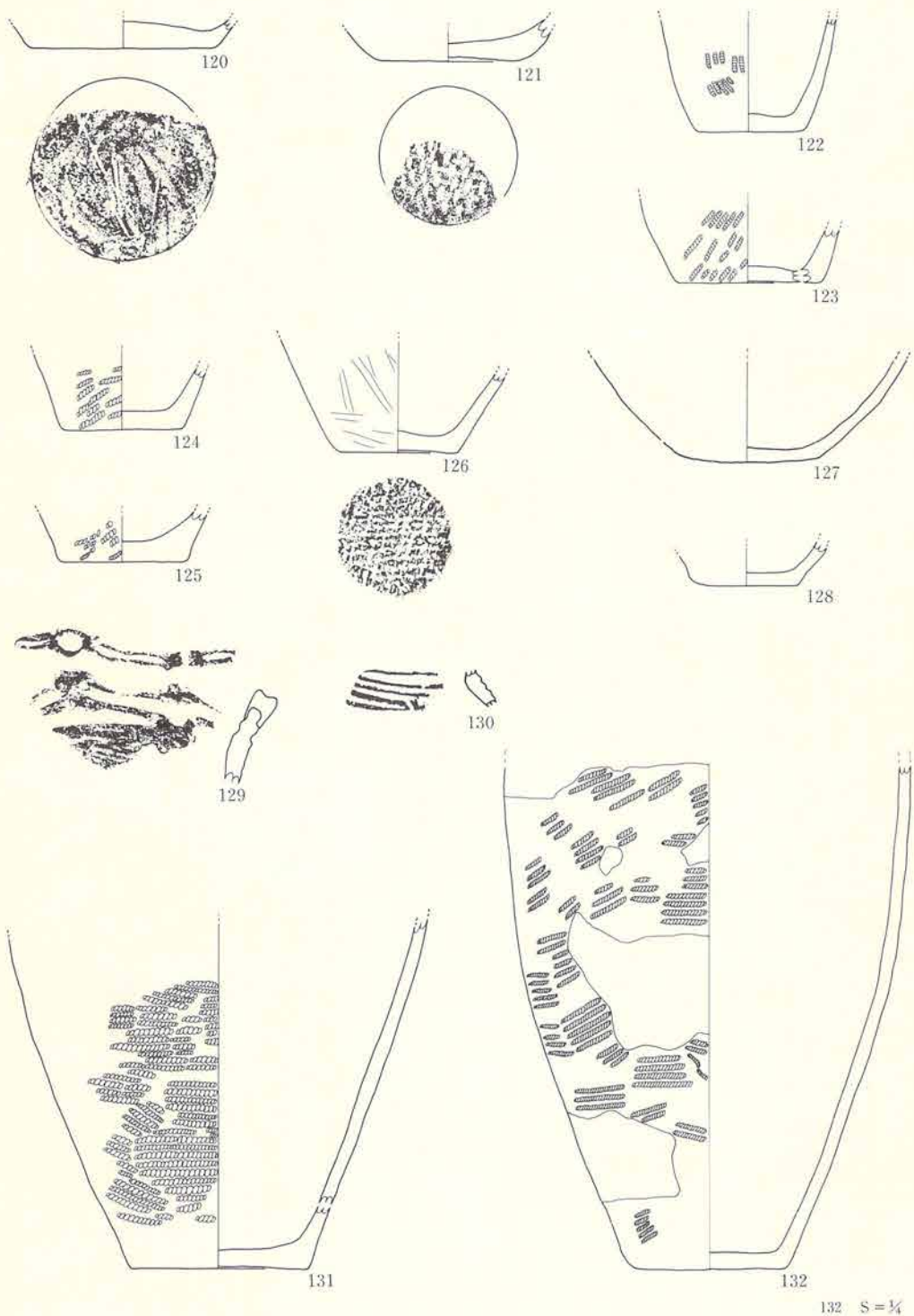


90, 92, 101 S = 1/4

第54图 遺構外出土遺物(2)

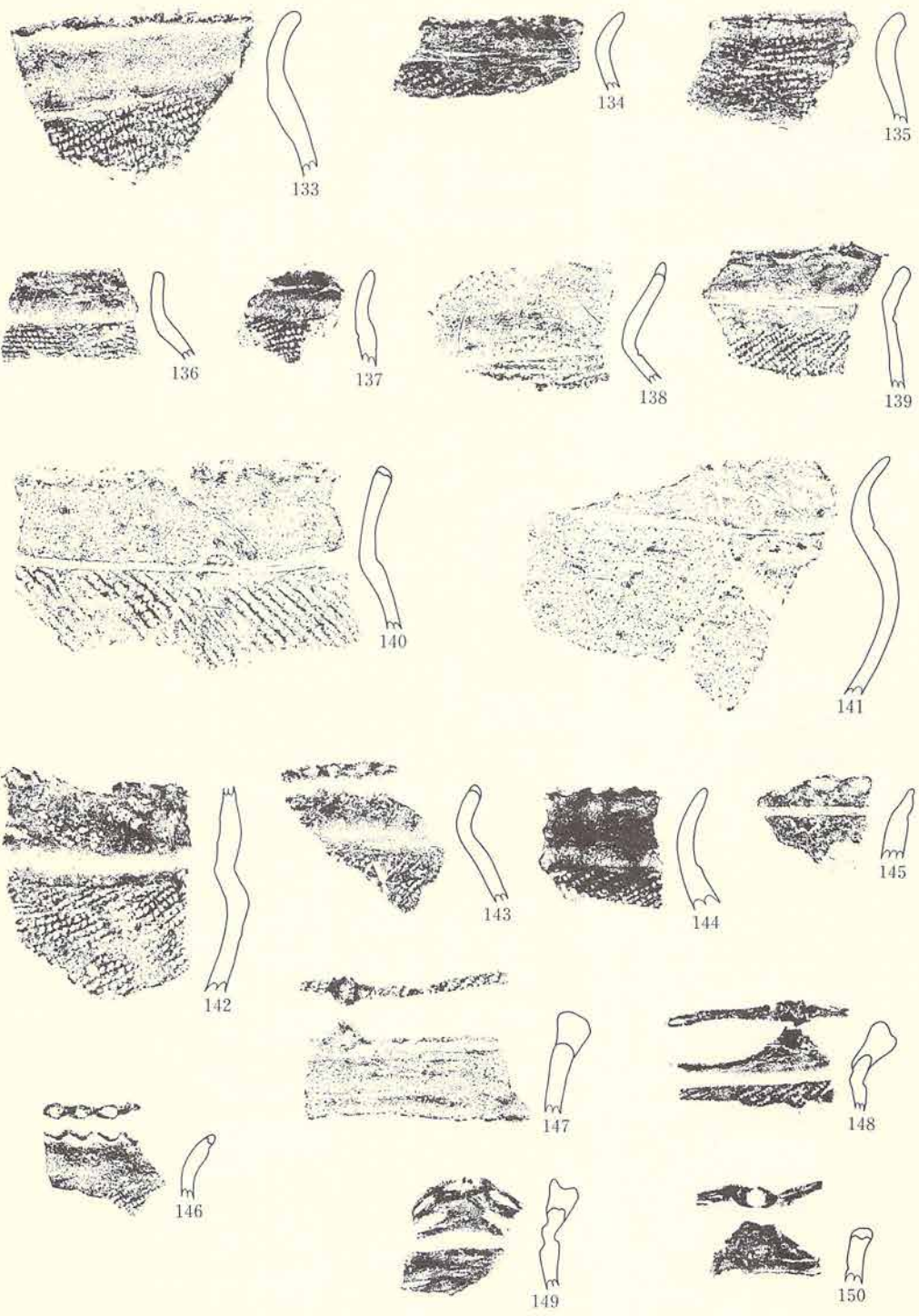


第55図 遺構外出土遺物(3)

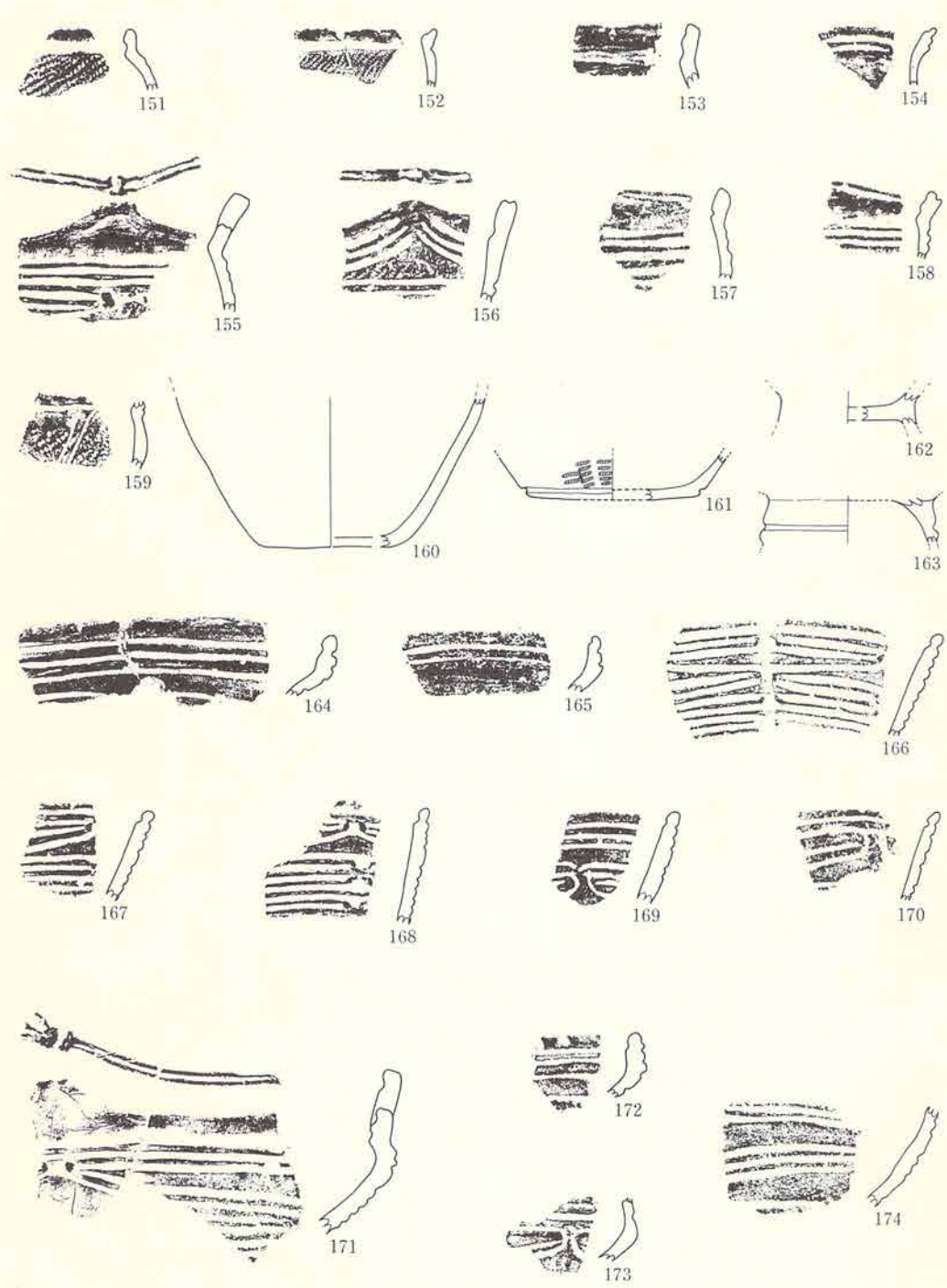


第56図 遺構外出土遺物(4)

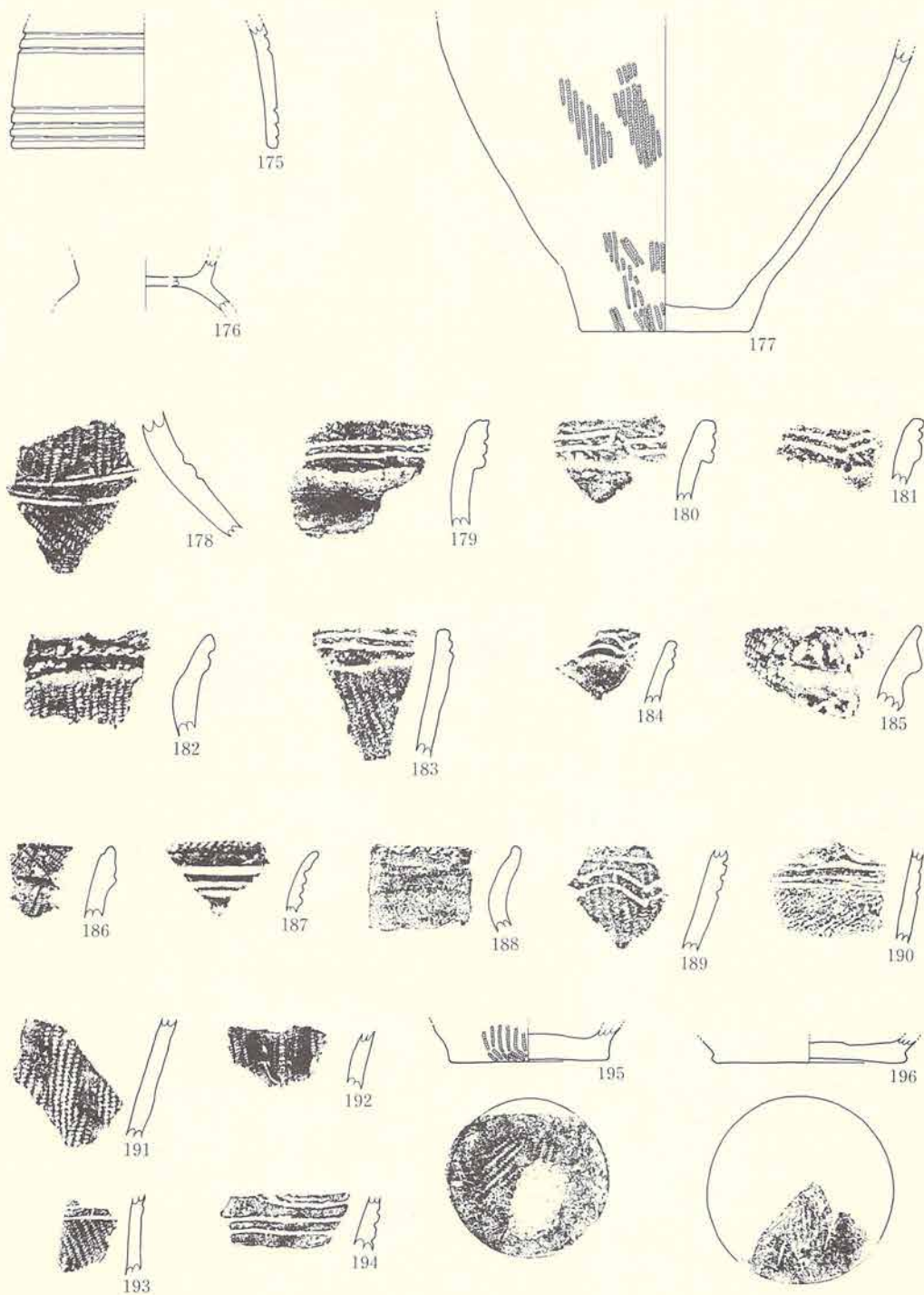
132 S = ¼



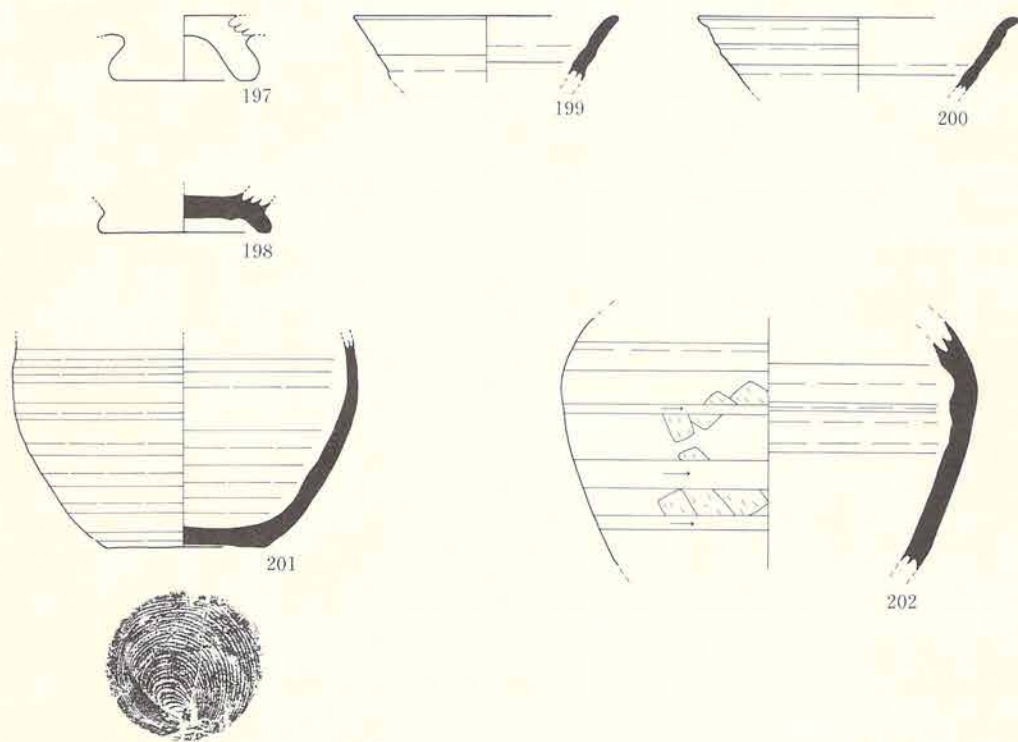
第57图 遺構外出土遺物(5)



第58圖 遺構外出土遺物(6)



第59図 遺構外出土遺物(7)



第60図 遺構外出土遺物(8)

(2) 石器

石器は石鏃、石槍、石匙、搔・削器類、石篋、石鎌、不定形石器、磨製石斧、磨石、凹石、用途不明の石製品である。

石鏃（第 61 図、写真図版 47）

203 の 1 点である。無茎で、基部は U 字状に窪み、側縁は緩い弧状をなす。横断面形は菱形である。

石槍（第 61 図、写真図版 47）

204 の 1 点である。先端部は尖り、両側縁は表裏両面から調整され、刃部が形成されている。横断面形は歪な菱形である。

石匙（第 61 図、写真図版 47）

205 の 1 点である。横型石匙で、片面調整により、凸状の刃部が形成されている。

搔・削器類（第 61 図、写真図版 47）

不定形な剥片の縁辺に調整が施され、刃部が形成されているものである。206～210 の 5 点が出土している。206、207 は台形状の剥片の両側縁、208 は平面形が貝殻状をなす剥片の直線状の側縁、209 は緩い弧状をなす 2 側縁、210 は先端部が尖り弧状をなす側縁に、それぞれ表裏両面からの調整によって刃部が形成されている。

石篋（第 61・62 図、写真図版 47）

211～215 の 5 点が出土している。211 は上端部を除く周辺が表裏両面から調整されている。212 は 1 側縁に片面から、213、214 は両側縁に片面からの調整で形を整えている。215 は両側縁と下端が両面から調整されている。

石鎌（第 62 図、写真図版 47・48）

216、217 の 2 点が出土している。216 は自然面が残っている。どちらも把手部が調整されている。

不定形石器（第 63 図、写真図版 48）

不定形な剥片の一部に調整が施され、刃部が形成されているものである。218～221 の 4 点

が出土しており、いずれも片面からの調整である。

磨製石斧（第63図、写真図版48）

222の1点である。全面よく研磨され、刃部は両凸刃で円刃である。

磨石（第63図、写真図版48）

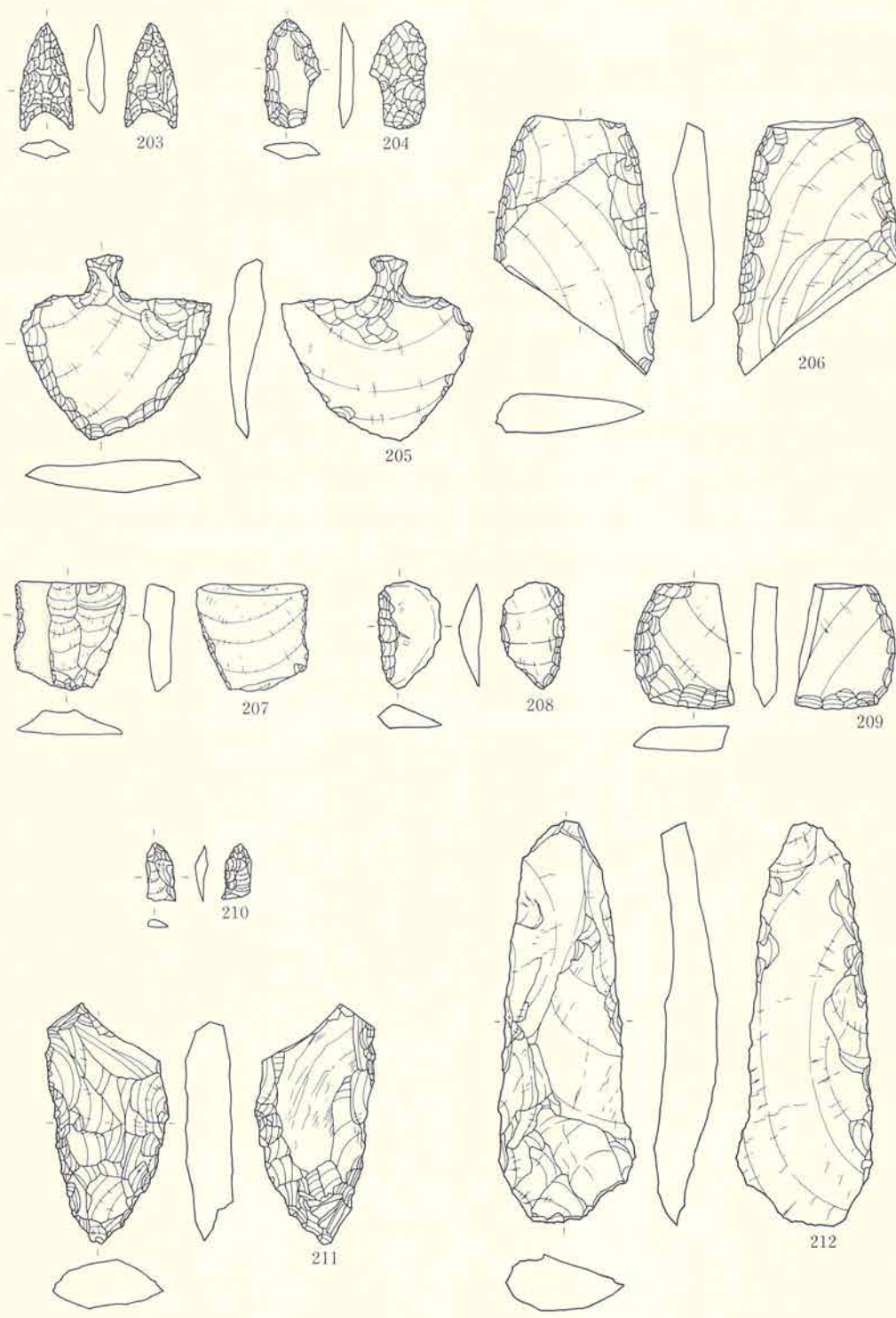
223、224の2点が出土している。223は片面、224は両面に磨痕がある。また、224は片面が凹んでいることから凹石との併用が考えられる。

凹石（第63・64図、写真図版48～50）

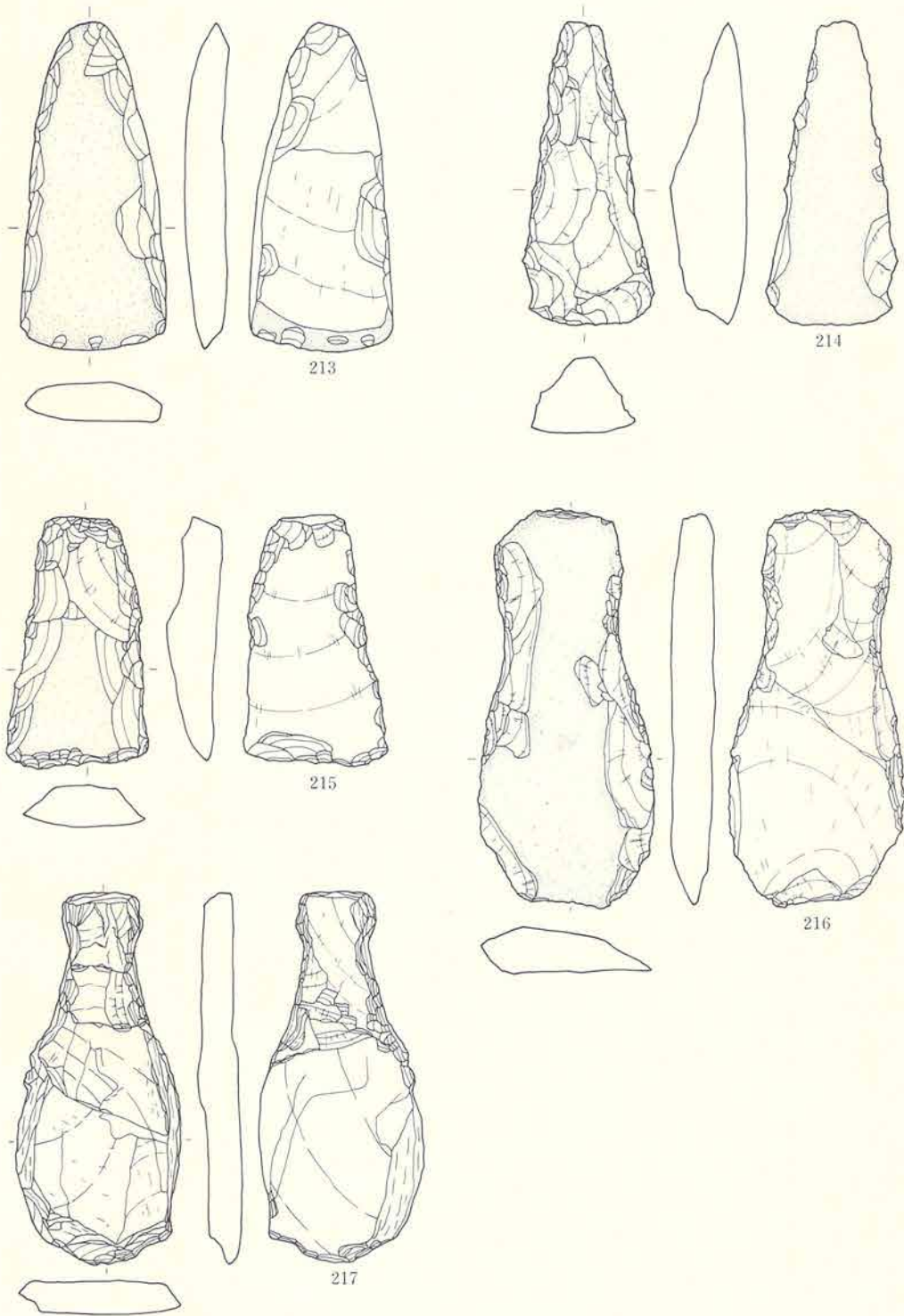
225～232の8点が出土している。226～230は偏平な円礫を用いている。226は片面に、227～230は両面に窪みを有し、229は片面に、230は両面に2個の窪みを有している。231は平面形が菱形状で、両面に1個ずつの窪みを有している。232は平面形が隅丸長方形で、片面が欠失しており、窪みを1個有している。

石製品（第64図、写真図版50）

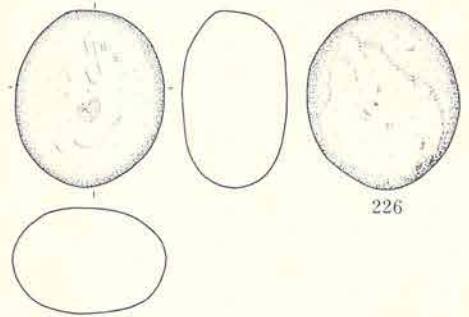
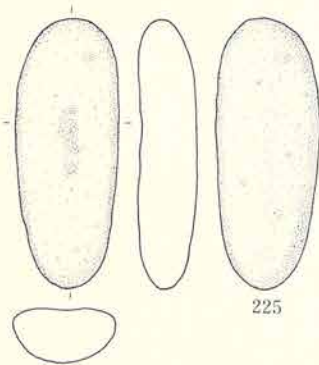
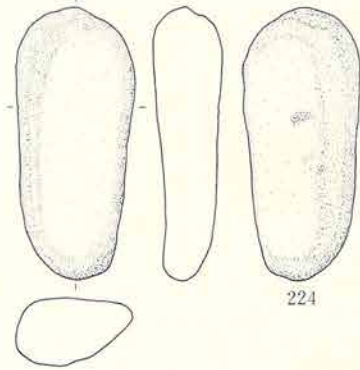
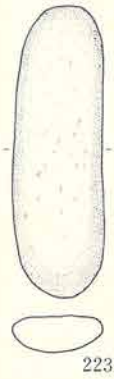
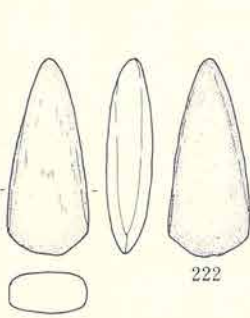
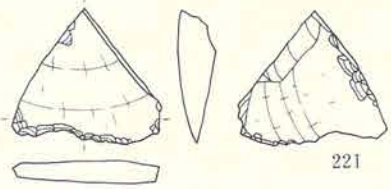
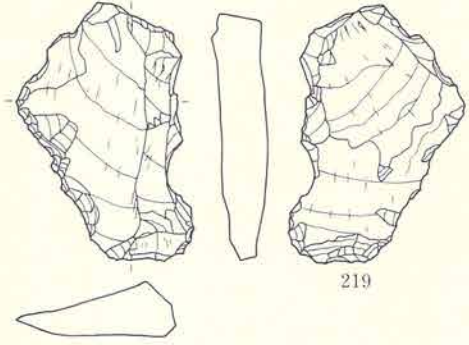
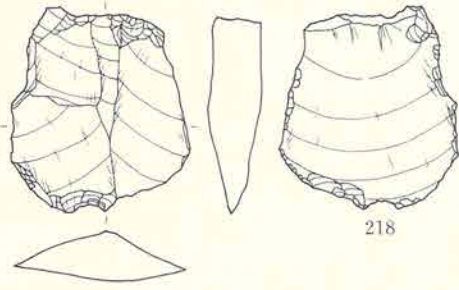
233は用途不明の石製品である。棒状で、横断面形は楕円形、表裏両面とも表面が部分的に剝落している。



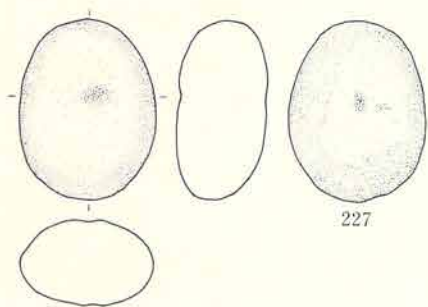
第61図 遺構外出土遺物(9)



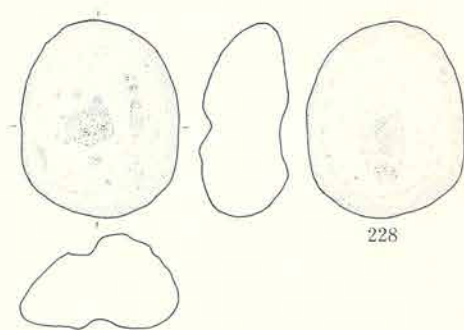
第62図 遺構外出土遺物(10)



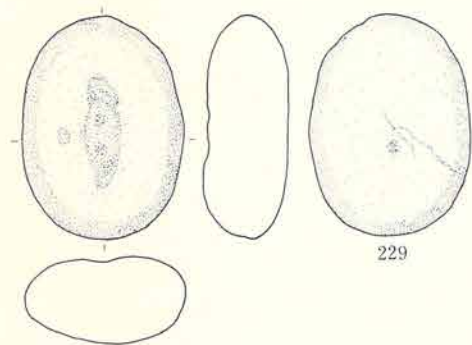
第63圖 遺構外出土遺物(II)



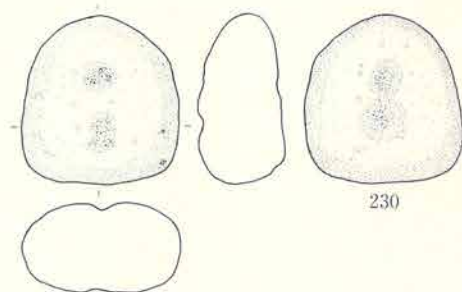
227



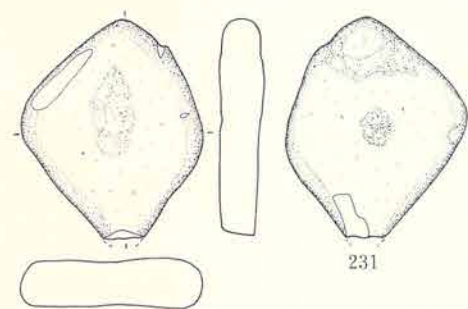
228



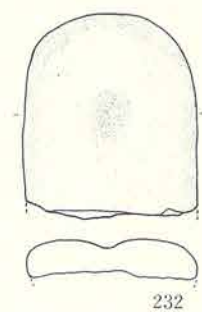
229



230



231



232



233

第64図 遺構外出土遺物(12)

第2表 石器・石製品一覧表

図版 番号	器 種	出土地点	法 量				石 材・産 地・生 成 年 代
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
12	凹 石	BⅡe 7住居跡	8.0	6.5	4.1	285	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
13	球状石器	BⅡe 7住居跡	5.7	4.9	5.0	105	珪質極細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
26	凹 石	BⅢb 1住居跡	10.2	6.9	3.6	240	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
27	磨 石	BⅢb 1住居跡	10.8	8.6	6.0	740	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
39	石 鏃	BⅢe 6住居跡	2.0	1.7	0.2	0.6	珪質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統
70	凹 石	BⅢf 5㉔土坑	11.0	8.5	5.3	440	軽石凝灰岩・奥羽山地・新第三系中新統
76	石 鏃	7号溝跡	1.4	1.6	0.4	0.7	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統
77	尖 頭 器	12号溝跡	2.4	2.0	0.7	3.6	チャート・北上山地・古生界
203	石 鏃	BⅡe 6	3.3	1.7	0.5	2.0	赤色凝灰岩・北上山地
204	石 槍	BⅡe 6	3.3	1.6	0.5	2.8	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統
205	石 匙	CⅢ区	5.5	5.7	1.1	24.1	粘板岩・夏油川上流・古生界
206	搔・削器	CⅣ区	7.0	5.7	1.2	37.9	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統
207	搔・削器	BⅢb 1	3.2	3.3	0.9	4.6	粘板岩・北上山地・古生界
208	搔・削器	BⅡf 8	3.2	1.9	0.7	3.2	珪質極細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系中新統
209	搔・削器	CⅣ区	3.8	2.9	0.7	13	粘板岩・夏油川上流・古生界
210	搔・削器	BⅡ区	1.7	0.9	0.4	0.4	黒曜石・夏油川扇状地段丘堆積物中
211	石 鏃	CⅢ区	7.2	3.9	1.4	39.3	珪質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統
212	石 鏃	CⅡd 9	12.0	4.1	1.7	70	粘板岩・夏油川上流・古生界
213	石 鏃	BⅡ区	9.7	4.3	1.1	70	粘板岩・夏油川上流・古生界
214	石 鏃	CⅡa 0	9.0	3.8	2.3	75	粘板岩・夏油川上流・古生界
215	石 鏃	BⅢe 0	7.4	4.2	1.6	50.3	珪質極細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系中新統
216	石 鏃	CⅣ区	23.3	10.5	2.8	940	粘板岩・夏油川上流・古生界
217	石 鏃	BⅢ区	22.2	9.7	2.4	670	粘板岩・夏油川上流・古生界
218	不定形石器	BⅢ区	4.5	4.7	1.4	30.7	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統
219	不定形石器	CⅢ区	6.8	4.2	1.4	37.4	珪質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統
220	不定形石器	BⅡf 8	5.7	4.7	1.0	19.9	珪質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統
221	不定形石器	CⅡf 5	4.0	3.5	1.0	11.2	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統
222	磨製石斧	CⅣ区	10.4	4.2	2.2	150	淡緑色凝灰岩・奥羽山地・新第三系中新統
223	磨 石	CⅠ区	15.5	4.8	1.9	230	淡緑色凝灰岩・奥羽山地・新第三系中新統
224	磨 石	不 明	14.4	6.3	3.7	495	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
225	凹 石	BⅡe 7~e 8	14.4	5.5	3.1	370	淡緑色凝灰岩・奥羽山地・新第三系中新統
226	凹 石	BⅢb 1	9.3	7.9	5.6	575	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
227	凹 石	BⅢe 5	9.6	7.3	4.8	480	花崗閃緑岩・夏油川上流・中生界
228	凹 石	BⅢe 5	10.4	8.4	5.0	480	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
229	凹 石	BⅡ区	11.8	8.6	4.5	620	花崗閃緑岩・夏油川上流・中生界
230	凹 石	BⅢe 3	9.1	8.4	5.0	520	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
231	凹 石	BⅢc 3	11.6	9.0	2.5	360	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
232	凹 石	BⅢc 0	6.4	5.9	5.4	165	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系鮮新統
233	棒状石製品	BⅢd 4	15.7	3.6	2.2	220	粘板岩・夏油川上流・古生界

V ま と め

本遺跡から検出された遺構は弥生時代の竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡2棟、墓壇3基（土壇墓2基、火葬墓1基）、陥し穴状遺構8基、土坑34基、炉跡1基、焼土遺構3基、溝跡13条で、各々の遺構については今まで述べてきた通りである。また、出土した遺物は、土器が縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器で、特に弥生土器の出土が多く、石器は石鏃、石筥、凹石などである。

ここでは検出された遺構のうち、弥生時代の竪穴住居跡、平安時代の火葬墓について若干の補足をし、まとめとしたい。

(1) 弥生時代の竪穴住居跡

弥生時代初頭の竪穴住居跡が7棟検出されている。いずれも調査区域の北側にあたる段丘の縁辺部での検出である。7棟のうち1棟は調査区域の西端部に位置しているが、残り6棟は中央部から北側にかけてまとまって位置している。

7棟の住居跡を形状、規模、炉、柱穴、壁溝、その他の項目毎にみると次のようになる。

1 形 状

平面形をほぼ特定できるのは2棟で、円形と楕円形をしている。残り5棟は柱穴配置から円形もしくは楕円形と考えられる。

2 規 模

小さいものは直径3m前後、大きいものは直径5m前後のいずれも円形である。

3 炉

土器埋設炉（2棟）、石囲炉（1棟）、地床炉（4棟）である。

4 柱 穴

7棟のうち、壁柱穴のみと考えられるものは3棟、壁柱穴がめぐるほかに炉と壁の間に主柱穴らしきものがあるもの2棟、残り2棟は詳細は不明であるが壁柱穴の可能性はある。

5 壁 溝

壁溝は全周すると考えられるもの1棟、一部にのみ巡るもの1棟である。

6 その他

B I a 6住居跡の南東側、B II c 9住居跡の南側の柱穴はそれぞれ「逆ハの字」型をしており、入り口の施設の可能性が考えられ、同様の施設はB III f 0住居跡にもある。また、B III b 1住居跡は建て替えの可能性も考えられる。

住居跡名	形 状	規 模	炉	柱穴	壁溝	その他
①B I a 6	(楕円形)	(4×5m)	地床炉	8個		入り口状施設
②B II c 9	(円 形)	(直径約3m)	地床炉	12個		入り口状施設
③B II e 7	円 形	直径約3.4m	地床炉	8個	一部	
④B III b 1	楕円形	3.6×4m	石囲い炉	10個	全周?	建て替え?
⑤B III d 5	(楕円形)	(3.2×4.1m)	地床炉	4個		
⑥B III e 6	(円形又は楕円形)	(直径約5m)	土器埋設炉	5個		
⑦B III f 0	(円 形)	(直径約5m)	土器埋設炉	8個		入り口状施設

注：表中 ○ 内は推定形又は推定値である

遺物は、7棟のうち6棟から出土している。器種は甕・浅鉢・高坏・蓋で、特に粗製の甕が多い。また、浅鉢・高坏には変形工字文が施文されている。

小田野(1987)は岩手県内で出土した弥生式土器をⅠ～Ⅴ期に分類しているが、本遺跡の堅穴住居跡から出土した土器は、小田野の分類のⅠ期(工字文、変形工字文が文様の主体を占め、大洞A'式の強い伝統を残している段階)に相当する。

岩手県内で検出された弥生時代の住居跡については小田野(1988)がまとめている。小田野は住居跡の時期を出土土器によってA～Cの3期に分類しており、本遺跡の住居跡はそのうちのA期(変形工字文を文様の主体とし一部には磨消縄文を伴う土器の時期で、大洞A'式土器に後続する。宮城県域の青木畑式・山王Ⅲ層式、青森県の砂沢式・二枚橋式などと略併行する。八起島式及びそれ以前の土器を伴う住居跡)に相当する。該期の住居跡は県北の馬場野Ⅱ遺跡君成田Ⅳ遺跡・長瀬D遺跡などや、県央の湯舟沢遺跡、沿岸の上村遺跡、北上川中流域の物見崎遺跡・上鬼柳Ⅱ遺跡で検出されており、県北ほど多く検出されている。隣接の青森・秋田両県の該期の住居跡をみると、青森県では前坂下3遺跡・上牡丹森遺跡、秋田県では地藏田B遺跡・風無台Ⅱ遺跡・湯ノ沢A遺跡・坂の上F遺跡がある。

本遺跡で検出された住居跡は7棟で、北上川中流域では物見崎遺跡(2棟)・上鬼柳Ⅱ遺跡(1棟)に次いで3番目の検出例である。また、7棟のうち2棟は壁溝が巡る住居跡である。壁溝が巡る住居跡は青森・秋田両県では多く検出されているが、岩手県においては県北地域でのみ検出されており、北上川中流域では初の検出例である。今後この地域で弥生時代の堅穴住居跡の発見がなされ、更に研究が進むことを期待したい。

(2) 火葬墓

火葬墓は調査区域北西側にあたる段丘の縁辺部から1基検出されている。土壌底部に炭化材を敷きつめ、その上に蔵骨器を倒立させており、蔵骨器内には成人3個体分の火葬人骨が埋納されている。火葬墓の周辺には焼土や灰などがみられないことから、火葬場所とは別に墓がつくられたものと思われる。また、蔵骨器内に複数の火葬人骨が埋納されていることから再葬または合葬の可能性が考えられる。時期は、蔵骨器の形状から平安時代(9世紀末から10世紀初頭)と推定される。

岩手県内の墳墓については石川(1983)がまとめている。それによると、岩手県内の墳墓は45遺跡190基あり、そのうち火葬墓は21遺跡で45例が知られており、多くは丘陵頂部や段丘縁辺部に立地している。本遺跡のように蔵骨器を伴う火葬墓は宮沢王壇、西根遺跡、大瀬川B遺跡1号・2号マウンドの4例がある。

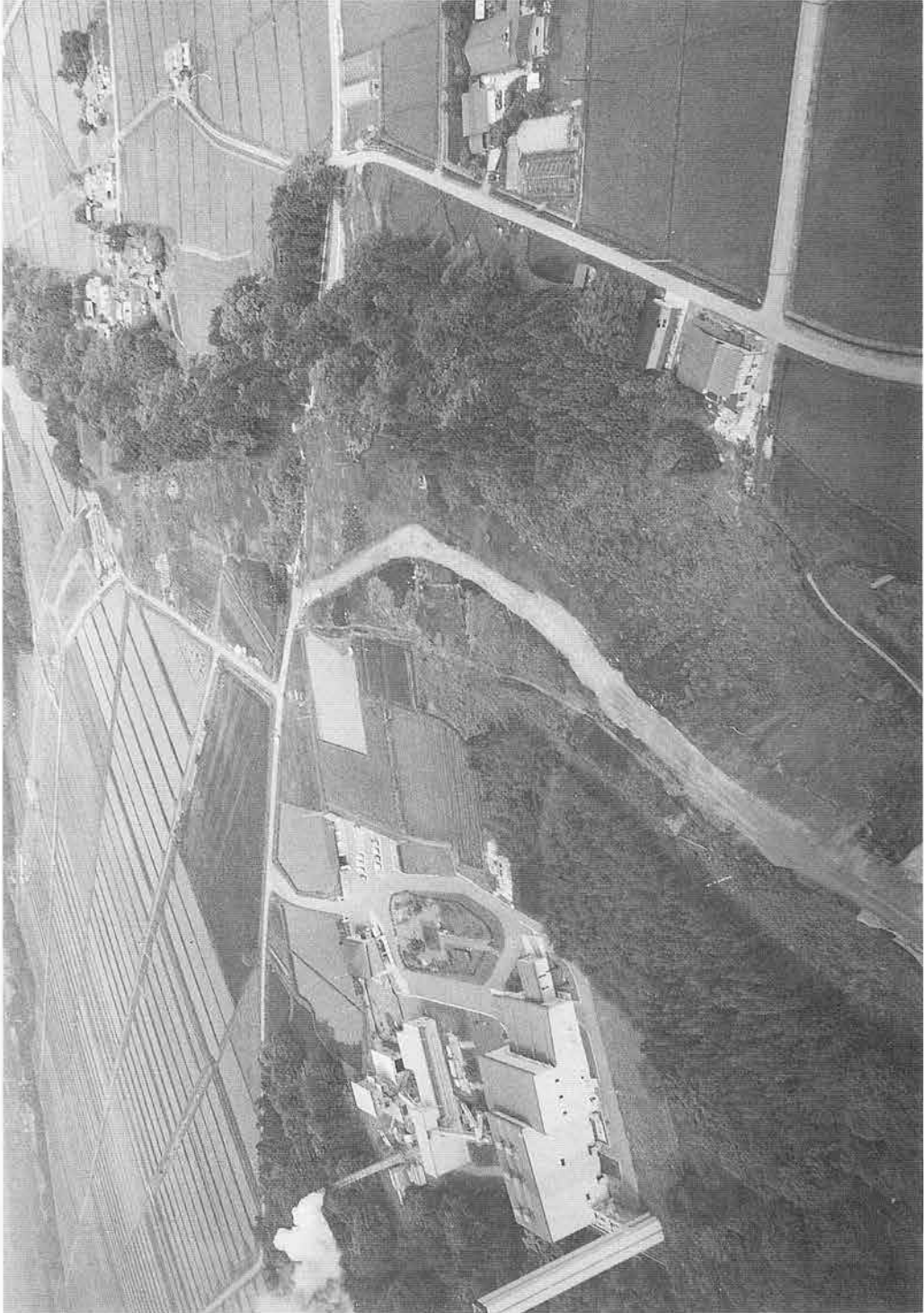
隣接の秋田県でも、蔵骨器を伴い土壌内を炭化材で覆っている火葬墓が岩土山・保土森・瀧向遺跡など数例知られており、その分布は庄内(1984)がまとめている。また、最近では小出I遺跡から蔵骨器を伴う5基の火葬墓が、待入Ⅲ遺跡から蔵骨器を伴わない19基の火葬墓がそれぞれ検出されている。特に、瀧向4号火葬墓と小出I遺跡SR06、SR10両火葬墓は蔵骨器を倒立させている。秋田県で検出されたこれらの火葬墓の時期は9世紀前半から10世紀前半である。

本遺跡の火葬墓は、蔵骨器がほぼ完形で出土しており、埋納されている火葬人骨の残存状態も良好であることから、火葬墓を研究する上で貴重な資料となるものと思われる。また、土壌内を炭化材で覆い蔵骨器を倒立させていること、時期が9世紀から10世紀にかけてであることが、秋田県の火葬墓の例と類似している。本遺跡の位置する北上市は秋田県境に近く、当時何等かの交流があったことも考えられることから、両県における葬制の関連を知る上でも貴重な資料となるものと思われる。

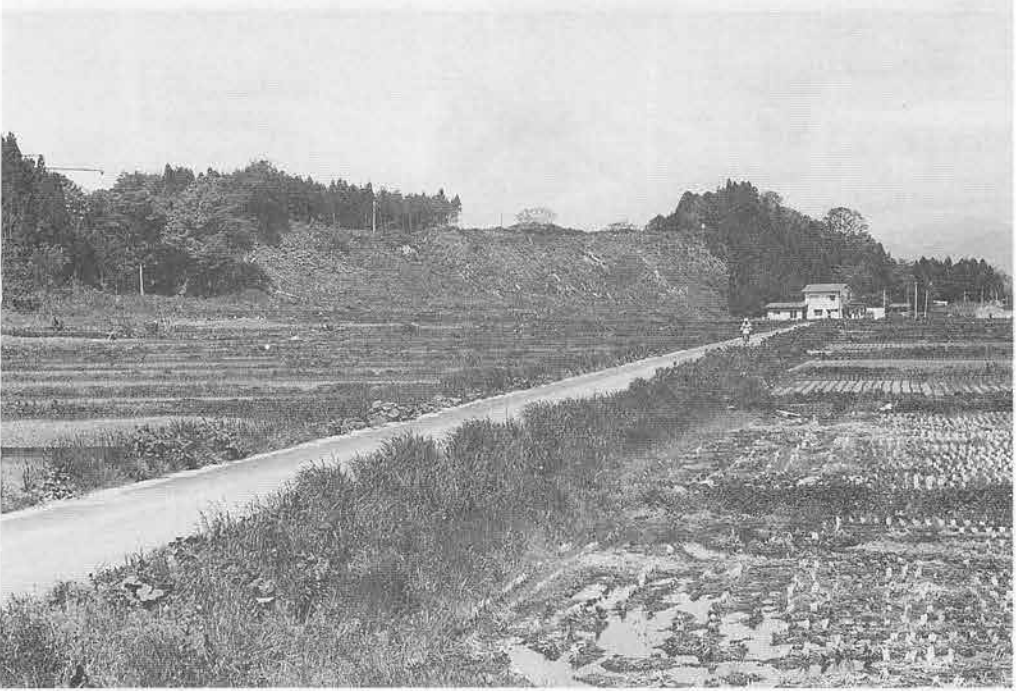
引用・参考文献

- 青森県教育委員会（1982）：「前坂下(3)遺跡」『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第71集
- 秋田県教育委員会（1991）：「小出I遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』
- 秋田県埋蔵文化財センター（1992）：「平成3年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料」
- 秋田市教育委員会（1984）：「湯ノ沢A遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 秋田市教育委員会（1985）：「坂の上F遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 秋田市教育委員会（1986）：「地藏田B遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 石川 長喜（1983）：「発掘調査された墳墓について」岩手県立埋蔵文化財センター紀要Ⅲ
- 岩手県（1961）：岩手県史 第1巻 上代篇 第一章 古墳期「県下古墳所在地名表」
- 岩手県企画開発室（1975）：「土地分類基本調査 北上」
- 岩手県教育委員会（1986）：「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」
- 岩手県教育委員会（1981）：「大瀬川A～C遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』
- 岩手県教育委員会（1982）：「西根遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』
- 岩手県埋蔵文化財センター（1981）：「長瀬D遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第22集
- 岩手県埋蔵文化財センター（1983）：「君成田IV遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第62集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1986）：「馬場野Ⅱ遺跡」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1990）：「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成元年度分）」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第147集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1990）：「物見崎遺跡・監物館跡遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第157集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1991）：「上村貝塚発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1991）：「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成2年度分）」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第159集
- 大鰐町教育委員会（1986）：「上牡丹森遺跡発掘調査報告書」大鰐町文化財調査報告書第1集
- 小田野哲憲（1987）：「岩手の弥生式土器編年試論」岩手県立博物館研究報告第5号
- 小田野哲憲（1988）：「岩手県における弥生時代の住居跡」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要Ⅷ
- 庄内 昭男（1984）：「秋田県における古代・中世の火葬墓」秋田県立博物館研究報告第9号
- 滝沢村教育委員会（1986）：「湯舟沢遺跡」滝沢村文化財報告2

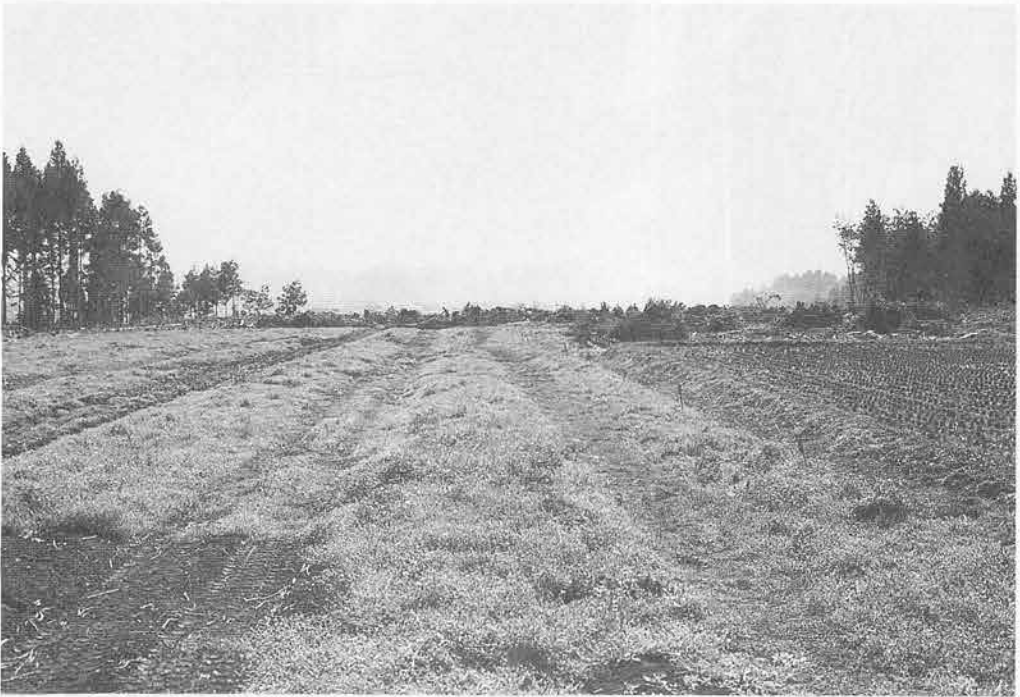
写 真 图 版



写真図版 1 遺跡全景(空中写真一東から)



遠景(東から)



近景(西から)

写真図版2 遺跡遠景・近景



平成2年度調査区域

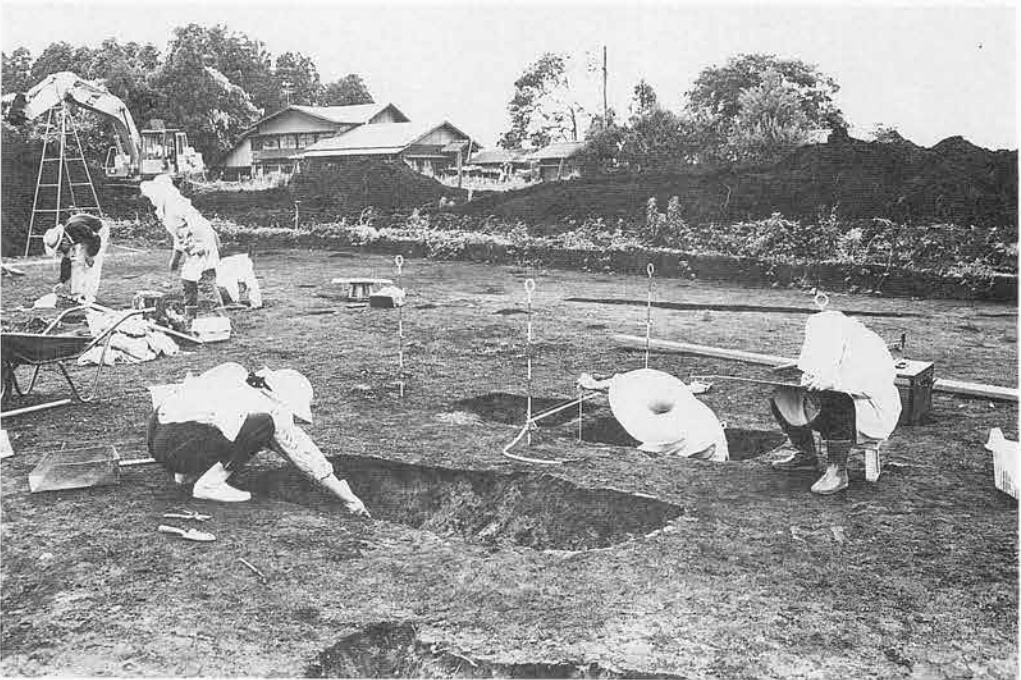


平成3年度調査区域

写真図版3 調査区域全景



基本土層(BⅢ区)(南から)



作業風景(南東から)

写真図版4 基本土層・作業風景



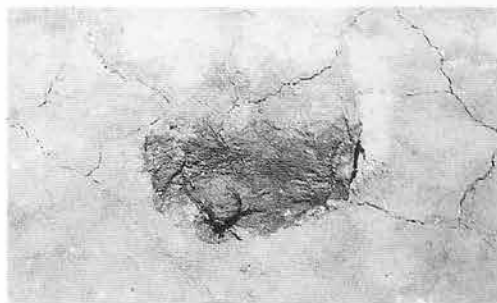
完掘全景(南東から)



地床断面(南から)



柱穴2断面(南から)



柱穴7断面(南から)

写真図版5 BIa6 住居跡



完掘全景(南から)



地床¹平面(南から)



地床¹断面(南から)

写真図版6 BIIc9 住居跡



完掘全景(南から)



埋土土層断面(南から)



上 地床切断面(南から)

右 土器出土状況(南から)



写真図版7 BIIe7 住居跡



完掘全景(南から)



埋土土層断面(南から)

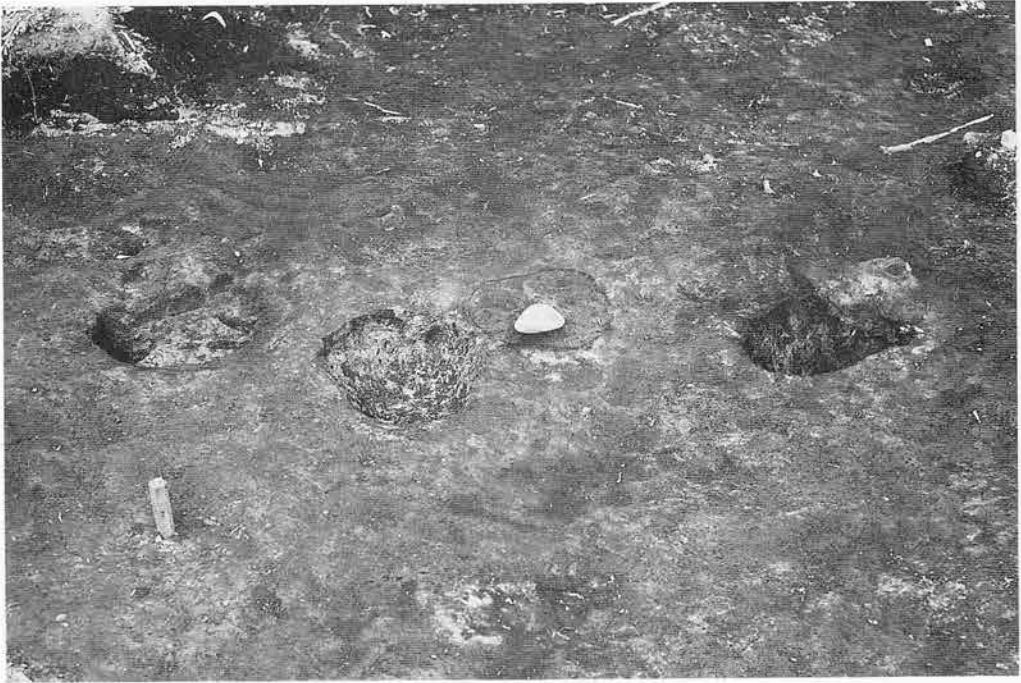


埋土土層断面(西から)

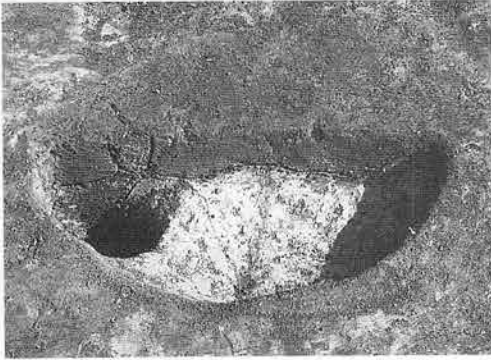


石囲炉断面(南から)

写真図版8 BIIIb1 住居跡



完掘全景(南西から)



柱穴1断面(南西から)



柱穴2断面(南西から)



上 地床炉断面(南西から)

左 地床炉平面(南西から)

写真図版9 BIII d5 住居跡



完掘全景(南から)



埋土土層断面(南西から)



土器埋設断面(南から)

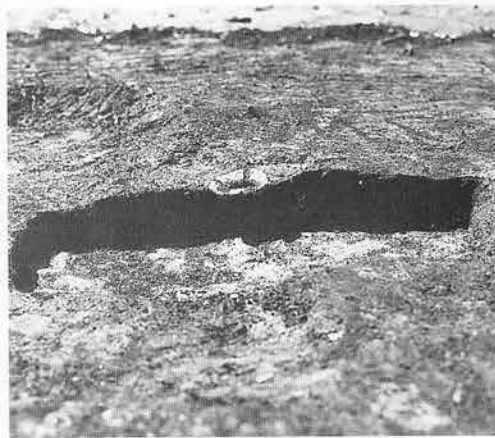
写真図版10 BIIIe6 住居跡



完掘全景(南から)



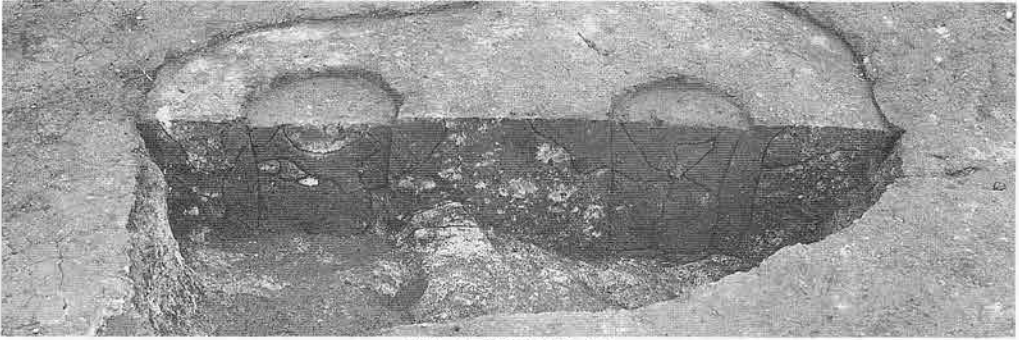
土器埋設炉平面(北東から)



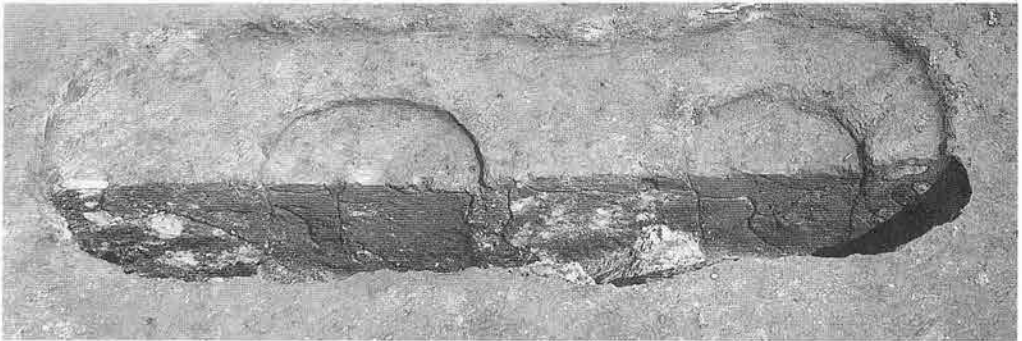
土器埋設炉断面(北東から)



検出状況(東から)



埋土土層断面(南から)

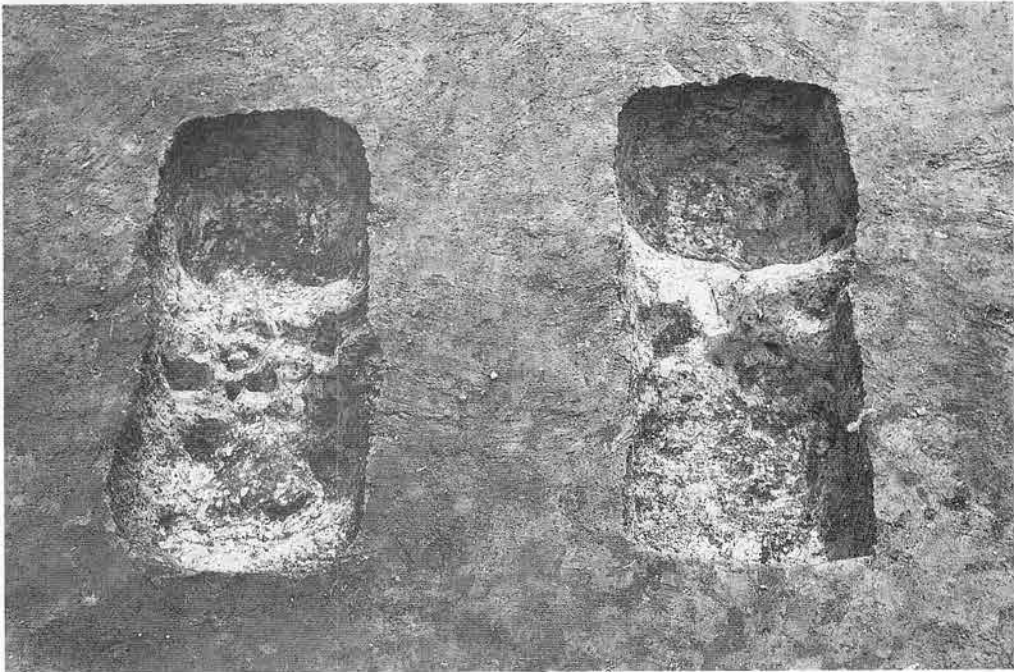


埋土土層断面(南から)

写真図版12 CIIIb2 掘立柱建物跡



CIIIb2 掘立柱建物跡完掘(東から)

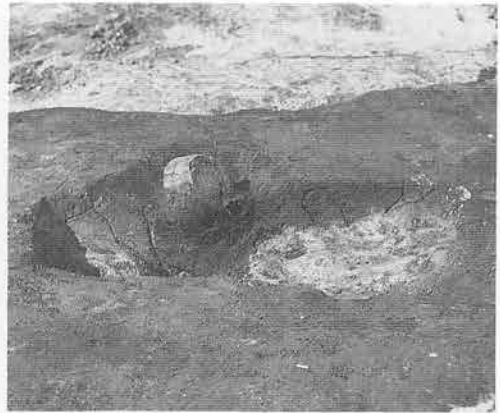


CIIIe3 掘立柱建物跡完掘(東から)

写真図版13 CIIIb2・CIIIe3 掘立柱建物跡



C1d4 土壇墓完掘全景(南東から)



断面(南から)



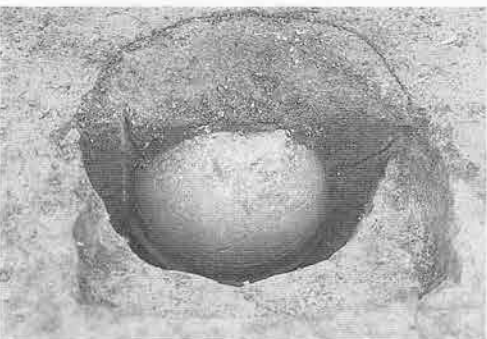
C1e7 土壇墓完掘全景(南から)



断面(南から)



遺物出土状況(東から)



B11d7 火葬墓断面(南から)

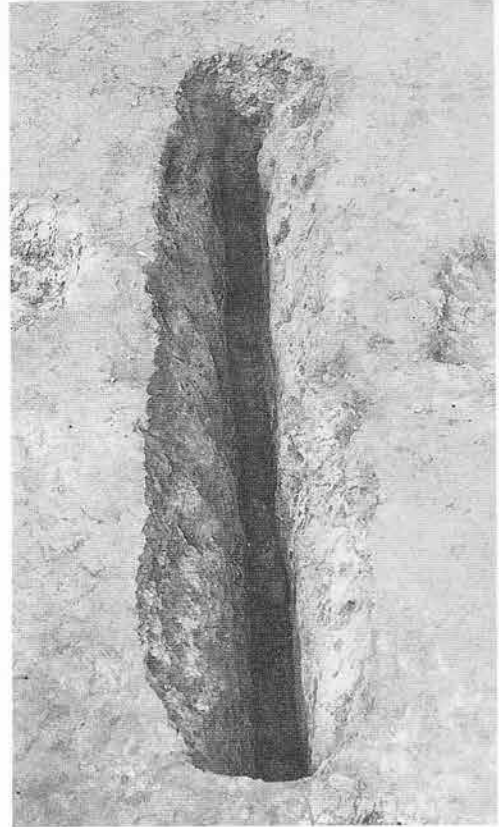


蔵骨器出土状況(南から)

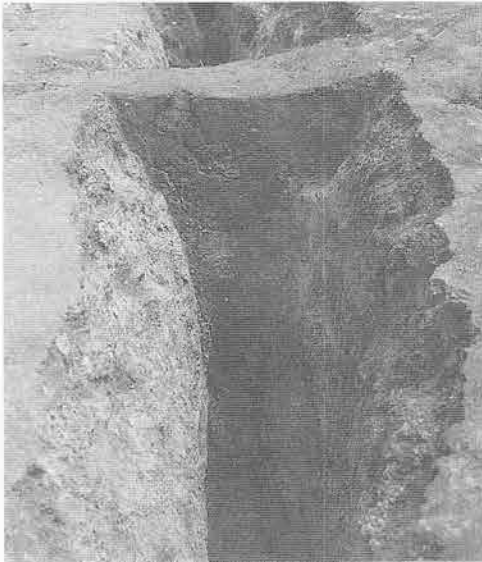
写真図版14 墓壇



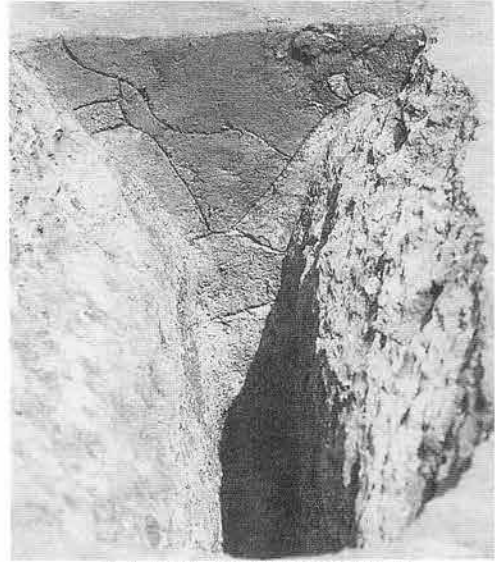
完掘全景(南西から)



完掘全景(南から)



A IIh0 陥し穴状遺構断面(南西から)

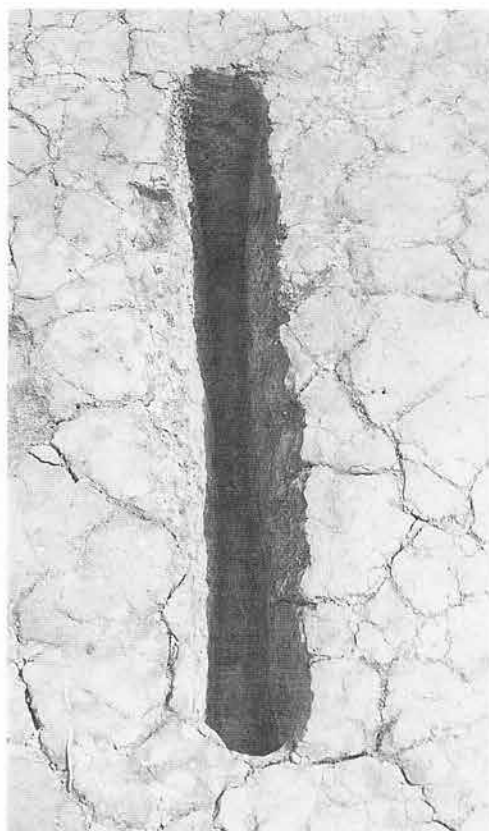


B Ig7 陥し穴状遺構断面(南から)

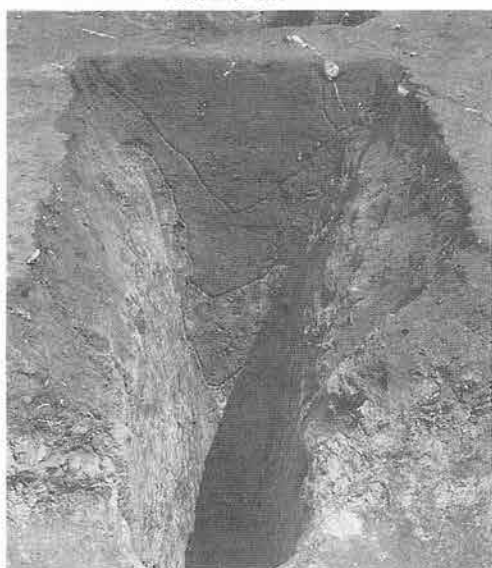
写真図版15 AIIh0・BIg7 陥し穴状遺構



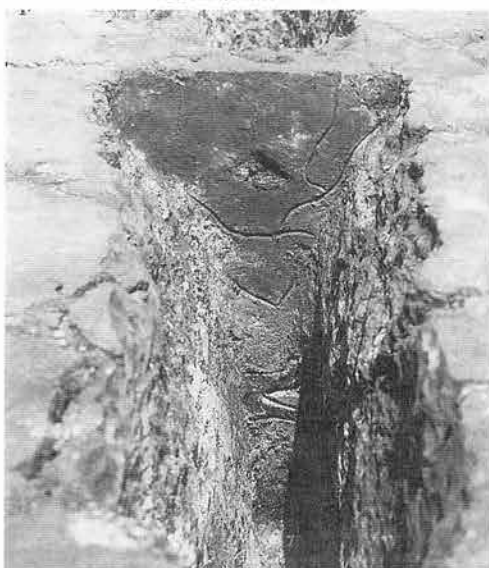
完掘全景(南西から)



完掘全景(南西から)

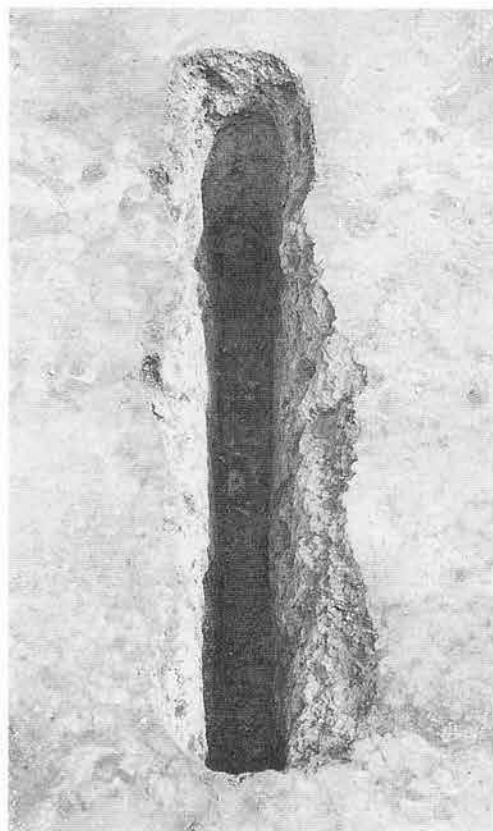


B II a9 陥し穴状遺構断面(南西から)

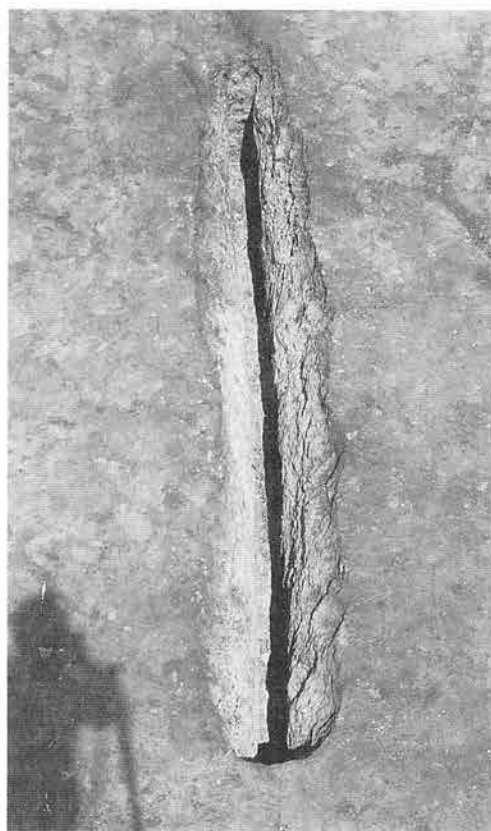


B II c2 陥し穴状遺構断面(南西から)

写真図版16 B II a9・B II c2陥し穴状遺構



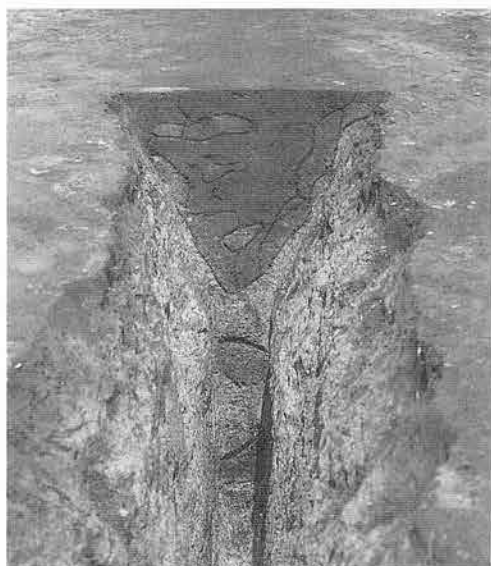
完掘全景(南西から)



完掘全景(西南西から)



B II h8 陥し穴状遺構断面(南西から)

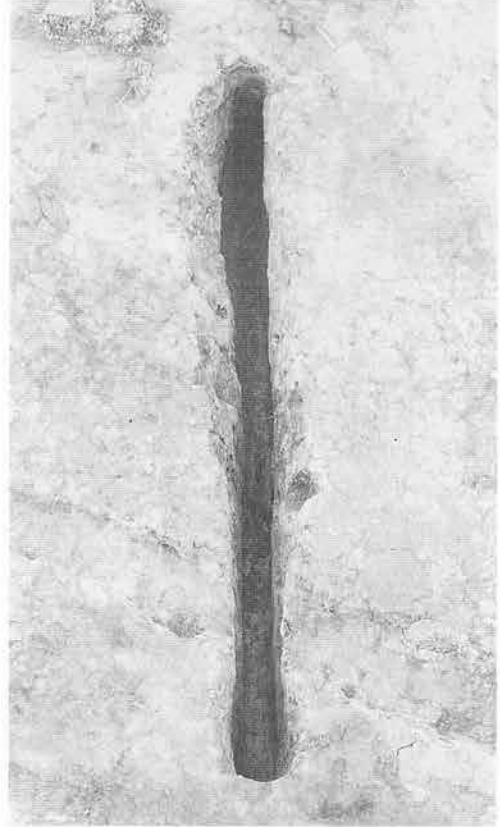


C III c2 陥し穴状遺構断面(西南西から)

写真図版17 B II h8・C III c2 陥し穴状遺構



完掘全景(南から)



完掘全景(南から)

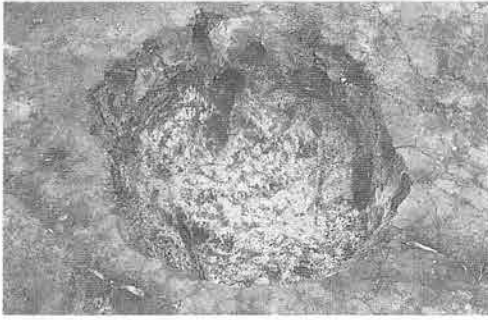


DIVb4 陥し穴状遺構断面(南から)



DVd0 陥し穴状遺構断面(南から)

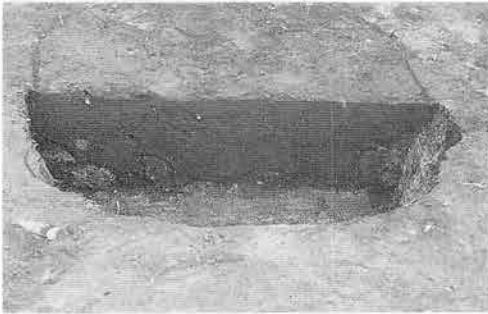
写真図版18 DIVb4・DVd0 陥し穴状遺構



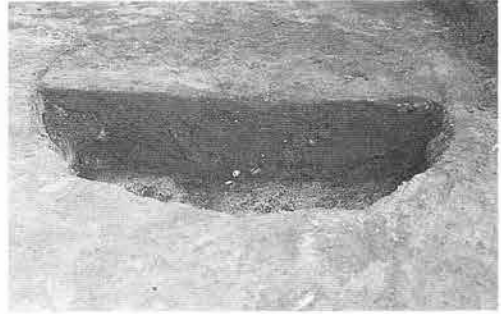
完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



AIIh0 ①土坑断面(南から)



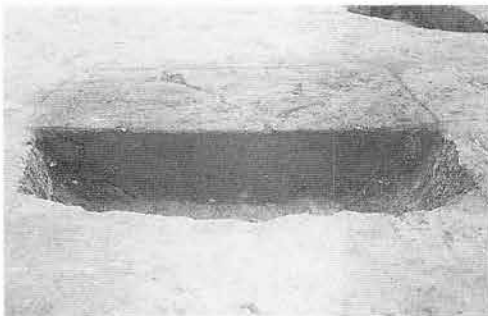
AIIh0 ②土坑断面(南から)



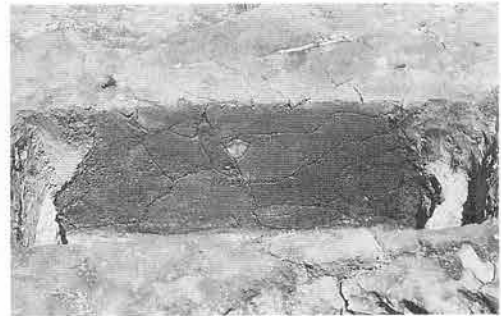
完掘全景(東から)



完掘全景(南から)



AIIh0 ③土坑断面(東から)

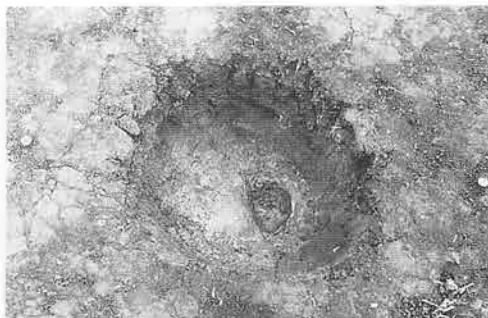


B1a6 土坑断面(南から)

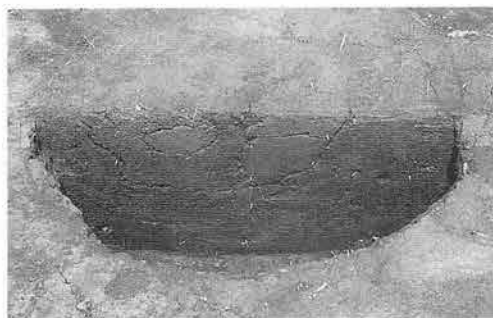
写真図版19 AIIh0①・②・③・B I a6 土坑



完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



B1b6 土坑断面(南から)



BIIc8 土坑断面(南から)



完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



BII d5 土坑断面(南から)



BII d6 土坑断面(南から)

写真図版20 B1a6・BIIc8・BII d5・BII d6 土坑



完掘全景(南から)



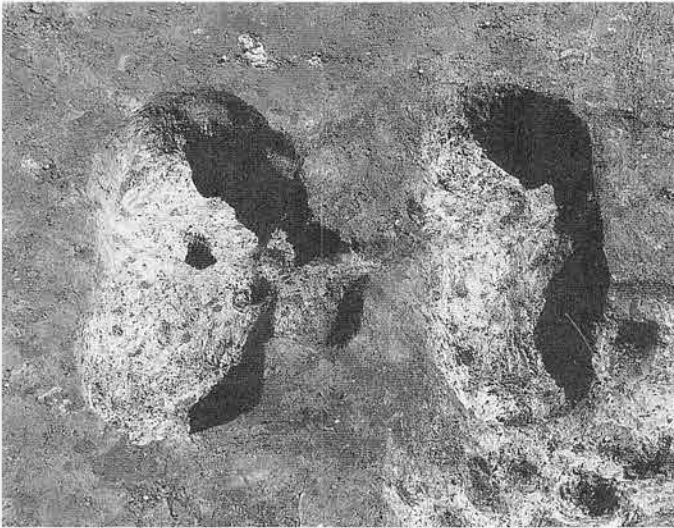
完掘全景(南から)



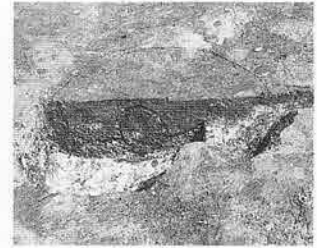
BII e6①土坑断面(南から)



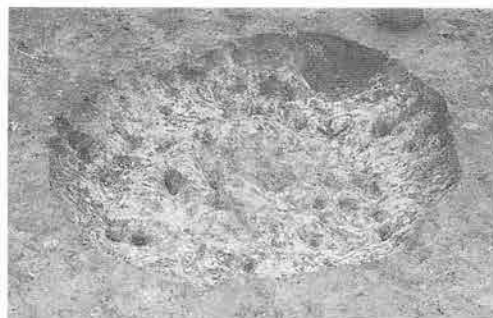
BII e6 ②土坑断面(南から)



BII f4 ①土坑(左)・BII f4 ②土坑(右)
完掘全景(南西から)



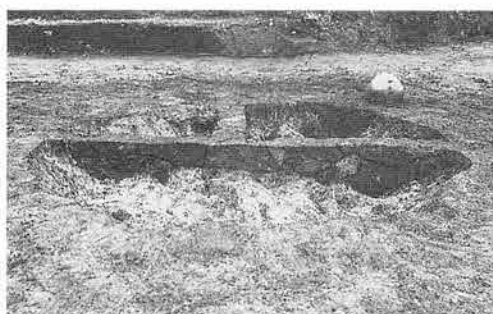
断面(南西から)
(上) BII f4 ①土坑
(下) BII f4 ②土坑



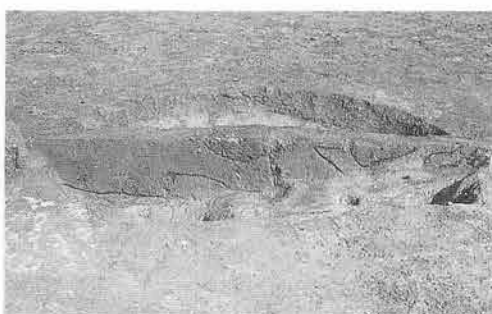
完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



BII f4 ③土坑断面(南から)



BII f8 土坑断面(南から)



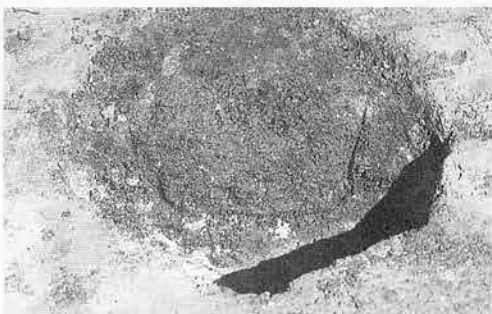
完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



BII g5 土坑断面(南から)

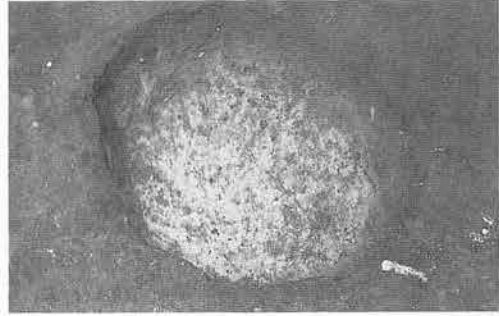


BII g8 土坑断面(南から)

写真図版22 BII f4③・BII f8・BII g5・BII g8 土坑



完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



BIIh8 土坑断面(南から)



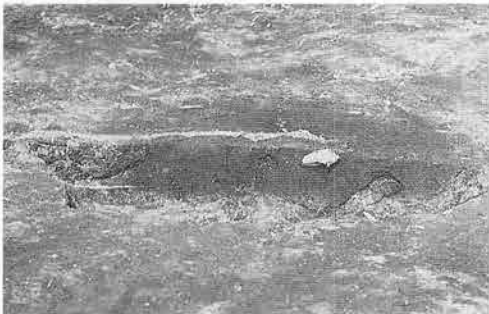
BIIIc0 土坑断面(南から)



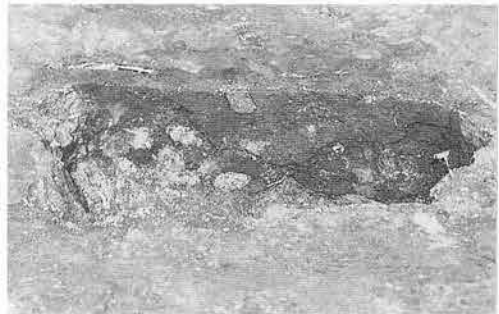
完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



BIII d3 土坑断面(南から)

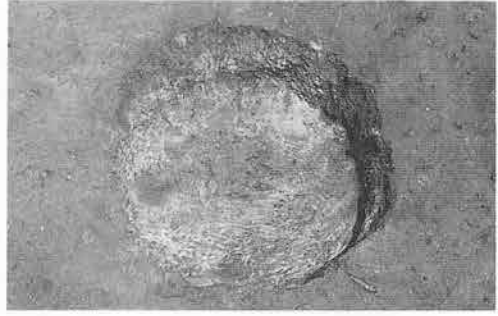


BIII e3 ①土坑断面(南から)

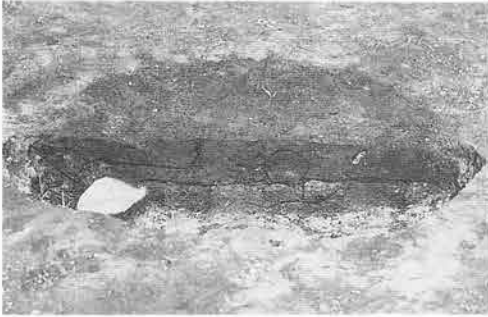
写真図版23 BII h8・BIII c0・BIII d3・BIII e3①土坑



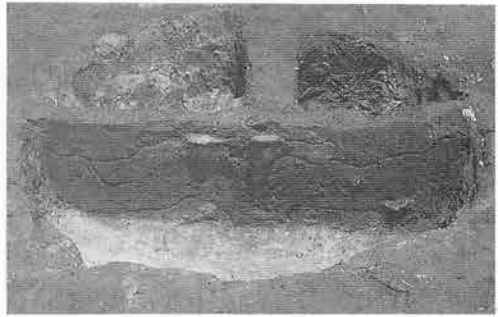
完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



BIIIe3 ②土坑断面(南から)



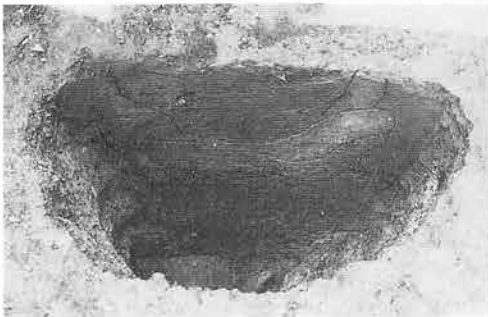
BIIIe5 土坑断面(南から)



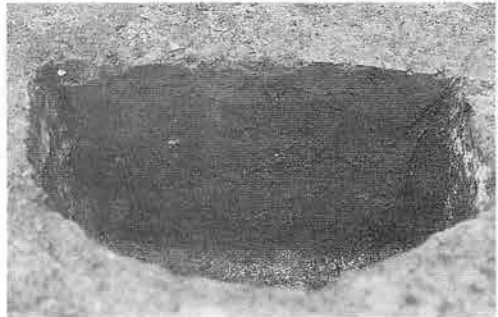
完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



BIII f5 ①土坑断面(南から)



BIII f5 ②土坑断面(南から)

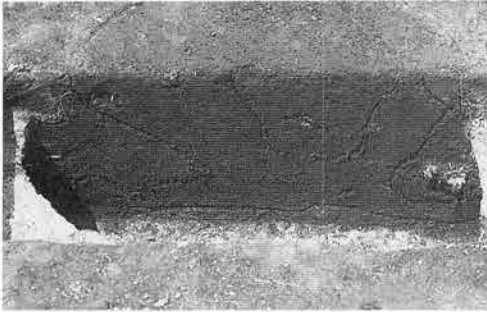
写真図版24 BIIIe3②・BIIIe5・BIII f5①・②土坑



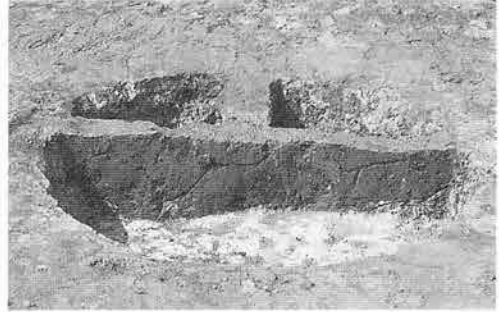
完掘全景(南から)



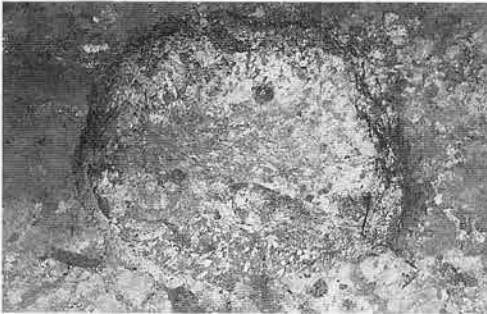
完掘全景(南から)



BIIIg3 土坑断面(南から)



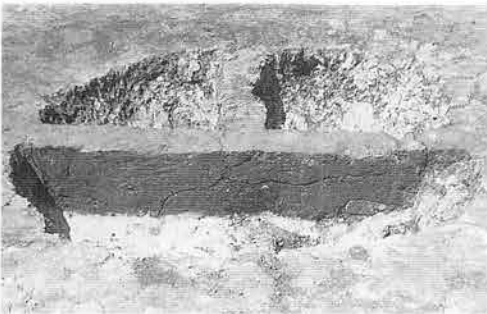
BIIIg4 土坑断面(南から)



完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



BIIIh6 土坑断面(南から)

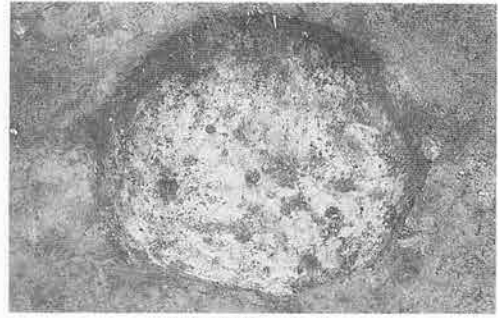


BIIIi0 土坑断面(南から)

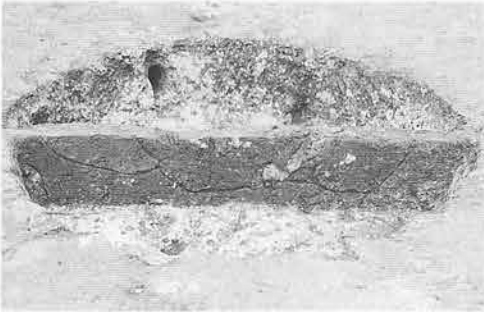
写真図版25 BIIIg3・BIIIg4・BIIIh6・BIIIi0 土坑



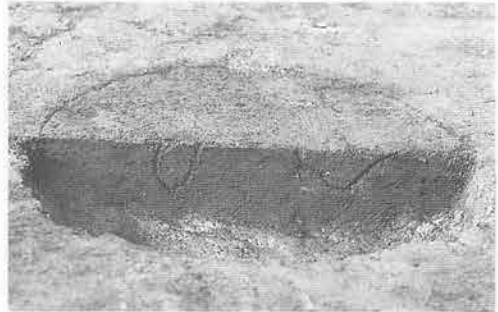
BIIIi2 完掘全景(南から)



BIIIi4 完掘全景(南から)



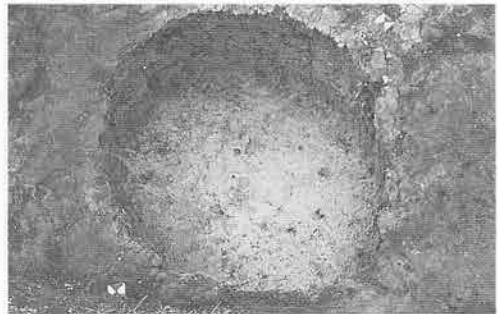
BIIIi2 土坑断面(南から)



BIIIi4 土坑断面(南から)



BIIIj1 土坑完掘全景(南から)



CIIg9 完掘全景(南から)

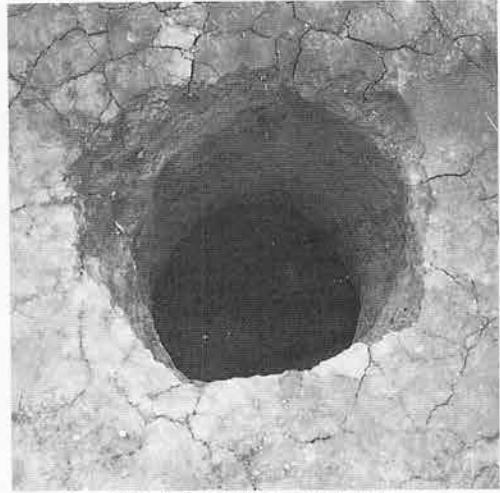


CIIg9 土坑断面(南から)

写真図版26 BIIIi2・BIIIi4・BIIIj1・CIIg9 土坑



完掘全景(南から)



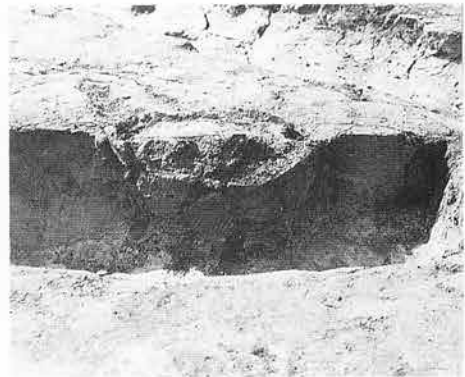
DIVc6 土坑完掘全景(南から)



CIIIb4上坑断面(南から)



BIIa0 炉跡平面(南東から)



断面(南東から)

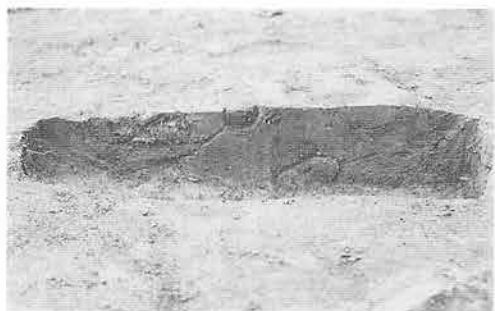
写真図版27 CIIIb4・DIVc6 土坑、BIIa0炉跡



1号焼土平面(南から)

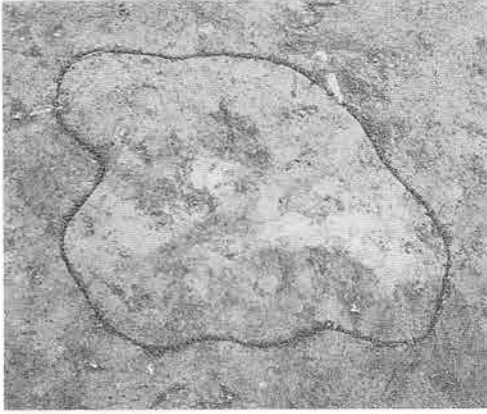


1号焼土断面(南から)



上 2号焼土断面(北西から)
左 2号焼土平面(北西から)

写真図版28 1・2号焼土



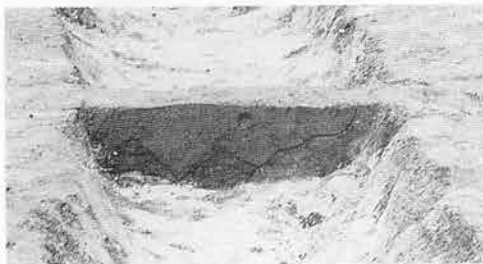
上 3号焼土断面(南東から)
左 3号焼土平面(南東から)



完掘全景(南から)



完掘全景(南から)



1号溝跡断面C-C'(南から)

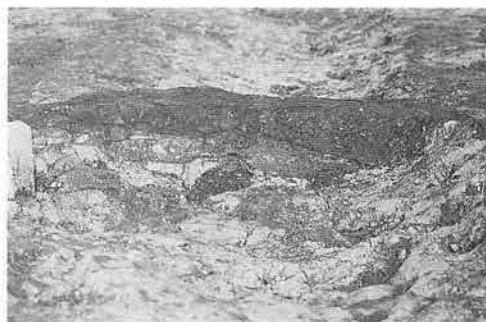


2号溝跡断面C-C'(南から)

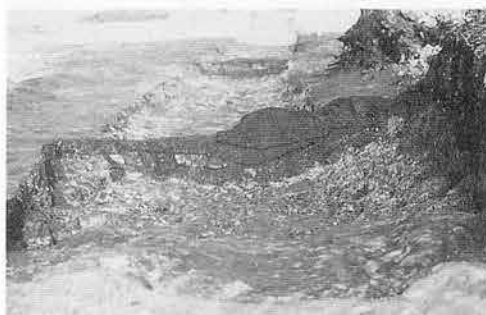
写真図版29 3号焼土、1・2号溝跡



3号溝跡 完掘全景(西から)



断面D-D'(西から)



断面B-B'(西から)



4号溝跡 完掘全景(南から)



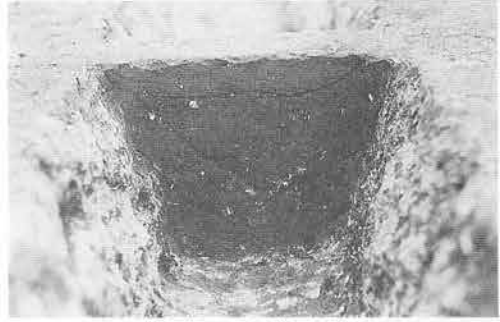
断面B-B'(南から)



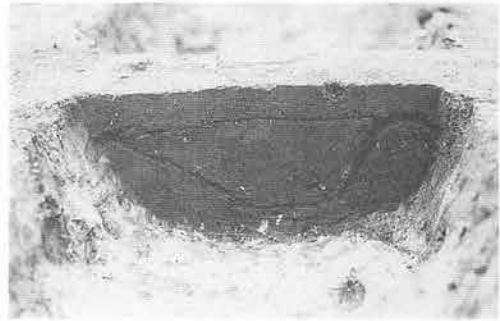
断面A-A'(南から)



5号溝跡 完掘全景(北西から)



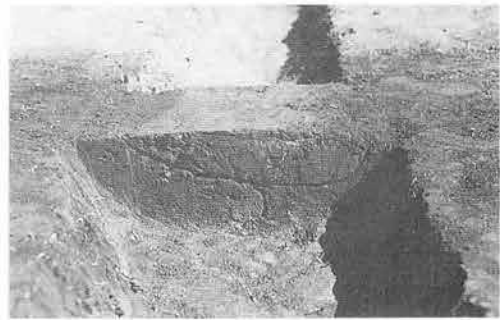
断面B-B'(北西から)



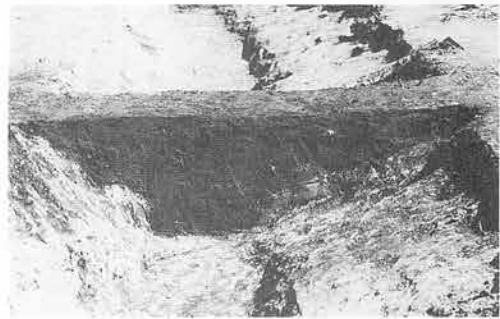
断面A-A'(北西から)



6号溝跡 完掘全景(北西から)



断面C-C'(北西から)



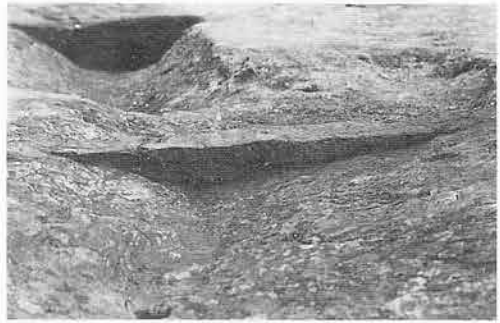
断面B-B'(北西から)



7号溝跡 完掘全景(北西から)



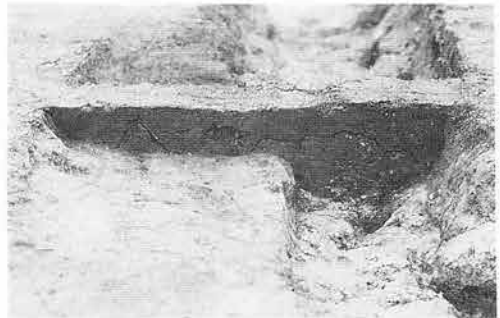
断面7 B-7 B'(北西から)



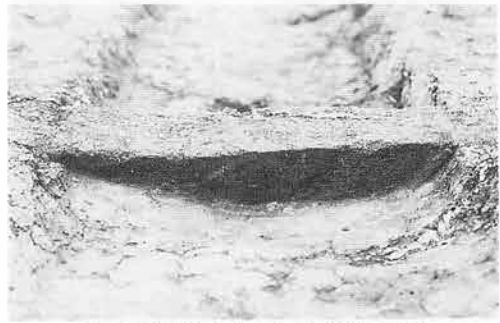
断面7 A-7 A'(北西から)



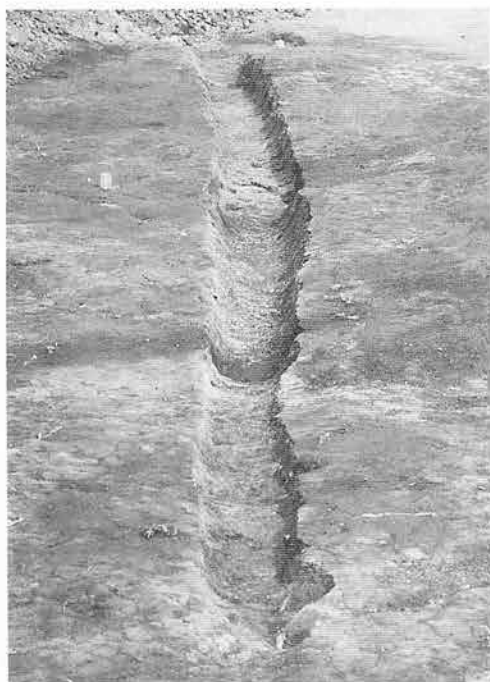
8・9号溝跡 完掘全景(南西から)



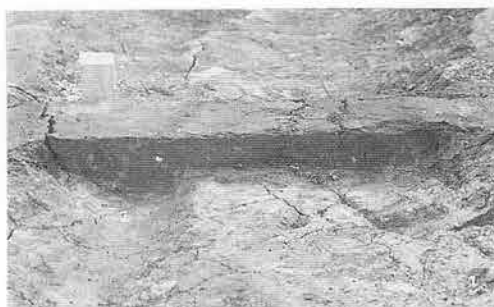
8・9号溝跡断面8 B-8 B'(南西から)



8号溝跡断面8 A-8 A'(南西から)



11号溝跡 完掘全景(北西から)



10号溝跡断面10B-10B'(北東から)



11号溝跡断面C-C'(北西から)



12号溝跡 完掘全景(東から)



断面B-B'(南東から)



断面A-A'(東から)



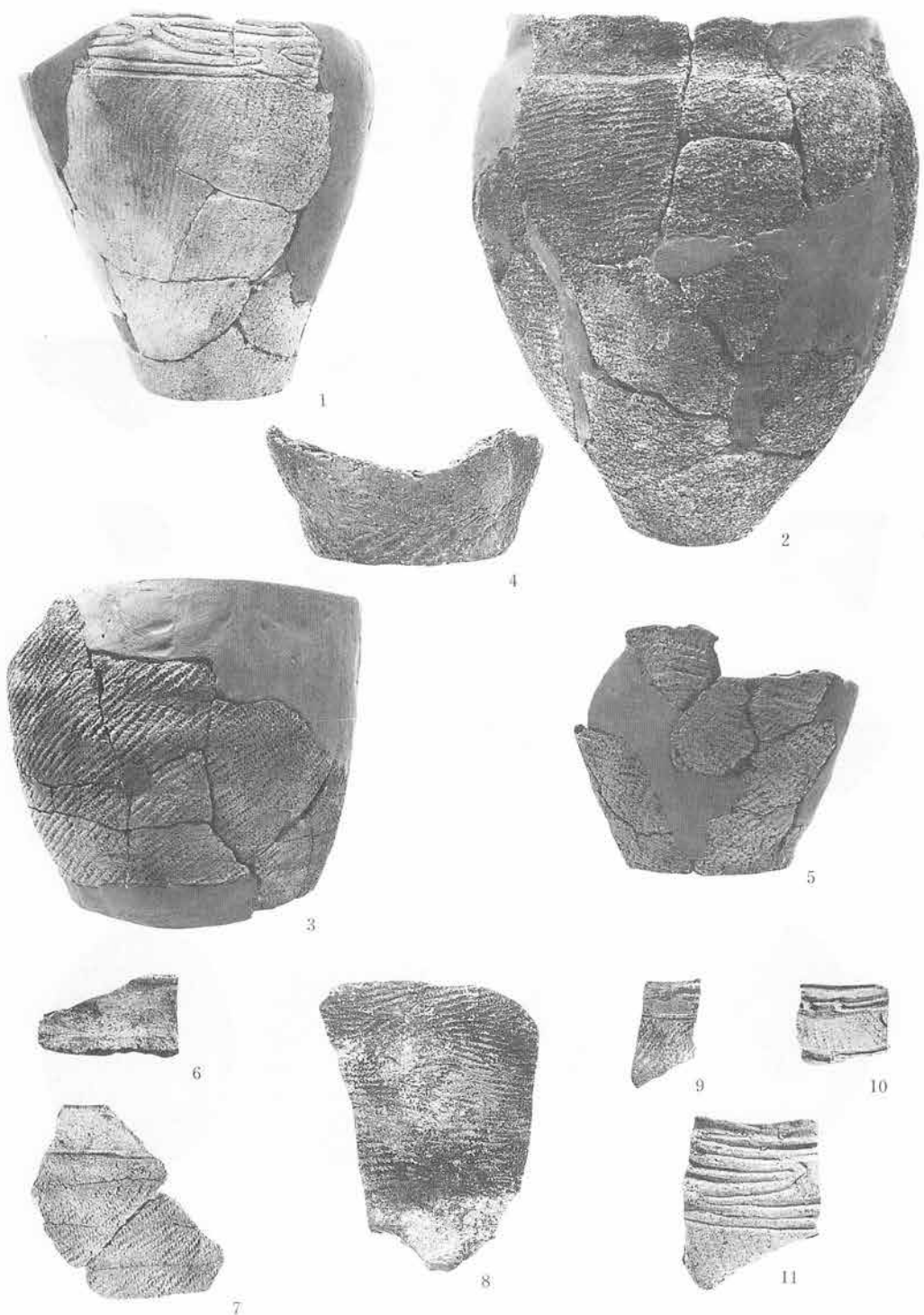
12・13号溝跡 完掘全景(東から)



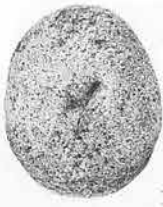
12号溝跡断面C-C'(東から)



13号溝跡断面A-A'(東から)



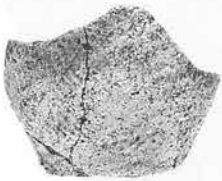
写真図版35 遺構内出土遺物(1)



12



13



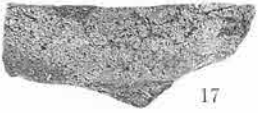
14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



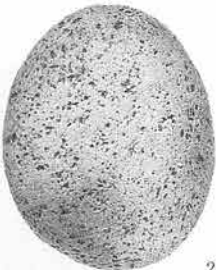
24



25



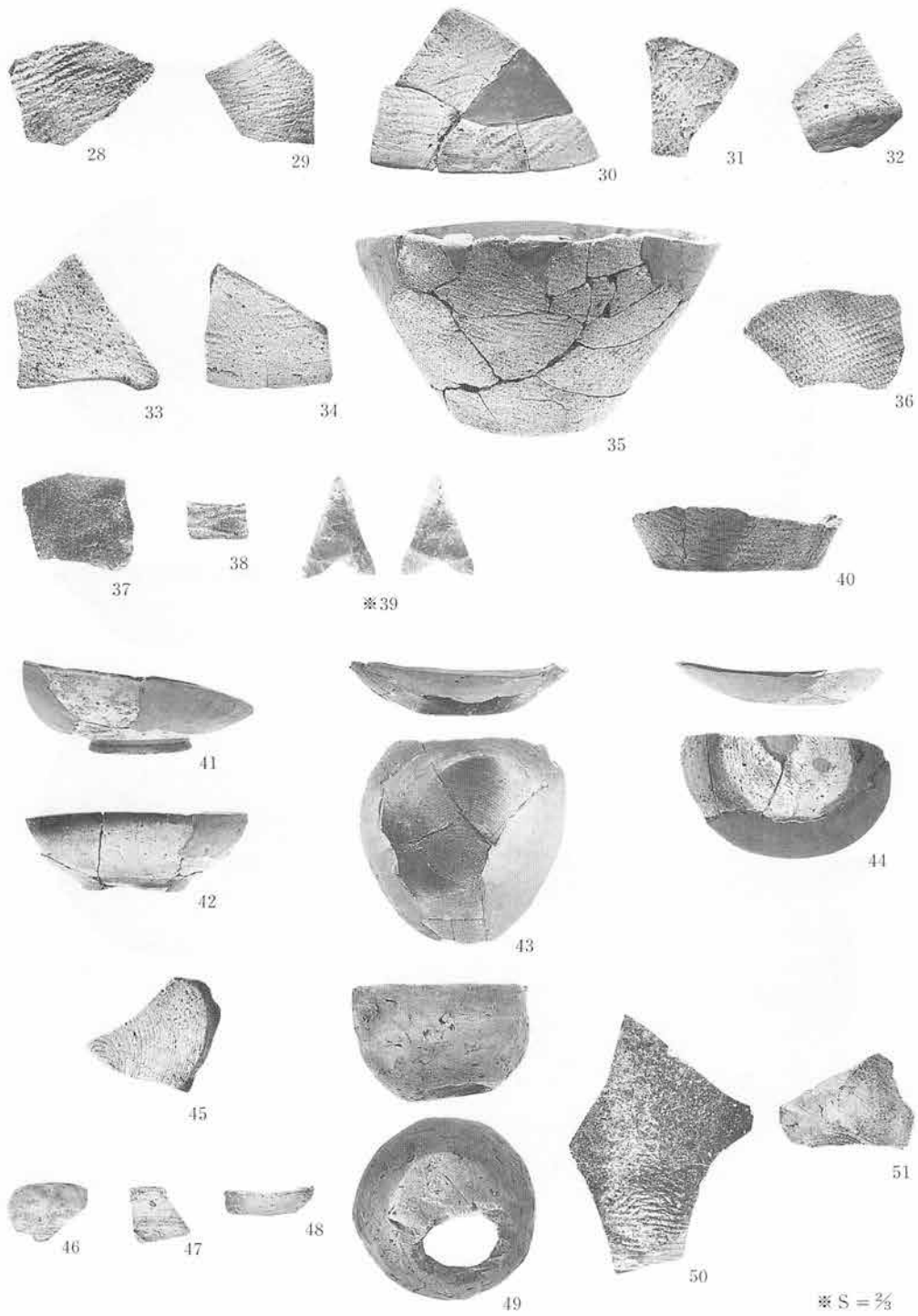
26



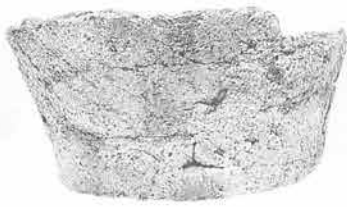
27



写真図版36 遺構内出土遺物(2)



写真図版37 遺構内出土遺物(3)



53

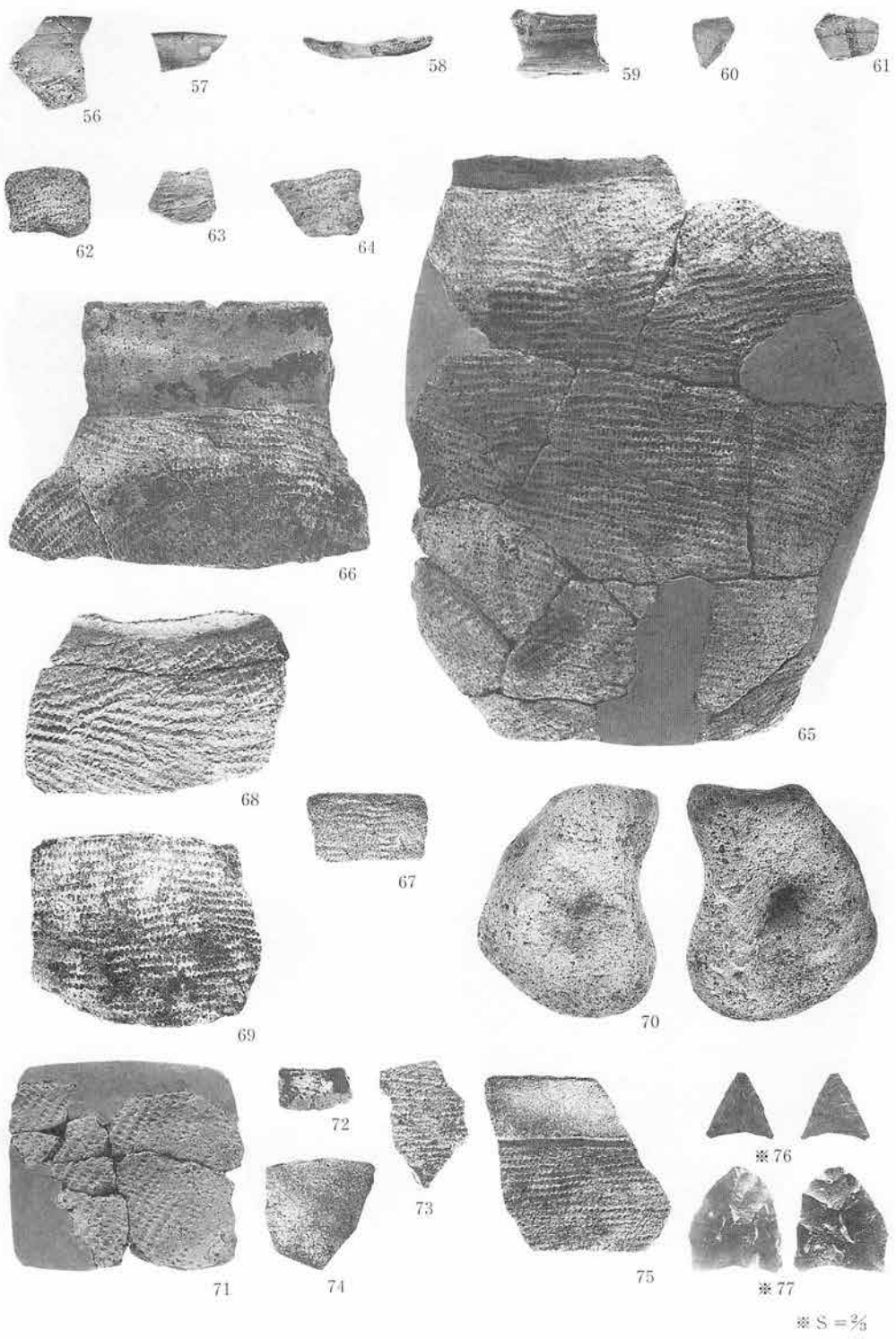
52



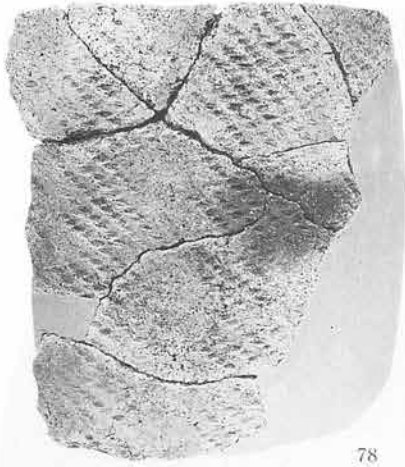
54

55

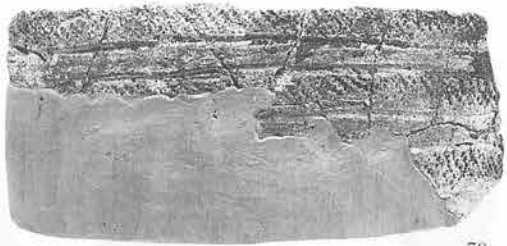
写真図版38 遺構内出土遺物(4)



写真図版39 遺構内出土遺物(5)



78



79



80



81



82



83



84



85

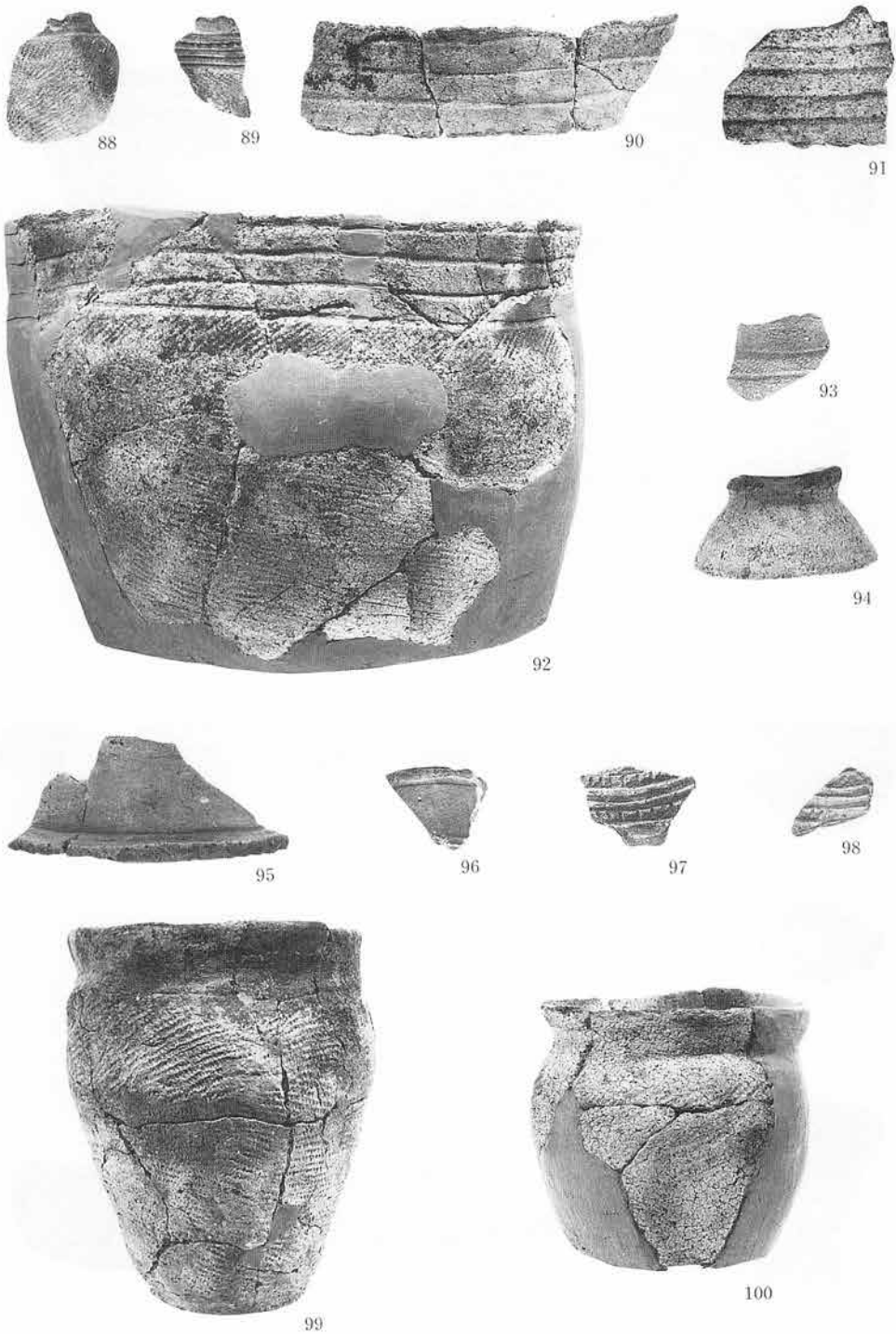


87



86

写真図版40 遺構外出土遺物(1)



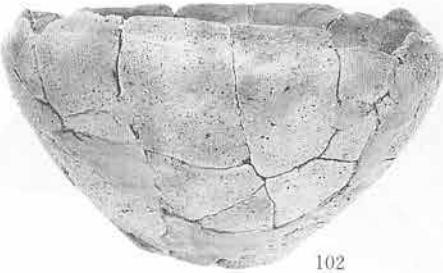
写真図版41 遺構外出土遺物(2)



101



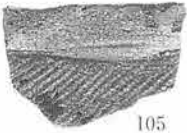
103



102



104



105



106



107



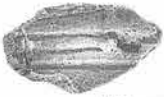
108



109



110



111



112



113



114

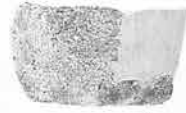


115

写真図版42 遺構外出土遺物(3)



116



117



118



119



120



121



122



123



124



127



125



126



128



129



130



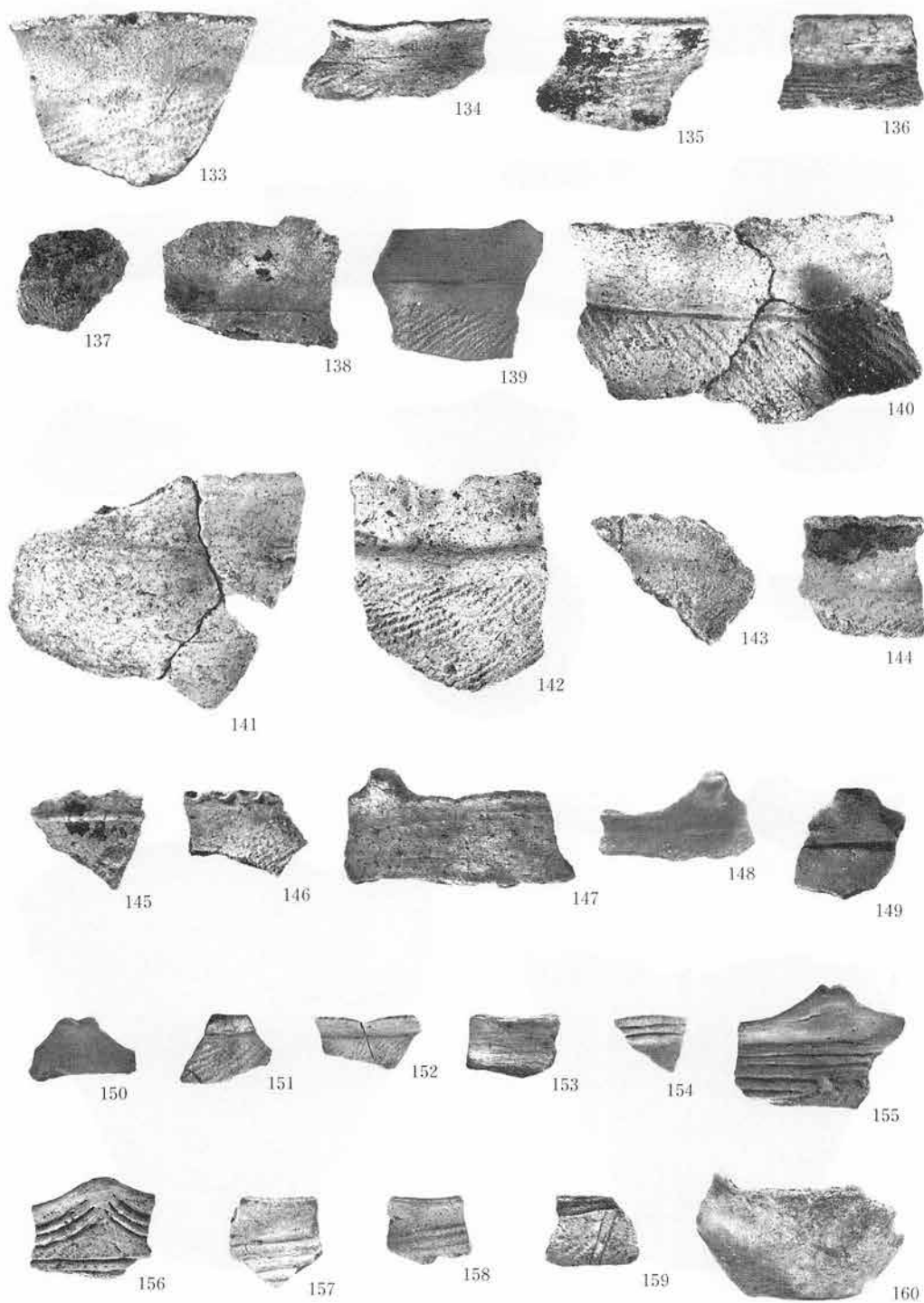
131



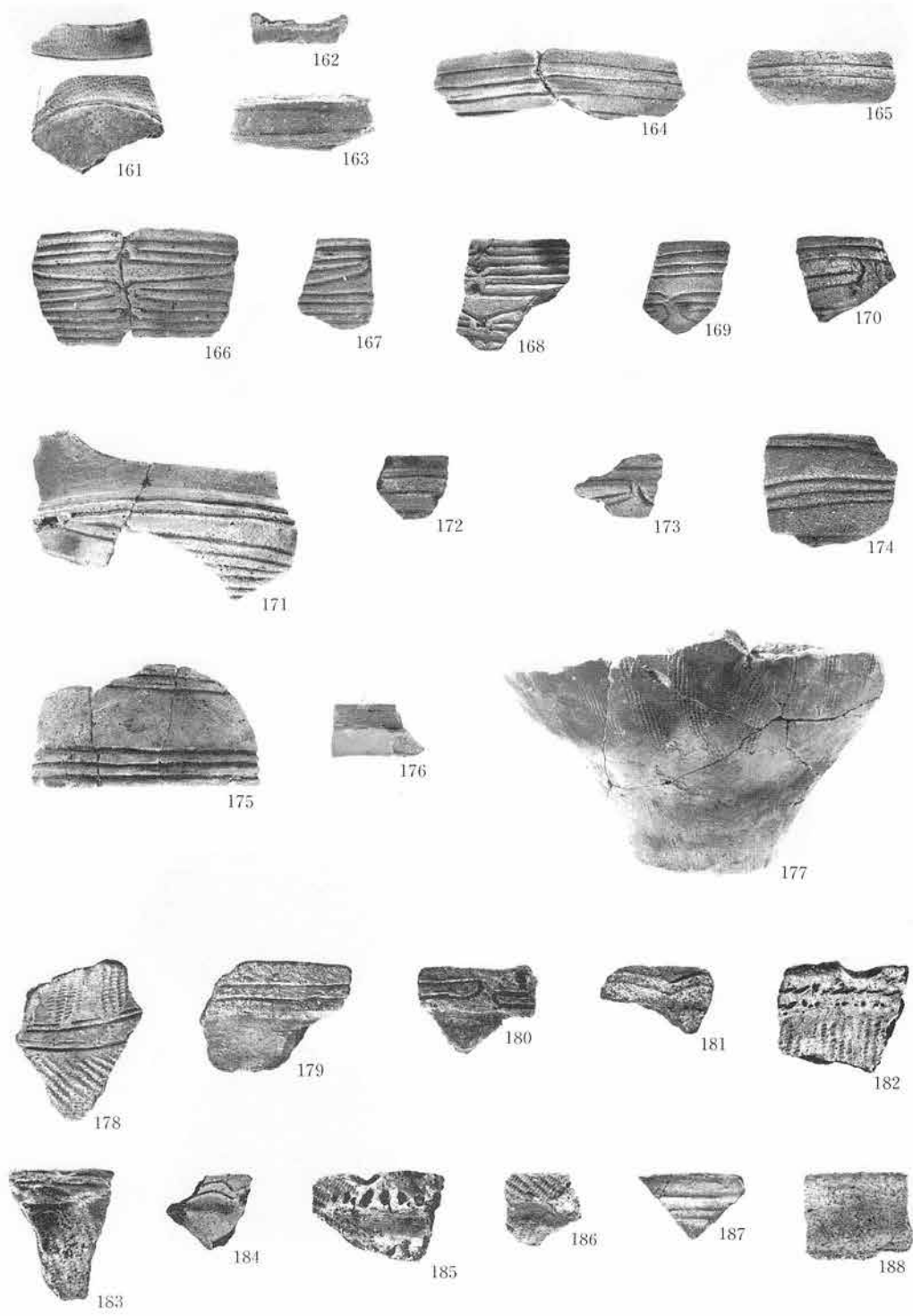
* 132

* S = 1/4

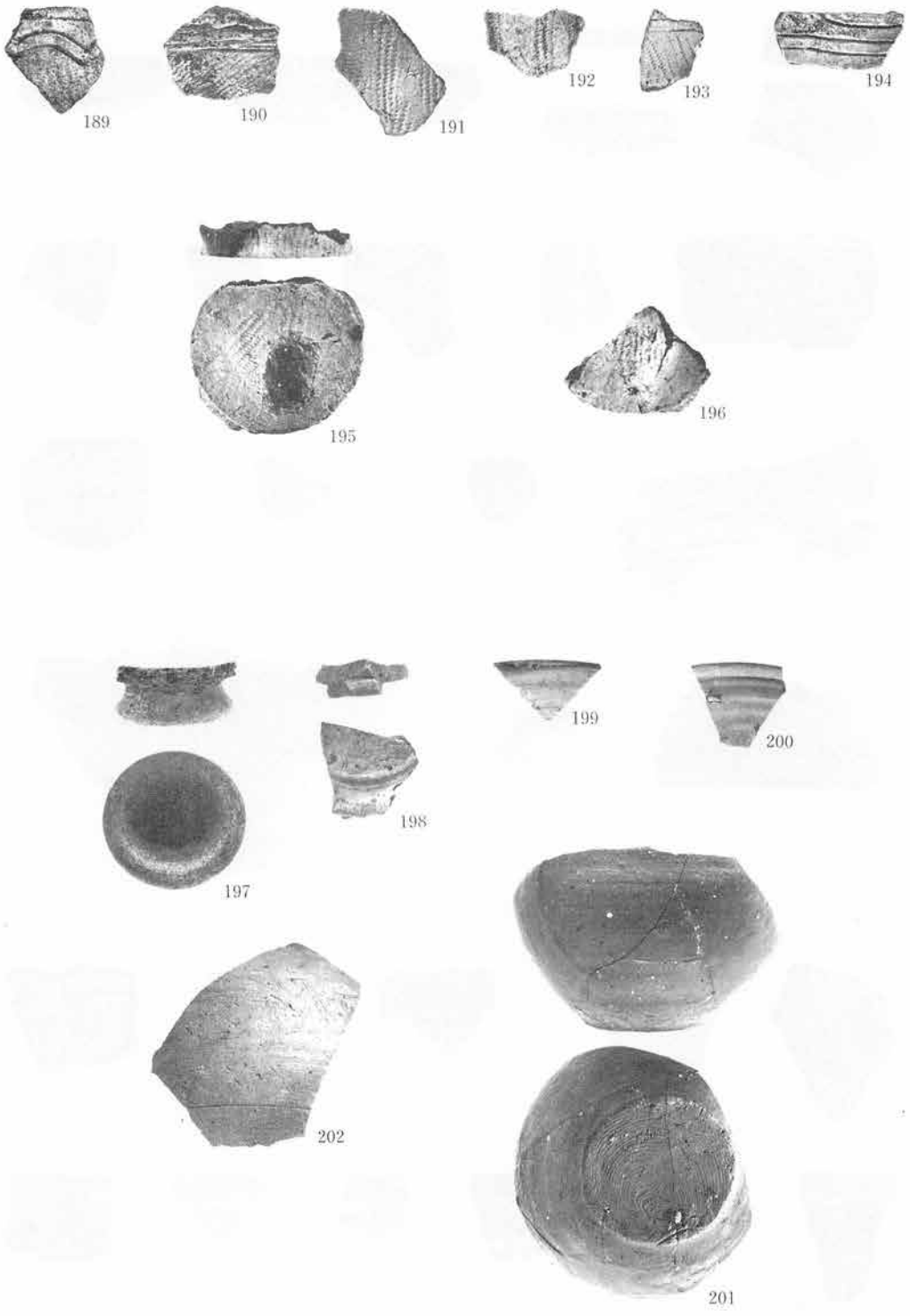
写真図版43 遺構外出土遺物(4)



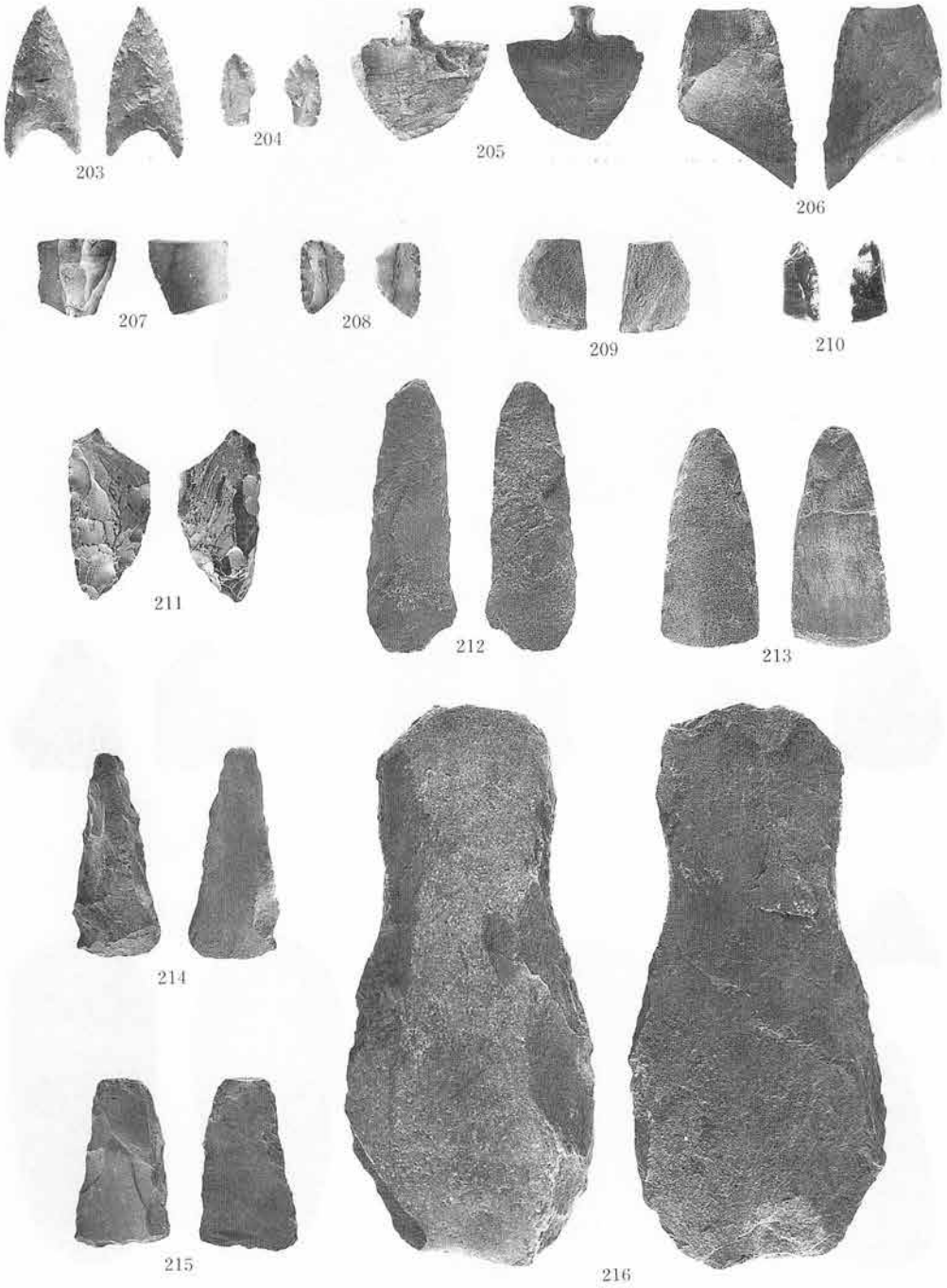
写真図版44 遺構外出土遺物(5)



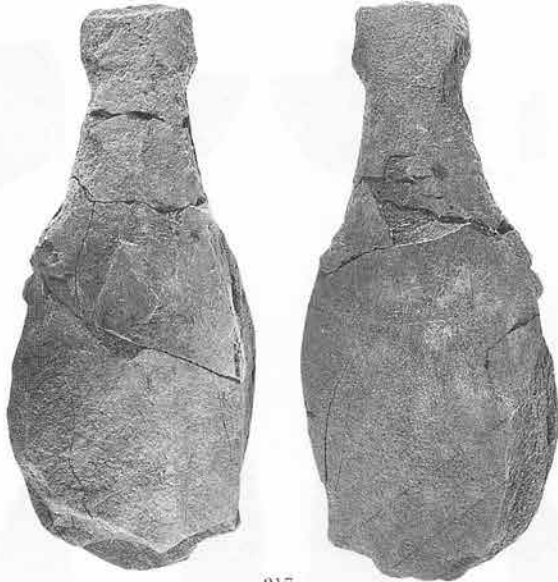
写真図版45 遺構外出土遺物(6)



写真図版46 遺構外出土遺物(7)



写真図版47 遺構外出土遺物(8)



217



218



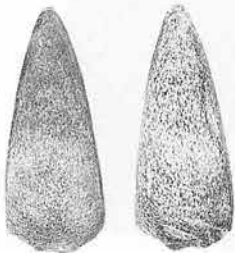
219



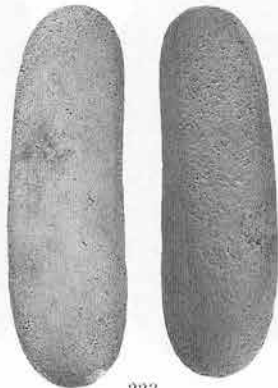
220



221



222

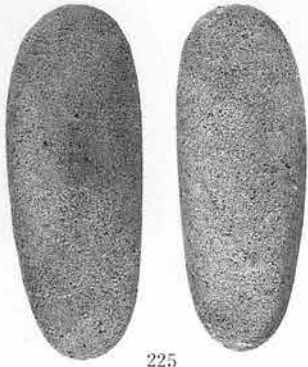


223

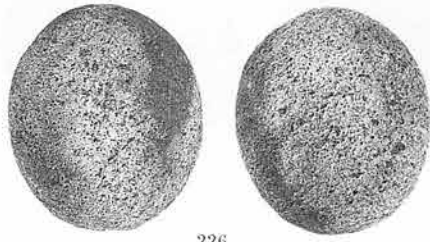


224

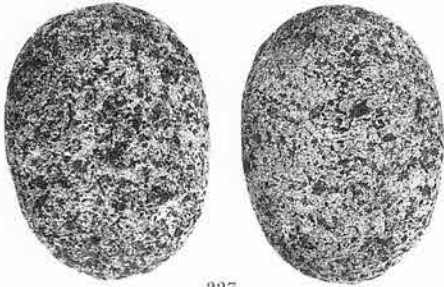
写真図版48 遺構外出土遺物(9)



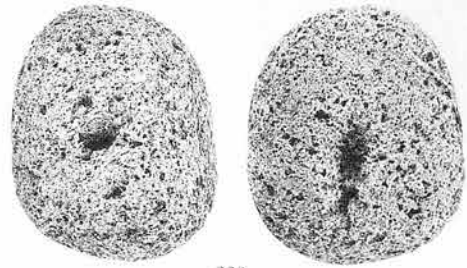
225



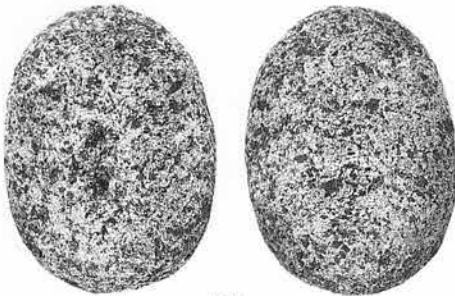
226



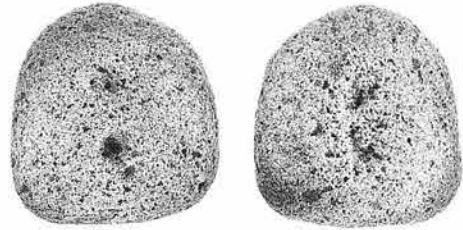
227



228

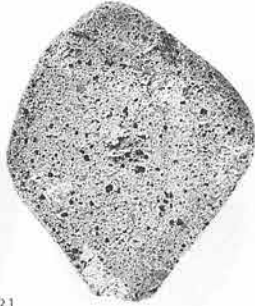


229



230

写真図版49 遺構外出土遺物(10)



231



232



233

写真図版50 遺構外出土遺物(11)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 小笠原 喜 一
 副 所 長 高 橋 敬 明

[管理課]

管理課長(兼) 高 橋 敬 明
 課長補佐 森 岡 陽 一
 主 事 佐 藤 理

嘱 託 根 橋 文 一
 " 吉 田 十 次
 運 転 技 士 佐 藤 春 男
 兼 務 員

[調査課]

調査課長 村 上 康 昭
 課長補佐 鈴 木 恵 治
 " 三 浦 謙 一
 主任文化財 高橋 與右エ門
 専門調査員 工 藤 利 幸
 " 中 川 重 紀
 " 藤 村 敏 男
 " 高 橋 義 介
 " 高 橋 正 之
 " 渡 辺 洋 一
 " 佐々木 清 文
 文化財 斎 藤 實
 専門調査員 佐 藤 隆
 " 千 葉 孝 雄
 " 斎 藤 博 司
 " 東海林 隆 幹
 " 佐々木 弘
 " 川 村 均
 " 鈴 木 貞 行
 " 伊 東 格
 " 斎 藤 邦 雄
 " 神 敏 彦
 " 佐々木 信 一
 " 小 原 眞 一
 " 酒 井 宗 孝

文 化 財 松 本 建 速
 専門調査員 " 笹 平 克 子
 " 花 坂 政 博
 " 佐々木 務
 " 金 子 昭 彦
 " 濱 田 宏
 " 羽 柴 直 人
 " 星 雅 之
 " 高 木 晃
 " 鎌 田 勉
 期 限 付 鎌 田 精 造
 專 門 職 員 " 阿 部 勝 則
 " 千 葉 悟
 " 熊 谷 博 由
 " 新 倉 信 一 郎
 " 山 口 博 英
 " 小 山 内 透
 " 柳 田 磨
 " 田 中 元 明
 " 菅 原 敬 悦
 " 工 藤 剛 司
 " 高 橋 英 樹
 " 溜 浩 二 郎
 " 佐 藤 修 一

[資料課]

資料課長 村 松 義 夫
 文化財 高 橋 一 浩
 専門調査員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第179集

上鬼柳 I 遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成4年11月25日

発行 平成4年11月30日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡 11-185

TEL (0196) 38-9001・9002

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020 盛岡市本町通 2-13-8

TEL (0196) 23-3351